

館報 2008 57

# ANNUAL REPORT

OF BRIDGESTONE MUSEUM OF ART & ISHIBASHI MUSEUM OF ART

石橋財団 ブリヂストン美術館  
石橋財団 石橋美術館





館報 2008 57

# ANNUAL REPORT

OF BRIDGESTONE MUSEUM OF ART & ISHIBASHI MUSEUM OF ART

石橋財団 ブリヂストン美術館

石橋財団 石橋美術館

館報57号(2008年度)

編集・発行

石橋財団ブリヂストン美術館  
〒104-0031 東京都中央区京橋1-10-1

石橋財団石橋美術館  
〒839-0862 福岡県久留米市野中町1015

印刷  
株式会社昭和堂

2009年3月発行

Annual Report of Bridgestone Museum of Art &  
Ishibashi Museum of Art No. 57 (2008)

Edited and published by

Bridgestone Museum of Art, Ishibashi Foundaion  
1-10-1, Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo 104-0031, Japan

Ishibashi Museum of Art, Ishibashi Foundation  
1015, Nonaka-machi, Kurume-shi, Fukuoka-ken 839-0862, Japan

Printed by  
Showado Co., Ltd.

©2009  
Bridgestone Museum of Art,  
Ishibashi Museum of Art,  
Ishibashi Foundation



1	設立趣旨、機構・運営	4
	Brief Histories of the Museums, Organization and Management	5
2	展覧会	
	• プリヂストン美術館	
	・ 特別展	6
	・ 特集展示	10
	・ テーマ展示	15
	・ 拡大常設展	19
	• 石橋美術館	
	・ 特別展	25
	・ 交換展	33
	・ 企画展	37
3	教育普及	
	• プリヂストン美術館	51
	• 石橋美術館	55
4	入場者数	61
5	新収蔵作品 New Acquisitions	63
6	新収図書	65
7	修復記録	66
8	作品貸出記録	
	• プリヂストン美術館	72
	• 石橋美術館	74
9	刊行物一覧	76
10	研究報告	
	• 坂本繁二郎と禅のテキスト	
	貝塚 健	84
	• 日本におけるピカソの受容と歴史的回顧 — 影響、批評、収集の軌跡	
	塚田美香子	96
11	美術館案内 Guide to the Museums	115
12	石橋財団職員	116

# 設立趣旨

## ブリヂストン美術館

ブリヂストン美術館は、株式会社ブリヂストンの創業者・石橋正二郎(1889-1976)が多年にわたって蒐集愛蔵した内外の美術品を、社会公共のため、広く一般の鑑賞に供し、文化向上の一端に貢献したいとの趣旨に基づき、1952(昭和27)年1月8日、ブリヂストンビルディング竣工とともに同ビル内に開設されたものである。その後1956(昭和31)年4月に設立された財団法人石橋財団がその経営を継承し、1961(昭和36)年9月には同財団が石橋正二郎から所蔵美術品の寄贈を受けた。なお、2003(平成15)年1月に一階部分の増床工事を行い、ティールームを開設した。

## 石橋美術館

石橋美術館は、石橋正二郎が1956(昭和31)年4月26日、同社の創立25周年を記念して、社会公共の福祉と文化向上のために、郷土久留米市に寄贈した石橋文化センターの中心施設である。1977(昭和52)年、石橋正二郎の遺族の寄付により増改築が行われ、同年4月以降、久留米市の要請により、石橋財団がその管理運営に当たっている。

なお、本館に付随する別館は、1995(平成7)年1月8日、石橋正二郎によって蒐集された石橋コレクションのうち、書画・陶磁器類を収蔵展示する施設として石橋幹一郎により久留米市に建設寄贈され、一年余の養生期間を経て1996(平成8)年10月17日に開館した。

# 機構・運営

石橋財団 (2008年12月31日現在)

理事長	石橋 寛						
理事	鵜澤昌和	加嶋昭男	中山 暁	平野 実	加瀬英明	島田紀夫	
監事	湯浅達祐	滝口勝昭					
評議員	石井公一郎	高碓芳郎	高階秀爾	石樽和夫	遠藤長夫	村上 浩	小林 忠
	石橋知子	水戸岡鋭治					

## 美術館運営委員会

委員長	石橋 寛					
委員	高階秀爾	富山秀男	小林 忠	島田紀夫	平野 実	中山 暁

## 寄付助成委員会

委員長	鵜澤昌和				
委員	加嶋昭男	村上 浩	平野 実	島田紀夫	

常務理事 中山 暁

## 事務局

事務局長 遠藤長夫

## ブリヂストン美術館

館長 島田紀夫

## 石橋美術館

館長 平野 実



---

## Brief Histories of the Museums

### Bridgestone Museum of Art

On January 8, 1952, ISHIBASHI Shojiro (1889-1976), the founder of the Bridgestone Corporation, wishing to promote cultural development in Japan, opened to the public a museum of art within the newly-completed Bridgestone Building under the name of the “Bridgestone Gallery”. The works of art, both Japanese and foreign, which he had collected over the years formed the nucleus of the exhibits. In April 1956, the Ishibashi Foundation was established to take over the management of the Gallery, and in September 1961, ISHIBASHI donated the works in the Gallery to the Foundation. In January 1968, the English name was changed from the “Bridgestone Gallery” to the “Bridgestone Museum of Art”. In January 2003, the ground floor was enlarged and a tea room was opened.

### Ishibashi Museum of Art

On April 26, 1956, in commemoration of the 25th anniversary of the Bridgestone Corporation, ISHIBASHI Shojiro donated the Ishibashi Cultural Center to his home town of Kurume to render a public service and promote cultural development. The Ishibashi Museum of Art (originally the Ishibashi Art Gallery) is the principal institution in the Center. In 1977, the Museum building was enlarged and renovated, thanks to a contribution from the Ishibashi family, and in April of the same year the city of Kurume entrusted the Ishibashi Foundation with the management of the Museum.

On January 8, 1995, ISHIBASHI Kan'ichiro, son of ISHIBASHI Shojiro donated to the city of Kurume a new museum especially designated to exhibit Shojiro's collection of Asian Arts, such as brush painting, calligraphy, porcelain works. It has been open to the public since October 17, 1996.

## Organization and Management

Ishibashi Foundation

(As of December 31, 2008)

President of the Board of Directors		ISHIBASHI Hiroshi		
Directors	UZAWA Masakazu	KASHIMA Akio	NAKAYAMA Akira	HIRANO Minoru
	KASE Hideaki	SHIMADA Norio		
Auditors	YUASA Tatsusuke	TAKIGUCHI Katsuaki		
Council Members	ISHII Koichiro	TAKASAKI Yoshiro	TAKASHINA Shuji	ISHIKURE Kazuo
	ENDO Takeo	MURAKAMI Hiroshi	KOBAYASHI Tadashi	ISHIBASHI Tomoko
	MITOOKA Eiji			
Executive Committee of the Museums				
Chairman	ISHIBASHI Hiroshi			
Members	TAKASHINA Shuji	TOMIYAMA Hideo	KOBAYASHI Tadashi	SHIMADA Norio
	HIRANO Minoru	NAKAYAMA Akira		
Program Development Grant Committee				
Chairman	UZAWA Masakazu			
Members	KASHIMA Akio	MURAKAMI Hiroshi	HIRANO Minoru	SHIMADA Norio
Managing Director	NAKAYAMA Akira			
Administration				
Executive Secretary	ENDO Takeo			
Bridgestone Museum of Art				
Director	SHIMADA Norio			
Ishibashi Museum of Art				
Director	HIRANO Minoru			

## 〈特別展〉

### 岡鹿之助展

2008年4月26日(土)－7月6日(日)

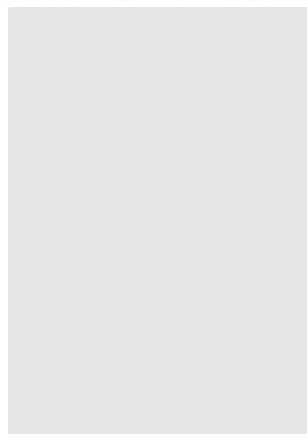
会場：第4－10室

主催：石橋財団プリヂストン美術館

概要：岡鹿之助(1898－1978)の代表作品を、「海」「堀割」「献花」「雪」「燈台」「発電所」「群落と廃墟」「城館と礼拝堂」「融合」の9つの章に分け、全貌を紹介。これらのテーマは、岡が終生こだわり続けてきたもの。その展開、変奏、組み合わせを探究した。

出品内容：油彩70点

入場者総数：30,761人(1日平均496人)



展覧会ポスター

### 出品目録：

#### 1章 海

1. 《信号台》 / 1926年 / 油彩・カンヴァス / 目黒区美術館
2. 《魚》 / 1927年 / 油彩・カンヴァス / 名古屋市美術館
3. 《出船(朝)》 / 1928年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
4. 《古港》 / 1928年 / 油彩・カンヴァス / 鳥根県立美術館
5. 《入江》 / 1929年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
6. 《魚》 / 1939年 / 油彩・カンヴァス / 横須賀美術館

#### 2章 堀割

7. 《堀割》 / 1927年 / 油彩・カンヴァス / ポーラ美術館
8. 《セース河畔》 / 1927年 / 油彩・カンヴァス / 村山密コレクション、パリ
9. 《橋》 / 1927年頃 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
10. 《堀割》 / 1953年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
11. 《波止場》 / 1954年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
12. 《運河》 / 1967年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
13. 《河岸》 / 1960年代 / 油彩・カンヴァス / 早稲田大学會津八一記念博物館
14. 《水門》 / 1968年頃 / 油彩・カンヴァス / ポーラ美術館

#### 3章 献花

15. 《献花》 / 1958年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
16. 《献花》 / 1964年 / 油彩・カンヴァス / ポーラ美術館
17. 《献花》 / 1966年 / 油彩・カンヴァス / 財団法人ウッドワン美術館
18. 《献花》 / 1971年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
19. 《花籠》 / 1947年 / 油彩・カンヴァス / キヤノン電子株式会社



- 
20. 《赤い花》 / 1963年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
  21. 《三色堇》 / 1951年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
  22. 《三色すみれ》 / 1954年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
  23. 《パンジー》 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
  24. 《三色すみれ》 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
  25. 《三色すみれ》 / 1967年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
  26. 《遊蝶花》 / 油彩・カンヴァス / ポーラ美術館
  27. 《三色堇》 / 1977年 / 油彩・カンヴァス / ポーラ美術館

#### 4章 雪

28. 《積雪》 / 1935年 / 油彩・カンヴァス / 財団法人ひろしま美術館
29. 《地藏尊のある雪の山》 / 1943年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
30. 《雪の牧場》 / 1957年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
31. 《林》 / 1963年 / 油彩・カンヴァス / 財団法人上原近代美術館
32. 《雪》 / 1969年 / 油彩・カンヴァス / ポーラ美術館
33. 《雪の庁舎》 / 1977年 / 油彩・カンヴァス / ポーラ美術館

#### 5章 燈台

34. 《観測所》 / 1951年 / 油彩・カンヴァス / 静岡県立美術館
35. 《燈台》 / 1953年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
36. 《燈台》 / 1954年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
37. 《燈台》 / 1955年 / 油彩・カンヴァス / 味の素株式会社
38. 《燈台》 / 1967年 / 油彩・カンヴァス / ポーラ美術館
39. 《岬》 / 1975年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵

#### 6章 発電所

40. 《水源地》 / 1948年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
41. 《雪の発電所》 / 1956年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋297
42. 《発電所》 / 1956年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
43. 《山麓》 / 1957年 / 油彩・カンヴァス / 京都国立近代美術館
44. 《積雪》 / 1957年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
45. 《村の発電所》 / 1964年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
46. 《雪の変電所》 / 1964年 / 油彩・カンヴァス / 西宮市大谷記念美術館
47. 《村の発電所》 / 1972年 / 油彩・カンヴァス / ポーラ美術館

#### 7章 群落と廃墟

48. 《望楼》 / 1959-61年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋299
49. 《ファサード》 / 1961-62年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
50. 《群落 B》 / 1961-62年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵(京都国立近代美術館寄託)
51. 《群落(雪)》 / 1961-62年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
52. 《群落》 / 1961-62年 / 油彩・カンヴァス / 財団法人北野美術館
53. 《群落 A》 / 1962年 / 油彩・カンヴァス / 東京国立近代美術館
54. 《廃墟》 / 1962年 / 油彩・カンヴァス / 三重県立美術館

## 8章 城館と礼拝堂

- 55. 《城(シャトー・フォル)》 / 1931年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
- 56. 《礼拝堂》 / 1949年 / 油彩・カンヴァス / 財団法人上原近代美術館
- 57. 《僧院》 / 1966年 / 油彩・カンヴァス / ポーラ美術館
- 58. 《水辺の城》 / 1968年 / 油彩・カンヴァス / 財団法人長谷川町子美術館
- 59. 《朝の城》 / 1970年 / 油彩・カンヴァス / 新潟県立近代美術館
- 60. 《礼拝堂》 / 1970年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
- 61. 《館》 / 1974年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵

## 9章 融合

- 62. 《雪》 / 1928年 / 油彩・カンヴァス / ベルギー王立美術館
- 63. 《雪の街》 / 1930年 / 油彩・カンヴァス / 京都国立近代美術館
- 64. 《廃墟(ミディ)》 / 1939年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
- 65. 《橋》 / 1948年 / 油彩・カンヴァス / 横浜美術館
- 66. 《窓》 / 1949年 / 油彩・カンヴァス / 愛知県美術館
- 67. 《遊蝶花》 / 1951年 / 油彩・カンヴァス / 下関市立美術館
- 68. 《三色スミレ》 / 1955年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
- 69. 《花と廃墟》 / 1966年 / 油彩・カンヴァス / 群馬県立近代美術館
- 70. 《段丘》 / 1978年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵(群馬県立近代美術館寄託)

\*BMA は、ブリヂストン美術館の所蔵であることを示す。



会場風景



会場風景



---

関連事業：

土曜講座「岡鹿之助への、5つのいざない」→ p.51  
ギャラリートーク

広報記録：

新聞・雑誌：

貝塚 健「岡鹿之助展」『新美術新聞』2008年4月21日  
前田恭二「独自の画境 静かな自問 岡鹿之助展」『読売新聞』2008年5月8日  
「忙人寸語」『千葉日報』2008年5月9日  
貝塚 健「岡鹿之助展」『月刊展覧会ガイド』2008年5月号、p.9  
竹田博志「岡鹿之助展」『日本経済新聞』2008年5月21日  
青山祥子「美の履歴書 岡鹿之助《遊蝶花》」『朝日新聞』2008年5月28日夕刊  
貝塚 健「美術館・博物館情報 岡鹿之助《遊蝶花》」『読売新聞』2008年6月3日夕刊  
岸 桂子「東京で没後30年の岡鹿之助展」『毎日新聞』2008年6月11日夕刊  
「岡鹿之助展」『クロワッサンプレニウム』2008年7月号、p.178

テレビ：

「新日曜美術館」（アートシーン）NHK 教育テレビ、2008年6月8日放映

## 〈特集展示〉

### コレクションの新地平—20世紀美術の息吹

2008年2月9日(土)―4月13日(日)

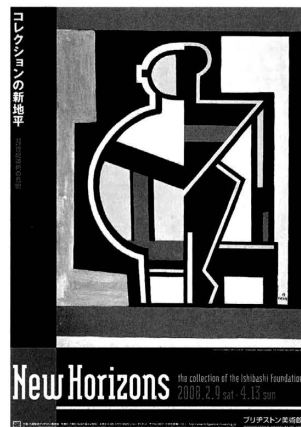
会場：第3―10室、彫刻ギャラリー2

主催：石橋財団ブリヂストン美術館

概要：逝去の翌年、1998年に美術館に寄贈された石橋幹一郎氏のコレクションは、正二郎氏が蒐集した近代美術のコレクションに、より豊かな広がりと厚みを持たせた。本展では幹一郎氏が蒐集していた数多くの美術品の中から、戦後の抽象絵画に焦点をあて、その意向を継承し購入した新収蔵作品を交えてブリヂストン美術館の所蔵作品を紹介した。会期中、第3室に『アサヒカメラ』誌に掲載された幹一郎氏撮影の写真18点を展示した。

出品内容：絵画100点[うちベン・シャーンの版画24点は半分ずつ前期(2/9―3/9)、後期(3/11―4/13)で展示替え]、資料18点 計118点

入場者総数：17,100人(1日平均305人)



展覧会ポスター

### 出品目録：

#### 第4室 抽象への道

1. ワシリー・カンディンスキー《二本の線》/ 1940年 / ミクストメディア・カードボード / 外洋217
2. ピート・モンドリアン《砂丘》/ 1909年 / 油彩、鉛筆・厚紙 / 外洋203
3. パウル・クレー《島》/ 1932年 / 油彩、砂を混ぜた石膏・板 / 外洋202
4. フェルナン・レジェ《抽象的コンポジション》/ 1919年 / 油彩・カンヴァス / 外洋219
5. ジョアン・ミロ《絵画》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 外洋187
6. 猪熊弦一郎《Sky Triangle》/ 1968年 / 油彩・カンヴァス / 日洋482
7. 猪熊弦一郎《都市計画(黄色 No.1)》/ 1968年 / 油彩・カンヴァス / 日洋213
8. 猪熊弦一郎《スペース旅行基地》/ 1986年 / 油彩・カンヴァス / 日洋346
9. 斎藤義重《作品》/ 1961年 / 油彩・合板 / 日洋524
10. 斎藤義重《作品》/ 1965年 / 油彩・合板 / 日洋527
11. 村井正誠《モードの女》/ 1976年 / 油彩・カンヴァス / 日洋548
12. 村井正誠《人びと》/ 1983年 / 油彩・カンヴァス / 日洋549
13. 村井正誠《子供》/ 1952年頃 / 油彩・板 / 日洋547

#### 第5室 版画と水彩1

14. パウル・クレー《ホフマン風物語の情景》/ 1921年 / リトグラフ / 外版195
15. フェルナン・レジェ《女の顔》/ 1953年 / リトグラフ / 外版190
16. ハンス・アルプ《コンポジション》/ 木版 / 外版150
17. ハンス・アルプ《For Saint Gaiden》/ シルクスクリーン / 外版426
18. ジョアン・ミロ《Els Gossos 4》/ 1978-79年 / アクアチント / 外版236
19. ジョアン・ミロ《岩壁の軌跡VI》/ 1967年 / エッチング、アクアチント、研磨剤 / 外版432
20. ジョアン・ミロ《迷宮の星》/ 1967年 / エッチング、ドライポイント、アクアチント、研磨剤 / 外版431

- 
21. ルチオ・フォンタナ《No.6 空間概念》/ 1964年 / レリーフ・プリント / 外版141
  22. アンリ・ミショー《無題》/ 1979-81年 / 墨、アクリル・紙 / 外洋212
  23. アンリ・ミショー《無題》/ 1970年 / 水彩・紙 / 外洋213
  24. アンリ・ミショー《無題》/ 1973年 / グワッシュ、アクリル・紙 / 外洋214
  25. セルジュ・ポリアコフ《ピンクと赤と青のコンポジション》/ リトグラフ / 外版430
  26. ピエール・スーラージュ《作品》/ 1947年 / リトグラフ / 外版276
  27. ピエール・スーラージュ《リトグラフ No.6》/ 1957年 / リトグラフ / 外版277
  28. ピエール・スーラージュ《リトグラフ No.32 B》/ 1975年 / リトグラフ / 外版425
  29. 野見山暁治《鉱山から》/ 1984年 / グワッシュ、油性黒インク・紙 / IMA / 日洋521
  30. ピエール・アレシンスキー《木の根》/ 1954年 / 水彩、インク・紙 / 外洋100
  31. ピエール・アレシンスキー《何が起きたのか?》/ 1963年 / リトグラフ / 外版424
  32. 堂本尚郎《二次元的なアンサンブル》/ 1961年 / 顔料・紙 / 日洋531
  33. ショーン・スカリー《12.15.1993》/ 1993年 / 水彩・紙 / 外洋222

**第6室 版画と水彩2** —ベン・シャーンによる版画集「リルケ『マルテの手記』より 一行の詩のためには…」より

34. ベン・シャーン《扉》/ 1968年 / リトグラフ / 外版260 / ※前期のみ展示
  35. ベン・シャーン《天飾り》/ 1968年 / リトグラフ / 外版261 / ※前期のみ展示
  36. ベン・シャーン《I あまたの都市を》/ 1968年 / リトグラフ / 外版238 / ※前期のみ展示
  37. ベン・シャーン《II あまたの人々を》/ 1968年 / リトグラフ / 外版239 / ※前期のみ展示
  38. ベン・シャーン《III あまたの書物を》/ 1968年 / リトグラフ / 外版240 / ※前期のみ展示
  39. ベン・シャーン《IV 禽獣を知らねばならぬ》/ 1968年 / リトグラフ / 外版241 / ※前期のみ展示
  40. ベン・シャーン《V 空飛ぶ鳥のすがた》/ 1968年 / リトグラフ / 外版242 / ※前期のみ展示
  41. ベン・シャーン《VI 小さな草花のたたずまい》/ 1968年 / リトグラフ / 外版243 / ※前期のみ展示
  42. ベン・シャーン《VII まだ知らぬ国々の道を》/ 1968年 / リトグラフ / 外版244 / ※前期のみ展示
  43. ベン・シャーン《VIII 思いがけぬ邂逅》/ 1968年 / リトグラフ / 外版245 / ※前期のみ展示
  44. ベン・シャーン《IX 遠くから近づいてくるのが見える別離》/ 1968年 / リトグラフ / 外版246 / ※前期のみ展示
  45. ベン・シャーン《X 少年の日の思い出を》/ 1968年 / リトグラフ / 外版247 / ※前期のみ展示
  46. ベン・シャーン《XI 心を悲しませてしまった両親のこと》/ 1968年 / リトグラフ / 外版248 / ※後期のみ展示
  47. ベン・シャーン《XII 少年時代の病氣》/ 1968年 / リトグラフ / 外版249 / ※後期のみ展示
  48. ベン・シャーン《XIII 静かなしんとした部屋で》/ 1968年 / リトグラフ / 外版250 / ※後期のみ展示
  49. ベン・シャーン《XIV 海辺の朝》/ 1968年 / リトグラフ / 外版251 / ※後期のみ展示
  50. ベン・シャーン《XV 海そのものの姿》/ 1968年 / リトグラフ / 外版252 / ※後期のみ展示
  51. ベン・シャーン《XVI 星くずとともに消え去った旅寝の夜々》/ 1968年 / リトグラフ / 外版253 / ※後期のみ展示
  52. ベン・シャーン《XVII 愛に満ちたあまたの夜の回想》/ 1968年 / リトグラフ / 外版254 / ※後期のみ展示
  53. ベン・シャーン《XVIII 産婦の叫び》/ 1968年 / リトグラフ / 外版255 / ※後期のみ展示
  54. ベン・シャーン《XIX 白衣の中に眠りにおちて恢復をまつ産後の女》/ 1968年 / リトグラフ / 外版256 / ※後期のみ展示
  55. ベン・シャーン《XX 死んで行く人の枕辺に》/ 1968年 / リトグラフ / 外版257 / ※後期のみ展示
  56. ベン・シャーン《XXI 死者の傍らで》/ 1968年 / リトグラフ / 外版258 / ※後期のみ展示
-

---

57. ベン・シャーン《XXII一篇の詩の最初の言葉》/ 1968年 / リトグラフ / 外版259 / ※後期のみ展示

#### 第7室 ザオ・ウーキー1

- 58. ザオ・ウーキー《無題(風景)》/ 1950年 / 水彩、インク、鉛筆・紙 / 外洋207
- 59. ザオ・ウーキー《海岸》/ 1951年 / エッチング / 外版278
- 60. ザオ・ウーキー《サヴァンナ》/ 1952年 / 水彩・紙 / 外洋198
- 61. ザオ・ウーキー《鳥の飛翔》/ 1954年 / リトグラフ / 外版279
- 62. ザオ・ウーキー《無題》/ 1962年 / リトグラフ / 外版280
- 63. ザオ・ウーキー《無題》/ 1963年 / リトグラフ / 外版281
- 64. ザオ・ウーキー《無題》/ 1980年 / 墨・紙 / 外洋199
- 65. ザオ・ウーキー《無題》/ 1982年 / 墨・紙 / 外洋200
- 66. ザオ・ウーキー《無題》/ 1984年 / 墨・紙 / 外洋201

#### 第8室 ザオ・ウーキー2

- 67. ザオ・ウーキー《21. Sep. 50》/ 1950年 / 油彩・カンヴァスボード / 外洋194
- 68. ザオ・ウーキー《15.01.61》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / 外洋103
- 69. ザオ・ウーキー《24.02.70》/ 1970年 / 油彩・カンヴァス / 外洋156
- 70. ザオ・ウーキー《10.06.75》/ 1975年 / 油彩・カンヴァス / 外洋157
- 71. ザオ・ウーキー《10.03.76》/ 1976年 / 油彩・カンヴァス / 外洋195
- 72. ザオ・ウーキー《27.12.76》/ 1976年 / 油彩・カンヴァス / 外洋196
- 73. ザオ・ウーキー《07.06.85》/ 1985年 / 油彩・カンヴァス / 外洋197
- 74. ザオ・ウーキー《風景 2004》/ 2004年 / 油彩・カンヴァス / 外洋208

#### 第9室 戦後美術から現代へ1

- 75. ハンス・ホフマン《Push and Pull II》/ 1950年 / 油彩・カンヴァス / 外洋211
- 76. ジャン・フォートリエ《人質の頭部》/ 1945年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / 外洋188
- 77. ジャン・フォートリエ《旋回する線》/ 1963年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / 外洋189
- 78. セルジュ・ポリアコフ《コンポジション》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / 外洋215
- 79. ジャン・デュビュッフエ《スカーフを巻くエディット・ボワソナス》/ 1947年 / 油彩・紙 / 外洋192
- 80. ジャン・デュビュッフエ《暴動》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / 外洋193
- 81. 佐藤敬《作品》/ 1957年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋490
- 82. ジャクソン・ポロック《Number 2, 1951》/ 1951年 / 油彩・カンヴァス / 外洋209
- 83. 今井俊満《Eclipse》/ 1964年 / 油彩・カンヴァス / 日洋552
- 84. 菅井汲《OKA》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / 日洋526
- 85. ピエール・スーラージュ《絵画、26 May 1969》/ 1969年 / 油彩・カンヴァス / 外洋210
- 86. 田淵安一《孤独の山 Montagne Solitaire》/ 1956年 / 油彩・カンヴァス / 日洋525
- 87. 野見山暁治《風の便り》/ 1997年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋520
- 88. ピエール・アレシンスキー《田園の一隅》/ 1951年 / 油彩・カンヴァス / 外洋99
- 89. 堂本尚郎《連続の溶解9》/ 1964年 / 油彩、アクリル・カンヴァス / 日洋530

#### 第10室 戦後美術から現代へ2

- 90. 川端実《作品(B)》/ 1963年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋189
- 91. 川端実《無題》/ 1993年 / アクリル・カンヴァス / 日洋528
- 92. 白髪一雄《白い扇》/ 1965年 / 油彩・カンヴァス / 日洋543
- 93. 白髪一雄《観音普陀落浄土》/ 1972年 / 油彩・カンヴァス / 日洋544



- 
94. キャサリン・ペチャリ《棘魔王トカゲのドリーミング》/ 2003年 / 合成ポリマー絵具・ベルギーリネン / 外洋218
  95. イマンツ・ティラーズ《自然は語る D》/ 2005年 / 合成ポリマー絵具、グワッシュ・16枚のカンヴァスボード / 外洋220
  96. イマンツ・ティラーズ《自然は語る H》/ 2006年 / 合成ポリマー絵具、グワッシュ・16枚のカンヴァスボード / 外洋221

#### 彫刻ギャラリー2 戦後美術から現代へ3

97. エミリー・カーム・ウンワリイ《無題》/ 1996年 / 合成ポリマー絵具・アーティスツ・ポリエステル / 外洋223 / ※追加出品
98. エミリー・カーム・ウンワリイ《春の風景》/ 1993年 / 合成ポリマー絵具・ベルギーリネン / 外洋224 / ※追加出品
99. ドロシー・ナパンガーディ《ミナミナの塩》/ 2007年 / 合成ポリマー絵具・ベルギーリネン / 外洋225 / ※追加出品
100. アビー・ロイ・ケマーレ《ブッシュ・リーフ・ドリーミング》/ 2007年 / 合成ポリマー絵具・ベルギーリネン / 外洋226 / ※追加出品

\*IMA は石橋美術館の所蔵であることを示す。それ以外はすべてブリヂストン美術館蔵。

#### 関連事業：

---

土曜講座「コレクションの新地平―戦後美術から現代へ」→ p.51  
ギャラリートーク

---

広報記録：

新聞・雑誌：

「今月の展覧会案内2」『月刊ギャラリー』2008年2月号、p.24-25

「忙人寸語」『千葉日報』2008年2月17日

「コレクションの新地平」『新美術新聞』2008年2月21日

Lucy Birmingham, “New Horizons: The Collection of the Ishibashi Foundation”, *Metropolis*, February 29, 2008、p.18

大輪俊江「作品の多彩さに、時代の多様性を感じて」『エクラ』2008年3月号、p.217

岡部昌幸「今月のアート：オフィス街に美術館の原点がある」『ノジュール』2008年3月号(通巻17号)、p.124-125

高野清見「ブリヂストン美術館 現代へ新たな視線」『読売新聞』2008年3月6日

稲葉千寿「美術館への招待」『東京新聞』2008年3月27日夕刊

黒澤綾子「2代目が愛した現代美術」『産経新聞』2008年4月5日

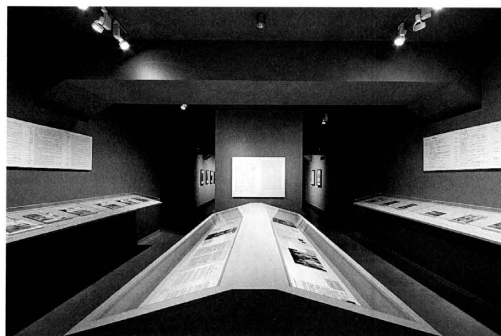
「今月の BEST 1」『月刊ギャラリー』2008年5月号、p.99



会場風景



会場風景



会場風景

## 〈テーマ展示〉

### 都市の表象と心象—近代画家・版画家たちが描いたパリ

2008年10月25日(土)－2009年1月18日(日)

会場：第2室

主催：石橋財団ブリヂストン美術館

概要：19世紀後半のオースマンによる大改造のもと、変わりゆくパリを遊歩する芸術家たちがさまざまな視点で描いた都市の情景を4部構成で紹介するテーマ展示。初公開の吉田光男氏旧蔵の版画をふくめ、マネ、メリヨン、ギース、プレスダン等の作品53点を出品した。

出品内容：油彩4点、水彩・素描3点、パステル2点、版画41点、彫刻3点

入場者総数：21,797人(1日平均307人)



展覧会ポスター

### 出品目録：

#### I プロローグ—近代都市パリの始まり

1. ポール・ガヴァルニ《ダブレ・ナチュール：「こんな奥さんたちの為だよ。パリの往来を広げるのは。」》 / 1857-58年 / リトグラフ / 外版3-10
2. ポール・ガヴァルニ《ダブレ・ナチュール：「雨は降らないよ、きっと！ でも降るかもしれない。」「死んだ親父がよく言ったものだ——お天気がいいならレインコートを持っていけ、もし雨降りなら、持って行きたいなら持って行け——と。」》 / 1857-58年 / リトグラフ / 外版3-16
3. ポール・ガヴァルニ《ダブレ・ナチュール：大饗宴》 / 1857-58年 / リトグラフ / 外版3-26
4. オノレ・ドーミエ《ラタボワール》 / 1850年頃 / ブロンズ / 外版91

#### II 懐古

5. ジャック・カロ《パリ二大景観：ルーヴル宮眺望》 / 1628-31年頃 / エッチング / 外版358
6. ジャック・カロ《パリ二大景観：ポン・ヌフ眺望》 / 1628-31年頃 / エッチング / 外版359
7. シャルル・メリヨン《パリの銅版画：プティ・ボン》 / 1850年以降 / エッチング、エングレーヴィング / 外版325
8. シャルル・メリヨン《パリの銅版画：時計塔》 / 1852年以降 / エッチング、エングレーヴィング、ドライポイント / 外版326
9. シャルル・メリヨン《パリの銅版画：ティクセランドリ通りの小塔》 / 1852年以降 / エッチング / 外版327
10. シャルル・メリヨン《ポン＝ト＝シャンジュ》 / 1854年 / エッチング、ドライポイント / 外版329
11. シャルル・メリヨン《1621年の火災後のポン＝ト＝シャンジュの歩道橋(デッラ・ベッラに基づく)》 / 1860年 / エッチング / 外版332
12. シャルル・メリヨン《昔日のルーヴル(ゼーマンに基づく)》 / 1865-66年頃 / エッチング / 外版339

---

### Ⅲ-1 近代都市生活：古きパリ、変わりゆく都市

13. シャルル・メリヨン《パリの銅版画：ノートルダムの揚水機》/ 1852年以降 / エッチング / 外版328
14. シャルル・メリヨン《パリの銅版画：屍体公示所》/ 1854年 / エッチング、ドライポイント / 外版330
15. シャルル・メリヨン《パリの銅版画：ノートルダム寺院の後陣》/ 1853年 / エッチング、エングレーヴィング、ドライポイント / 外版331
16. シャルル・メリヨン《シャントル通り》/ 1862年 / エッチング / 外版334
17. シャルル・メリヨン《シュヴリエ冷温水浴場》/ 1864年 / エッチング / 外版337
18. オーギュスト＝ルイ・ルペール《モンターニュ＝サント＝ジュヌヴィエーヴ通り》/ 協会版『レスタンプ・オリジナル』第1号(1888)所収 / 木口木版 / 外版310
19. オーギュスト＝ルイ・ルペール《オーステルリッツ橋から望むセヌ川》/ 協会版『レスタンプ・オリジナル』第1号(1888)所収 / 木口木版 / 外版311
20. アンリ＝ガブリエル・イベルス《舗装工事の男たち》/ 『レスタンプ・オリジナル』第8号(1894)所収 / エッチング / 外版298

### Ⅲ-2 近代都市生活：交流

21. コンスタンタン・ギース《酒場》/ 水彩・紙 / 外洋12
22. シャルル・メリヨン《アンリ4世校》/ 1863-64年 / エッチング / 外版336
23. エドゥアル・マネ《オランピア》/ 1865年頃 / エッチング、アクアチント / 外版11
24. エドゥアル・マネ《横たわるオダリスク》/ 1868年 / エッチング、アクアチント / 外版9
25. エドゥアル・マネ《オペラ座の仮装舞踏会》/ 1873年 / 油彩・カンヴァス / 外洋14
26. エドゥアル・マネ《自画像》/ 1878-79年 / 油彩・カンヴァス / 外洋121
27. エドゥアル・マネ《メリー・ローラン》/ 1882年 / パステル・カンヴァス / 外洋15
28. エドゥアル・マネ《裸婦》/ チョーク(黒、赤)・紙 / 外洋131
29. フェリックス・ブラックモン《レオン・クラデルの肖像》/ 協会版『レスタンプ・オリジナル』第1号(1888)所収 / エッチング、アクアチント / 外版302
30. エドガー・ドガ《レオポール・ルヴェールの肖像》/ 1874年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋162
31. エドガー・ドガ《右足で立ち、右手を地面にのばしたアラベスク》/ 1882-95年 / ブロンズ / 外彫76
32. エドガー・ドガ《踊りの稽古場にて》/ 1895-98年 / パステル・紙 / 外洋17
33. エドガー・ドガ《右手で右足を持つ踊り子》/ 1896-1911年 / ブロンズ / 外彫37
34. エドガー・ドガ《踊り子》/ 鉛筆、油彩・紙 / 外洋16
35. ジュール・シェレ《ダンス》/ 『レスタンプ・オリジナル』第4号(1893)所収 / リトグラフ / 外版322
36. オーギュスト・ロダン《アンリ・ベックの肖像》/ 1883-87年頃 / 『レスタンプ・オリジナル』第2号(1893)所収 / ドライポイント / 外版20
37. オーギュスト・ロダン《アントナン・プルースト》/ 『パン』第3年次第3号(1897)所収 / ドライポイント / 外版196-62
38. アンリ・ソム《パリの女》/ 『レスタンプ・オリジナル』第5号(1894)所収 / ドライポイント / 外版316
39. アンリ＝パトリス・ディヨン《アトリエの情景》/ 協会版『レスタンプ・オリジナル』第1号(1888)所収 / リトグラフ / 外版308
40. アンリ・ブテ《舗道にて》/ 協会版『レスタンプ・オリジナル』第1号(1888)所収 / ドライポイント、アクアチント / 外版306
41. アンリ・ブテ《パリの街角、夜》/ 協会版『レスタンプ・オリジナル』第1号(1888)所収 / ドライポイント、アクアチント / 外版307
42. アンリ・ブテ《パリの女》/ 『レスタンプ・オリジナル』第2号(1893)所収 / エッチング、アクアチント、ドライポイント、ルーレット / 外版30
43. アンリ＝エドモン・クロス《シャンゼリゼで》/ 『パン』第4年次第1号(1898)所収 / リトグラフ / 外版

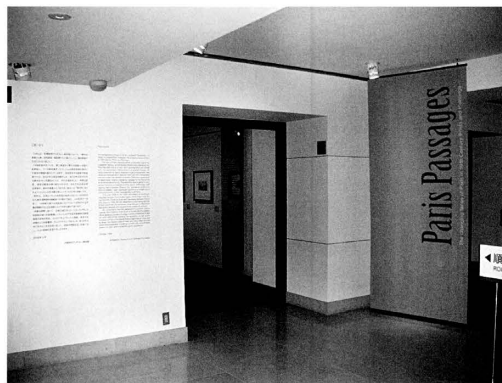
196-72

44. アンリ・ド・トゥールーズ=ロートレック 《エグランティーヌ嬢一座》 / 1896年 / リトグラフ / 外版162

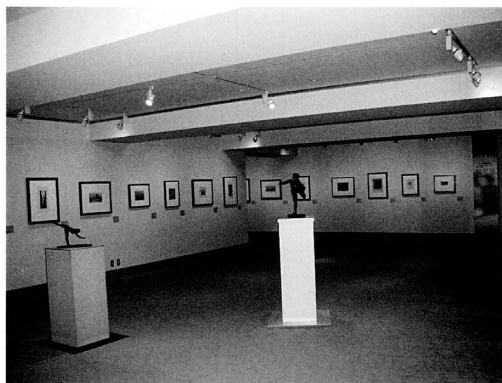
#### Ⅳ エピローグー空想と願望あるいは夢

45. シャルル・メリヨン 《エコール・ド・メドゥシヌ通り22番地の小塔》 / 1861年以降 / エッチング、ドライポイント / 外版333
46. シャルル・メリヨン 《アンリ4世校》 / 1863-64年 / エッチング / 外版335
47. シャルル・メリヨン 《海軍省》 / 1865年 / エッチング / 外版338
48. ロドルフ・プレスダン 《死の喜劇》 / 1854年 / リトグラフ / 外版344
49. ロドルフ・プレスダン 《『ラ・ルヴェ・ファンテジスト』の口絵》 / 1861年 / エッチング / 外版347
50. ロドルフ・プレスダン 《魔法の家》 / 1871年 / リトグラフ / 外版350
51. ロドルフ・プレスダン 《驢馬のいるエジプトへの逃避途上の休息》 / 1878年 / エッチング / 外版351
52. ロドルフ・プレスダン 《私の夢》 / 1883年 / エッチング / 外版354
53. オディロン・ルドン 《神秘の語らい》 / 油彩・カンヴァス / 外洋178

\*作品データの表記の方法は、展覧会刊行物とは必ずしも一致していない。



会場風景



会場風景

---

関連事業：

土曜講座「パリと近代芸術家たち」→ p.52

ギャラリートーク

広報記録：

新聞・雑誌：

古賀 太「30年代の東京・19世紀のパリ」『朝日新聞』2008年11月5日夕刊

“Exhibitions”, *The Asahi Shimbun*, November 21, 2008

「都市への憧憬 ローマ・パリ・東京」『月刊展覧会ガイド』2008年11月号、p.11

柴田隆寛「共振し続ける都市とアート」『パピルス』2008年12月号(通巻21号)、p.292

三輪 晋「絵画が語る19世紀パリ『都市改造』と『女』」『週刊新潮』2008年12月4日号、p.132

小川敦生「美の美 マネ《裸婦》」『日本経済新聞』2008年11月9日

Web：

「内覧会レポート！ブリヂストン美術館『都市の表象と心象』」Art inn 美術館携帯サイト <http://www.art-inn.jp/>

ラジオ：

塩島明美「都市の表象と心象展」ポッドキャスト番組『Chocolat』、2008年11月1日放送

## 〈拡大常設展〉

### 美術散歩—印象派から抽象絵画まで

2008年7月19日(日)ー10月19日(日)

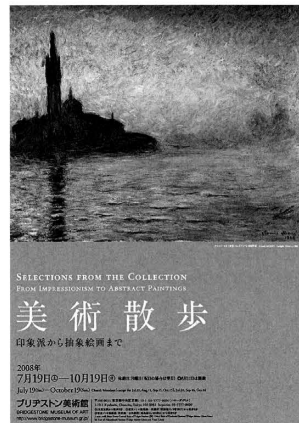
会場：全館

主催：石橋財団ブリヂストン美術館

概要：印象派から現代までの作品を中心に、さまざまな作家の技法やスタイルの展開を、一部屋ずつ散策するように楽しめるよう構成したものの。各部屋は時代とグループによって、まとまりのある展示にした。また、2月の「コレクションの新地平」展の成果を踏まえて、新たに抽象絵画を第9ー10室に一堂に展示した。

出品内容：絵画128点、彫刻35点、陶器14点 合計177点

入場者総数：32,887人(1日平均406人)



展覧会ポスター

### 出品目録：

#### エントランス

1. クリスチャン・ダニエル・ラウホ《勝利の女神》/ 大理石 / 外彫81

#### 階段室

2. アリストイド・マイヨール《欲望》/ 1905-08年 / ブロンズ / 外彫66

#### 彫刻ギャラリー1

3. オーギュスト・ロダン《立てるフォーネス》/ 1884年頃 / 大理石 / 外彫40
4. オーギュスト・ロダン《考える人》/ 1902年頃 / ブロンズ / 外彫39
5. オーギュスト・ロダン《青銅時代》/ 1904年 / ブロンズ / 外彫38
6. エミール=アントワヌ・ブールデル《風の中のベートーヴェン》/ 1904-08年 / ブロンズ / 外彫43
7. エミール=アントワヌ・ブールデル《ベネロープ》/ 1909年 / ブロンズ / 外彫45
8. エミール=アントワヌ・ブールデル《弓をひくヘラクレス》/ 1909年 / ブロンズ / 外彫46
9. シャルル・デスピオ《アントワネットの顔》/ 1918年 / ブロンズ / 外彫48
10. シャルル・デスピオ《クラ=クラ》/ 1919年 / ブロンズ / 外彫49

#### 彫刻ギャラリー2

11. コンスタンティン・ブランクーシ《接吻》/ 1907-10年 / 石膏 / 外彫100
12. アレキサンダー・アーキベンコ《ゴンドラの船頭》/ 1914年 / ブロンズ / 外彫86
13. オシップ・ザツキン《母子》/ 1919年 / 着色されたセメント / 外彫54
14. オシップ・ザツキン《三美神》/ 1950年 / ブロンズ / 外彫56
15. オシップ・ザツキン《ボモナ(トルソ)》/ 1951年 / 黒檀 / 外彫55
16. ヘンリー・ムア《横たわる人体》/ 1976年 / ブロンズ / 外彫89



- 
17. マリノ・マリーニ《騎手》/ 1952年 / ブロンズ / 外彫70
  18. ペリクレ・ファッツィーニ《爽風(B)》/ 1972-73年 / ブロンズ / 外彫88

### 第3室 古代美術

19. シュメール《女の胸像》/ 紀元前24世紀 / 閃緑石 / 外彫1
20. パルミユラ《人物像》/ 1-2世紀 / 石灰石 / 外彫94
21. エジプト《セクメト神像》/ 紀元前14世紀 / 黒花崗岩 / 外彫64
22. エジプト レリーフ断片《柘榴と葡萄図》/ アマルナ時代(紀元前1360年頃) / 石灰石 / 外彫95
23. エジプト レリーフ断片《アヌビス神礼拝図》/ 紀元前13世紀 / 砂岩 / 外彫7
24. エジプト レリーフ断片《神牛》/ 紀元前1300-1200年 / 石 / 外彫8
25. エジプト《彩色木棺》/ 紀元前13世紀 / 木 / 外彫67
26. エジプト《ホルス神浮彫》/ 紀元前1000-350年 / 大理石 / 外彫5
27. エジプト《聖猫》/ 紀元前950-660年 / ブロンズ / 外彫90
28. ギリシア《獅子頭部》/ 紀元前5世紀 / 大理石 / 外彫13
29. ギリシア《哲人の顔》/ 紀元前4世紀 / 大理石 / 外彫15
30. ギリシア《ヴィーナス》/ ヘレニスティック期(紀元前323-30年) / 大理石 / 外彫14
31. グレコ=ローマン《アテナ頭部》/ 大理石 / 外彫79
32. ギリシア コリントス球形アリュパロス「ルクス・グループ」(?)《鷺と鶏図》/ 紀元前610-590年 / 陶器182
33. ギリシア アッティカ黒絵式頸部アンフォラ「ブーローニュ441の画家」《ヘラクレスとケルベロス図》/ 紀元前520-510年 / 陶器197
34. ギリシア アッティカ黒絵式オイノコエ《ディオニュソスとマイナス図》/ 紀元前500年頃 / 陶器76
35. ギリシア アッティカ黒絵式レキュトス《ディオニュソス、サテュロスとマイナス図》/ 紀元前490-480年 / 陶器67
36. ギリシア アッティカ黒絵式レキュトス《ディオニュソスとアリアドネ図》/ 紀元前490-480年 / 陶器66
37. ギリシア アッティカ黒絵式レキュトス《ディオニュソスとマイナス図》/ 紀元前490-480年 / 陶器68
38. ギリシア アッティカ赤絵式キュリクス《サテュロス図》/ 紀元前5世紀中頃 / 陶器89
39. ギリシア アッティカ白地レキュトス《墓参図》/ 紀元前425-400年頃 / 陶器71
40. ギリシア アッティカ赤絵式レベス・ガミコス《ニケと女性図》/ 紀元前400-375年頃 / 陶器91
41. ギリシア カンパニア赤絵式魚文皿 / 紀元前375-350年頃 / 陶器42
42. ギリシア カンパニア赤絵式ヒュドリア「ラゲットの画家」《ディオスクーロイ図》/ 紀元前350年頃 / 陶器87
43. ギリシア カンパニア赤絵式ヒュドリア《エロス図》/ 紀元前350-325年頃 / 陶器88
44. ギリシア アブリア赤絵式柱形把手クラテル《男女図》/ 紀元前330年頃 / 陶器92
45. エトルリア 建築装飾フリーズ部分《泉水に向かう二頭の馬》/ 紀元前550-540年 / 彩色テラコッタ / 外彫92
46. ローマ《ヴィーナスの頭部》/ 大理石 / 外彫23
47. ローマ モザイク断片《牧神頭部》/ 1世紀 / 陶器114
48. ヘルクラネウム 壁画断片《ディオニュソス図》/ 1世紀 / フレスコ / 外洋2

### 第1室 新しい道を求めて

49. レンブラント・ファン・レイン《聖書あるいは物語に取材した夜の情景》/ 1626-28年 / 油彩・銅板 / 外洋5
50. ジャン=バティスト・パテル《水浴》/ 油彩・カンヴァス / 外洋175

- 
51. トマス・ゲインズバラ《婦人像》/ 油彩・カンヴァス / 外洋176
  52. ジャン=オーギュスト=ドミニク・アングル / 《若い女の頭部》/ 油彩・カンヴァス / 外洋161
  53. カミーユ・コロエ《森の中の若い女》/ 1865年 / 油彩・板 / 外洋159
  54. オノレ・ドーミエ《山中のドン・キホーテ》/ 1850年頃 / 油彩・板 / 外洋171
  55. オノレ・ドーミエ《ラタポワール》/ 1850年頃 / ブロンズ / 外彫91
  56. ジャン=フランソワ・ミレー《乳しぼりの女》/ 1854-60年 / 油彩・カンヴァス / 外洋119
  57. シャルル=フランソワ・ドービニー《レ・サーブル=ドロンス》/ 油彩・板 / 外洋10
  58. ギュスターヴ・クールベ《雪の中を駆ける鹿》/ 1856-57年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋170
  59. ギュスターヴ・クールベ《石切り場の雪景色》/ 1870年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋11
  60. エドゥワール・マネ《オペラ座の仮装舞踏会》/ 1873年 / 油彩・カンヴァス / 外洋14
  61. エドゥワール・マネ《自画像》/ 1878-79年 / 油彩・カンヴァス / 外洋121
  62. エドガー・ドガ《レオポール・ルヴェールの肖像》/ 1874年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋162

#### 第4室 印象派の世界

63. ウジェーヌ・ブーダン《トルーヴィル近郊の浜》/ 1865年頃 / 油彩・板 / 外洋172
64. カミーユ・ピサロ《ブージュヴァルのセヌ河》/ 1870年 / 油彩・カンヴァス / 外洋19
65. カミーユ・ピサロ《菜園》/ 1878年 / 油彩・カンヴァス / 外洋20
66. アルフレッド・シスレー《森へ行く女たち》/ 1866年 / 油彩・カンヴァス / 外洋25
67. アルフレッド・シスレー《サン=マメス六月の朝》/ 1884年 / 油彩・カンヴァス / 外洋26
68. クロード・モネ《アルジャントゥイユの洪水》/ 1872-73年 / 油彩・カンヴァス / 外洋21
69. クロード・モネ《アルジャントゥイユ》/ 1874年 / 油彩・カンヴァス / 外洋180
70. クロード・モネ《雨のベリール》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / 外洋164
71. クロード・モネ《睡蓮》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / 外洋22
72. クロード・モネ《睡蓮の池》/ 1907年 / 油彩・カンヴァス / 外洋23
73. クロード・モネ《黄昏、ヴェネツィア》/ 1908年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋24
74. ピエール=オーギュスト・ルノワール《すわるジョルジェット・シャルパンティエ嬢》/ 1876年 / 油彩・カンヴァス / 外洋169
75. ピエール=オーギュスト・ルノワール《カーニユのテラス》/ 1905年 / 油彩・カンヴァス / 外洋33
76. ピエール=オーギュスト・ルノワール《すわる水浴の女》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / 外洋34
77. ピエール=オーギュスト・ルノワール《花のついた帽子の女》/ 1917年 / 油彩・カンヴァス / 外洋35
78. フィンセント・ファン・ゴッホ《モンマルトルの風車》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / 外洋122

#### 第5室 変わりゆく絵画の風景

79. ポール・セザンヌ《鉢と牛乳入れ》/ 1873-77年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋28
  80. ポール・セザンヌ《帽子をかぶった自画像》/ 1890-94年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋31
  81. ポール・セザンヌ《サント=ヴィクトワール山とシャトー・ノワール》/ 1904-06年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋32
  82. オディロン・ルドン《神秘の語らい》/ 油彩・カンヴァス / 外洋178
  83. オディロン・ルドン《供物》/ 油彩・厚紙 / 外洋179
  84. ポール・ゴーガン《馬の頭部のある静物》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / 外洋168
  85. ポール・ゴーガン《ボン=タヴェン付近の風景》/ 1888年 / 油彩・カンヴァス / 外洋37
  86. ポール・ゴーガン《乾草》/ 1889年 / 油彩・カンヴァス / 外洋38
  87. ポール・シニャック《コンカルノー港》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 外洋45
  88. ピエール・ボナール《灯下》/ 1899年 / 油彩・紙 / 外洋51
  89. ピエール・ボナール《桃》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / 外洋52
-

- 
90. ピエール・ボナール《海岸》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / 外洋53  
91. ピエール・ボナール《ヴェルノン付近の風景》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 外洋54  
92. モーリス・ドニ《バックス祭》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / 外洋65

#### 第6室 マティスが歩んだ道

93. アンリ・マティス《画室の裸婦》/ 1899年 / 油彩・紙 / 外洋56  
94. アンリ・マティス《コリウール》/ 1905年 / 油彩・厚紙 / 外洋141  
95. アンリ・マティス《縞ジャケット》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / 外洋57  
96. アンリ・マティス《横たわる裸婦》/ 1919年 / 油彩・カンヴァスボード / 外洋58  
97. アンリ・マティス《樹間の憩い》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品  
98. アンリ・マティス《ルー川のほとり》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 外洋117  
99. アンリ・マティス《オダリスク》/ 1926年 / 油彩・カンヴァス / 外洋60  
100. アンリ・マティス《青い胴着の女》/ 1935年 / 油彩・カンヴァス / 外洋62  
101. モーリス・ド・ヴラマンク《運河船》/ 1905-06年 / 油彩・カンヴァス / 外洋69  
102. ラウル・デュフィ《静物》/ 1915-20年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋73  
103. ラウル・デュフィ《オーケストラ》/ 1942年 / 油彩・カンヴァス / 外洋123  
104. アンドレ・ドラン《聖母子》/ 1913年頃 / 油彩・板 / 外洋71

#### 第7室 百花繚乱のパリ

105. ジョルジュ・ルオー《郊外のキリスト》/ 1920-24年 / 油彩・紙 / 外洋142  
106. ジョルジュ・ルオー《ピエロ》/ 1925年 / 油彩・紙 / 外洋64  
107. ケース・ヴァン・ドンゲン《シャンゼリゼ大通り》/ 1924-25年 / 油彩・カンヴァス / 外洋87  
108. モーリス・ユトリロ《サン=ドニ運河》/ 1906-08年 / 油彩・紙 / 外洋77  
109. マリー・ローランサン《二人の少女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 外洋72  
110. マリー・ローランサン《女と犬》/ 1923年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋186  
111. カイム・スーティン《大きな樹のある南仏風景》/ 1924年 / 油彩・紙 / 外洋114

#### 第8室 ビカソの多彩な展開とその交流

112. アンリ・ルソー《イヴリー河岸》/ 1907年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋43  
113. アンリ・ルソー《牧場》/ 1910年 / 油彩・カンヴァス / 外洋42  
114. パブロ・ピカソ《道化師》/ 1905年 / ブロンズ / 外彫61  
115. パブロ・ピカソ《ブルゴーニュのマール瓶、グラス、新聞紙》/ 1913年 / 油彩、砂、新聞紙・カンヴァス / 外洋173  
116. パブロ・ピカソ《生木と枯木のある風景》/ 1919年 / 油彩・カンヴァス / 外洋143  
117. パブロ・ピカソ《カップとスプーン》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 外洋83  
118. パブロ・ピカソ《女の顔》/ 1923年 / 油彩、砂・カンヴァス / 外洋84  
119. パブロ・ピカソ《腕を組んですわるサルタンバンク》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 外洋160  
120. パブロ・ピカソ《茄子》/ 1946年 / 油彩、グワッシュ・紙 / 外洋85  
121. パブロ・ピカソ《画家とモデル》/ 1963年 / 油彩・カンヴァス / 外洋144  
122. ジョルジュ・ブラック《梨と桃》/ 1924年 / 油彩・板 / 外洋86  
123. アンドレ・ロート《海浜》/ 1922年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋89  
124. ジョルジョ・デ・キリコ《吟遊詩人》/ 油彩・カンヴァス / 外洋91  
125. ジョアン・ミロ《絵画》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 外洋187

---

## 第9室 抽象への道

- 126. ワシリー・カンディンスキー 《二本の線》 / 1940年 / ミクストメディア・カードボード / 外洋217
- 127. ピート・モンドリアン 《砂丘》 / 1909年 / 油彩、鉛筆・厚紙 / 外洋203
- 128. パウル・クレー 《島》 / 1932年 / 油彩、砂を混ぜた石膏・板 / 外洋202
- 129. ハンス・ホフマン 《Push and Pull II》 / 1950年 / 油彩・カンヴァス / 外洋211
- 130. フェルナン・レジェ 《抽象的コンポジション》 / 1919年 / 油彩・カンヴァス / 外洋219
- 131. ジャン・フォートリエ 《人質の頭部》 / 1945年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / 外洋188
- 132. ジャン・フォートリエ 《旋回する線》 / 1963年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / 外洋189
- 133. セルジュ・ポリアコフ 《コンポジション》 / 1959年 / 油彩・カンヴァス / 外洋215
- 134. ジャン・デュビュッフ 《スカーフを巻くエディット・ボワソナス》 / 1947年 / 油彩・紙 / 外洋192
- 135. ジャン・デュビュッフ 《暴動》 / 1961年 / 油彩・カンヴァス / 外洋193
- 136. ジャクソン・ポロック 《Number 2, 1951》 / 1951年 / 油彩・カンヴァス / 外洋209
- 137. 菅井汲 《OKA》 / 1961年 / 油彩・カンヴァス / 日洋524
- 138. ピエール・スーラージュ 《絵画、26 May 1969》 / 1969年 / 油彩・カンヴァス / 外洋210
- 139. 田淵安一 《孤独の山 Montagne Solitaire》 / 1956年 / 油彩・カンヴァス / 日洋525
- 140. ピエール・アレシンスキー 《田園の一隅》 / 1951年 / 油彩・カンヴァス / 外洋99
- 141. 今井俊満 《Eclipse》 / 1964年 / 油彩・カンヴァス / 日洋552

## 第10室 戦後美術から現代へ

- 142. 斎藤義重 《作品》 / 1961年 / 油彩・合板 / 日洋524
- 143. 斎藤義重 《作品》 / 1965年 / 油彩・合板 / 日洋527
- 144. エミリー・カーム・ウンワリイ 《春の風景》 / 1993年 / 合成ポリマー絵具・ベルギーリネン / 外洋224
- 145. エミリー・カーム・ウンワリイ 《無題》 / 1996年 / 合成ポリマー絵具・アーティスト・ポリエステル / 外洋223
- 146. ザオ・ウーキー 《07.06.85》 / 1985年 / 油彩・カンヴァス / 外洋197
- 147. 白髪一雄 《観音普陀落淨土》 / 1972年 / 油彩・カンヴァス / 日洋544
- 148. 堂本尚郎 《連続の溶解9》 / 1964年 / 油彩、アクリル・カンヴァス / 日洋530
- 149. イマンツ・ティラーズ 《自然は語る D》 / 2005年 / 合成ポリマー絵具、グワッシュ・16枚のカンヴァスボード / 外洋220
- 150. イマンツ・ティラーズ 《自然は語る H》 / 2006年 / 合成ポリマー絵具、グワッシュ・16枚のカンヴァスボード / 外洋221

## 第2室 日本近代洋画の景観

- 151. 浅井忠 《グレーの洗濯場》 / 1901年 / 油彩・カンヴァス / 日洋290
- 152. 浅井忠 《縫物》 / 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋4
- 153. 黒田清輝 《ブレハの少女》 / 1891年 / 油彩・カンヴァス / 日洋8
- 154. 藤島武二 《黒扇》 / 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / 日洋26
- 155. 藤島武二 《淡路島遠望》 / 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋47
- 156. 藤島武二 《東海旭光》 / 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋51
- 157. 山下新太郎 《供物》 / 1915年 / 油彩・カンヴァス / 日洋84
- 158. 青木繁 《海景(布良の海)》 / 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋100
- 159. 青木繁 《天平時代》 / 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋91
- 160. 藤田嗣治 《猫のいる静物》 / 1939-40年 / 油彩・カンヴァス / 日洋131
- 161. 藤田嗣治 《ドルドーニュの家》 / 1940年 / 油彩・カンヴァス / 日洋132

162. 小出楯重《帽子をかぶった自画像》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / 日洋137
163. 小出楯重《横たわる裸身》/ 1930年 / 油彩・カンヴァス / 日洋140
164. 安井曾太郎《薔薇》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋143
165. 安井曾太郎《F夫人像》/ 1939年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
166. 安井曾太郎《安倍能成君像》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋217
167. 梅原龍三郎《脱衣婦》/ 1912年 / 油彩・カンヴァス / 日洋200
168. 梅原龍三郎《ナポリよりソレントを望む》/ 1921年 / 油彩・カンヴァス / 日洋271
169. 梅原龍三郎《ノートルダム》/ 1965年 / 油彩・金箔押しした羊皮紙 / 日洋191
170. 国吉康雄《夢》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 日洋304
171. 国吉康雄《横たわる女》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋158
172. 岸田劉生《街道(銀座風景)》/ 1911年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋228
173. 佐伯祐三《ガラージュ》/ 1927-28年 / 油彩・カンヴァス / 日洋175
174. 岡鹿之助《雪の発電所》/ 1956 / 油彩 / カンヴァス / 日洋297
175. 岡鹿之助《望楼》/ 1960年 / 油彩・カンヴァス / 日洋299
176. 関根正二《子供》/ 1919年 / 油彩・カンヴァス / 日洋178
177. 牛島憲之《タンクの道》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋212

#### 広報記録：

##### 新聞・雑誌：

古賀 太「美の履歴書・小出楯重《帽子をかぶった自画像》」『朝日新聞』2008年8月27日夕刊

“Exhibitions”, *The Asahi Shimbun*, September 12, 2008

宝玉正彦「美の美 モネ《黄昏、ヴェネツィア》」『日本経済新聞』2008年9月14日

中村節子「美術館・博物館情報 モネ《雨のベリール》」『読売新聞』2008年9月16日夕刊

「私の好きな小さな美術館」『ゆうゆう』[主婦の友社] 2008年10月号、p.12-13

##### Web：

「アート・駆けめぐり」エクラ [集英社] <http://www.s-woman.net/eclat/art/index.html>



会場風景



会場風景



会場風景

## 〈特別展〉

パリーニューヨーク、20世紀絵画の流れ  
— フランシス・リーマン・ロブ・アートセンター所蔵品展 —

2008年5月17日(土)ー7月20日(日)

会場：本館

主催：石橋財団石橋美術館 / 西日本新聞社 / TVQ 九州放送

後援：久留米市 / 久留米市教育委員会 / 財団法人久留米文化振興会

概要：ニューヨーク州、ヴァッサー大学付属のフランシス・リーマン・ロブ・アートセンターが所蔵する絵画86点を展示。本館の第1から8室を使用。別館はコレクション展示(洋画、彫刻、工芸)。

出品内容：絵画86点

入場者総数：11,742人(1日平均210人)

展覧会ポスター

### 出品目録：

#### I 近代美術の起源(はじまり)

1. ギュスターヴ・ドレ《パリの防衛》/ 1871年 / 油彩・カンヴァス
2. ジャン=バティスト=カミユ・コロー《川岸の舟に乗る漁師》/ 1865年頃 / 油彩・カンヴァス
3. シャルル=フランソワ・ドービニー《風景》/ 1870年頃 / 油彩・パネル
4. ポール・セザンヌ《風景》/ 1865年頃 / 油彩・カンヴァス
5. アッシャー・ブラウン・デュランド《小川の流れが田舎の喜びをもたらす所》/ 油彩・カンヴァス
6. トーマス・コール《中世の建造物、シチリア島》/ 1842年頃 / 油彩・パネル
7. ジャスパー・フランシス・クロプシー《パエストウムの日暮れ》/ 1856年頃 / 油彩・パネル
8. フレデリック=エドウィン・チャーチ《南アメリカの夏》/ 1853年頃 / 油彩・厚紙
9. フレデリック=エドウィン・チャーチ《北アメリカの秋》/ 1856年頃 / 油彩・厚紙
10. チャールズ・ハーバート・ムア《ニューヨークの朝》/ 1861年 / 油彩・カンヴァス
11. サンフォード・ロビンソン・ギフォード《ベルナー・アルプスの日の出》/ 油彩・カンヴァス
12. ジョン・フレデリック・ピート《マグカップ、本、燭台、パイプのある静物》/ 1904年頃 / 油彩・カンヴァス
13. エドヴァルト・ムンク《サン・クルーのセーヌ川》/ 1890年 / 油彩・カンヴァス
14. エドゥワール・ヴェイヤール《座る女性の胸像(ミシア・ナタンソン)》/ 1898年頃 / 油彩・厚紙
15. モーリス・ドニ《聖母子像》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス
16. パブロ・ピカソ《グラス、ギター、楽譜》/ 1922-23年 / 油彩・カンヴァス
17. パブロ・ピカソ《羊飼いと山羊(牧歌)》/ 1946年 / テンペラ、インク・カンヴァスに裏打ちされた紙
18. フェルナン・レジェ《立体派の静物》/ 1928年 / 油彩・カンヴァス
19. ロベール・ドロローネー《律動》/ 1932-33年頃 / 油彩・厚紙
20. ジャック・リプシッツ《座る女性、ボーリユー》/ 1918年 / グワッシュ・木製パネル
21. アンリ・マティス《クリスマスローズとユキノシタ》/ 1944年 / 油彩・カンヴァス
22. マルク・シャガール《花束》/ 1952-53年 / グワッシュ、パステル・カンヴァスに裏打ちされた紙

- 
23. マリアンネ・フォン・ヴェレフキン《幻想的な夜》/ 1917年 / テンペラ・厚紙
  24. マックス・ペヒシュタイン《チューリップと頭部彫刻のある静物》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス
  25. マックス・ベックマン《サーカスの馬》/ 1930年 / 油彩・カンヴァス
  26. マックス・エルンスト《ナイチンゲールのさえずりを聞く女性》/ 油彩・カンヴァス
  27. アンドレ・マッソン《彗星》/ 1943年 / テンペラ、砂・カンヴァス

## Ⅱ アメリカ絵画の胎動

28. アーネスト・ローソン《ブルー・ヒル》/ 1915年 / 油彩・パネルに裏打ちされたカンヴァス
29. マーズデン・ハートリー《イチジクとバナナ》/ 1913年頃 / 油彩・厚紙
30. マックス・ウェーバー《裸体のコンポジション》/ 1923年頃 / 油彩・カンヴァス
31. アーサー・G・ダヴ《機械装置》/ 1921年 / 油彩・カンヴァス
32. アーサー・G・ダヴ《ブラック・ダイヤモンド山からのブルーム郡の眺め》/ 1931-32年 / 油彩・カンヴァス
33. ジョージア・オキーフ《春》/ 1922年頃 / 油彩・カンヴァス
34. ジョージア・オキーフ《ふたつのイチジク》/ 1923年 / 油彩・厚紙
35. ジョージア・オキーフ《青い朝顔、ニューメキシコⅡ》/ 1935年 / 油彩・カンヴァス
36. チャールズ・シーラー《鋼鉄、クロトン川》/ テンペラ・ガラス
37. エドワード・ホッパー《ロックランド、トロール船ウィジオン号》/ 1926年 / 水彩・紙
38. クラランス・カー・チャタートン《メーン・コーストの白い家》/ 油彩・カンヴァス
39. メリー・アーリー《線路沿いの家》/ 1937年 / 油彩・カンヴァス
40. ディエゴ・リヴェラ《ロベルト・ロザレス》/ 1930年 / 油彩・カンヴァス
41. アントン・リフレジアー《暴動の場面、内戦期》/ 1949年 / 油彩、テンペラ・厚紙
42. ベン・シャーン《日雇い労働者の日曜日》/ 1937年 / テンペラ・厚紙
43. ベン・シャーン《南部の街》/ 1946年 / テンペラ・メゾナイト板

## Ⅲ 抽象表現主義—アメリカ絵画の成立

44. ハンス・ホフマン《春に》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス
  45. ジョーゼフ・アルバース《正方形讃歌、明るい雰囲気》/ 1954年 / 油彩・メゾナイト板
  46. ジョーゼフ・アルバース《正方形讃歌習作、開かれた土地》/ 1964年 / 油彩・メゾナイト板
  47. ブラッドレイ・ウォーカー・トムリン《ナンバー4》/ 1952-53年 / 油彩・カンヴァス
  48. ミルトン・エイヴリー《白い波》/ 1954年 / 油彩・カンヴァス
  49. マーク・ロスコ《ナンバー1(ナンバー18, 1948)》/ 1948-49年 / 油彩・カンヴァス
  50. アーシル・ゴーキー《風景の突起》/ 1944年 / 油彩・カンヴァス
  51. ジャクスン・ポロック《ナンバー10》/ 1950年 / 油彩、エナメル、アルミ・ペイント・ファイバーボードに置かれたカンヴァス
  52. ウィリアム・A・パジオーテス《夜の鏡》/ 1947年 / 油彩・カンヴァス
  53. フィリップ・ガストン《行為者Ⅰ》/ 1961年 / 油彩・メゾナイト板に裏打ちされた紙
  54. ヴィレム・デ・クーニング《黒と白 ローマF》/ 1959年 / 油彩・カンヴァスに裏打ちされた紙
  55. ヴィレム・デ・クーニング《無題習作(女性)》/ 1948年 / 油彩、鉛筆、パステル・紙
  56. フランツ・クライン《無題》/ 1951年 / 油彩・板
  57. シオドロス・スタモス《スペイン、アナーキストの死》/ 1952年 / 油彩・カンヴァス
  58. コンラッド・マーサ=レーリ《座る裸体》/ 1954年 / 油彩、コラージュ・カンヴァス
  59. アド・ラインハート《#5(ポートフォリオ<10枚のシルクスクリーン>より)》/ 1966年 / シルクスクリーン・紙
  60. ロバート・マザーウェル《ロンドン・シリーズⅠ、黄色》/ 1970-71年 / シルクスクリーン・紙
-



- 
61. ロバート・マザーウェル《ロンドン・シリーズⅠ、青色》/ 1970-71年 / シルクスクリーン・紙
  62. ロバート・マザーウェル《ロンドン・シリーズⅠ、赤色》/ 1970-71年 / シルクスクリーン・紙
  63. ロバート・マザーウェル《ロンドン・シリーズⅠ、緑色》/ 1970-71年 / シルクスクリーン・紙
  64. ロバート・マザーウェル《ロンドン・シリーズⅠ、黒色》/ 1970-71年 / シルクスクリーン・紙

#### Ⅳ ヨーロッパとアメリカの戦後絵画

65. アルベルト・ジャコメッティ《スタジオに座るディエゴ》/ 1950年 / 油彩・カンヴァス
66. バルテュス《木曜日が4回ある週》/ 1949年 / 油彩・カンヴァス
67. ロベルト・マッタ《地上の燃料を補給する人たち》/ 1953年 / 油彩・カンヴァス
68. ピエール・スーラージュ《無題(抽象的コンポジション)》/ 1969年 / 油彩・カンヴァス
69. カレル・アベル《子供とけだものⅡ》/ 1951年 / 油彩・カンヴァス
70. ピエール・アレシンスキー《目に見えるものの部分》/ 1961年 / 墨・カンヴァスに裏打ちされた紙
71. ロイ・リクテンスタイン《私の夢想につきまとうメロディー》/ 1965年 / シルクスクリーン・厚紙
72. アンディ・ウォーホル《マリリン》/ 1967年 / シルクスクリーン・紙
73. ロバート・インディアナ《アメリカの輝く未来》/ 1976年 / シルクスクリーン・紙
74. ジェイムズ・ローゼンクイスト《マイルズ(ポートフォリオ〈アメリカ〉より)》/ 1975年 / シルクスクリーン・紙
75. ジム・ダイン《黒ひげ》/ 1973年 / エッチング・紙
76. ロバート・ラウシェンバーグ《デポジット(ポートフォリオ〈アメリカ〉より)》/ 1975年 / シルクスクリーン、手彩色・紙
77. ジャスパー・ジョーンズ《囃(おとり)》/ 1971年 / リトグラフ・紙
78. グレース・ハーティガン《シックス バイ シックス》/ 1951年 / 油彩・カンヴァス
79. ジョン・ミッチェル《リリック》/ 1953年 / 油彩・カンヴァス
80. ヘレン・フランケンサラー《オレンジの絵画》/ 1957年 / 油彩・カンヴァス
81. ジュールズ・オリツキー《乗船Ⅱ》/ 1972年 / アクリル・カンヴァス
82. ケネス・ノーランド《赤の空間》/ 1971年 / 油彩・カンヴァス
83. エルズワース・ケリー《無題》/ 1973年 / リトグラフ・紙
84. リチャード・ディーベンコーン《オークル》/ 1983年 / 木版・和紙
85. フランク・ステラ《エストリル・ファイヴⅡ, (〈サーキット・シリーズ〉より)》/ 1981年 / エングレーヴィング、レリーフ、エッチング・紙
86. ナンシー・グレイヴス《カドスラ L.O. シリーズ》/ 1976年 / 油彩・カンヴァス

#### 関連事業：

開催記念美術講座「20世紀美術入門」→ p.55

ギャラリートーク

## 広報記録：

### 新聞・雑誌：

宇田 懐『20世紀絵画の流れ』展 来月17日から 石橋美術館』『西日本新聞』2008年4月30日筑後版

「『パリーニューヨーク 20世紀絵画の流れ』展 久留米市で今日開幕」『西日本新聞』2008年5月17日

「20世紀絵画展が開幕」『毎日新聞』2008年5月17日

「『20世紀絵画の流れ』展開幕 ピカソなど74作家、86点」『西日本新聞』2008年5月18日筑後版

宇田 懐「パリーニューヨーク 20世紀絵画の流れ展から」(1)～(4)『西日本新聞』2008年5月26日～29日夕刊

「本社の事業 『パリーニューヨーク 20世紀絵画の流れ』展 ピカソ、セザンヌなど86点」『西日本新聞』

2008年5月29日

山口洋三「美術批評！『パリーニューヨーク 20世紀絵画の流れ』展」『朝日新聞』2008年5月30日夕刊

「彩事館『パリーニューヨーク 20世紀絵画の流れ』展」『西日本新聞』2008年6月14日夕刊

「20世紀絵画の流れ展おすすめの一品」(1)植野健造さん、(2)平野実さん、(3)森山秀子さん、(4)伊藤絵里子さん、(5)平間理香さん『西日本新聞』2008年7月1日～5日筑後版

渡辺亮一「『20世紀絵画の流れ』展 石橋美術館」『毎日新聞』2008年7月12日

山内重太郎「ベスト展7月」『読売新聞』2008年8月8日夕刊

廣崎靖邦「ART パリ発ニューヨーク・20世紀絵画の流れを見る」『ぐらんぞ』第104回7月号、西広案内ぐらんぞ編集部、2008年6月

「Twelve Stars of Art & Culture」『福岡 EU 協会会報 Twelve Stars』第24巻6月号、福岡 EU 協会事務局、2008年6月30日

### テレビ・ラジオ：

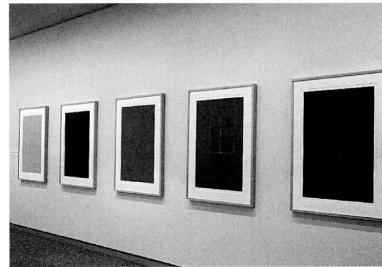
「はぴはぴテレビ」NHK 佐賀放送局、2008年5月1日放映

「すすめ！福岡おたすけ隊」TVQ 九州放送、2008年6月2日放映

「番組カテゴリー T・T 展覧会紹介」CROSS FM、2008年5月26日放送



会場風景



会場風景



会場風景



会場風景

## ノスタルジア 11.11.11—郡山市立美術館のイギリス美術

2008年10月11日(土)－12月14日(日)

会場：本館

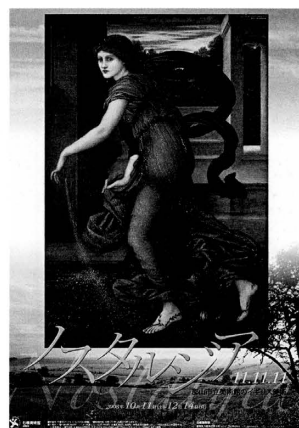
主催：石橋財団石橋美術館 / 郡山市立美術館 / 西日本新聞社 / TVQ 九州放送

後援：久留米市 / 久留米市教育委員会 / 財団法人久留米文化振興会

概要：旧久留米藩士郡山入植130年を記念した交換展。郡山市立美術館所蔵の101件によって、イギリス近代絵画の流れ、および明治から大正にかけての日英美術家の交流を紹介した。なお、別館では、「石橋美術館の和」と題し、屏風、漆器、茶道具など計28点を展示した。

出品内容：油彩35点、水彩・素描など40点、版画26件 計101件

入場者総数：12,867人(1日平均218人)



展覧会ポスター

### 出品目録：

#### 第1部 イギリス近代絵画の流れ

1. ウィリアム・ホーガース《サミュエル・マーティンの肖像》/ 1758-60年頃 / 油彩・カンヴァス
2. ウィリアム・ホーガース《性格と戯画》/ エッチング
3. ウィリアム・ホーガース《誤った遠近法》/ エッチング
4. リチャード・ウィルソン《ケケロの別荘》/ 油彩・カンヴァス
5. アレクサンダー・カズンズ《川岸に神殿のある風景》/ 水彩・紙
6. サー・ジョシュア・レイノルズ《エグリントン伯爵夫人、ジェーンの肖像》/ 1777年 / 油彩・カンヴァス
7. サー・ジョシュア・レイノルズ《キティ・フィッシャーの肖像習作》/ 1759-67年頃 / 油彩・カンヴァス
8. トマス・ゲインズボロ《荷馬車のいる丘陵地帯の森の風景》/ 1745-46年頃 / 油彩・カンヴァス
9. トマス・ゲインズボロ《牧夫と牛のいる森の風景》/ 1758年頃 / 鉛筆・紙
10. トマス・ゲインズボロ《オース夫人の肖像》/ 1767年 / 油彩・カンヴァス
11. ポール・サンドビー《ウォーリック城シーザー塔》/ 1778-82年 / 水彩、ペン、インク・紙
12. ジョン・ロバート・カズンズ《サヴォワ地方、サランシュ付近のアルプス溪谷》/ 水彩・紙
13. トマス・ローランドソン《北ウエールズ、カマーゼンの風景、教会へ向かう人々》/ 1790年代初頭 / 水彩・紙
14. トマス・ローランドソン《ヘント付近、ローエン駅に着く馬車》/ 1790年代 / 水彩・紙
15. ウィリアム・ブレイク《眠るダンカン王に近づくマクベス夫人》/ 水彩、インク・紙
16. ウィリアム・ブレイク《ダンテの神曲のための連作(全7点)》/ 1826-7年 / エングレーヴィング、ドライポイント
17. ジョン・クローム《ヘレスドンの眺め》/ 1807年頃 / 油彩・カンヴァス
18. ジョン・クローム《マウスホルド・ヒース、ノリッジ》/ 1810年頃 / エッチング
19. サー・トマス・ローレンス《ラビー・ウィリアム牧師》/ 1790年代初頭 / 油彩・カンヴァス
20. トマス・ガーティン《エクセター大聖堂》/ 1798年頃 / 水彩・紙
21. ジョセフ・マロード・ウィリアム・ターナー《コニストンの荒地》/ 1797頃 / 水彩、鉛筆・紙

- 
22. ジョセフ・マロード・ウィリアム・ターナー 《カンバーランド州のコールダー・ブリッジ》 / 1810年 / 油彩・カンヴァス
  23. ジョセフ・マロード・ウィリアム・ターナー 《サン・ゴタル峠の下り道》 / 1848年 / 水彩・紙
  24. ジョセフ・マロード・ウィリアム・ターナー 《ストーンヘンジ》 / 1823年 / エッチング、エングレーヴィング
  25. ジョセフ・マロード・ウィリアム・ターナー 《ネッカー川対岸から見たハイデルベルク》 / 1846年 / エッチング、エングレーヴィング
  26. ジョン・コンスタブル 《デダムの谷》 / 1802年 / 油彩、紙・カンヴァス
  27. ジョン・コンスタブル 《ヤーマス、ノーフォーク》 / 1832年 / メゾチント、手彩色
  28. ジョン・コンスタブル 《虹、ソールズベリー大聖堂》 / 1843-7年 / メゾチント
  29. ジョン・ヴァーレー 《ポントシスリット・アクアダクト》 / 1826年 / 水彩・紙
  30. ジョン・セル・コットマン 《ルアン、ラ・ビュセル広場のブルテルールド館》 / 1823年 / 水彩・紙
  31. ジョン・セル・コットマン 《フェカンのロマネスク遺跡》 / 鉛筆・紙
  32. デイヴィッド・コックス 《川辺の騎手と人物》 / 1850年 / 水彩、鉛筆、チョーク・紙
  33. ピーター・デ・ヴィント 《ウィットビー》 / 水彩・紙
  34. ジョン・マーティン 《フレッシュウォーター・ベイ》 / 1815年頃 / 油彩・カンヴァス
  35. ジョン・マーティン 《裁きを受けるアダムとイブ》 / 1833年 / 水彩・紙
  36. ジョン・リネル 《正午(真昼の羊)》 / 1818年 / エッチング
  37. エドワード・カルヴァート 《林檎酒の宴》 / 1828年 / 木口木版
  38. エドワード・カルヴァート 《小川》 / 1829年 / 木口木版
  39. エドワード・カルヴァート 《貴婦人とミヤマガラス》 / 1829年 / 木口木版
  40. エドワード・カルヴァート 《家路》 / 1830年 / 木口木版
  41. リチャード・パークス・ボニントン 《ボローニャ》 / エッチング
  42. サミュエル・パーマー 《昇る月(イングランドの田園詩)》 / 1857年 / エッチング
  43. トマス・マイルズ・リチャードソン・ジュニア 《コンウェイ城の日没》 / 1855年 / 水彩・紙
  44. ジョン・ラスキン 《オーヴェルニュの丘》 / 鉛筆、ホワイトボディカラー・紙
  45. フォード・マドックス・ブラウン 《牢獄のジャコボ・フォスカリ》 / 1869年 / チョーク・紙
  46. ダンテ・ガブリエル・ロセッティ 《マドンナ・ピエトラ》 / 1874年 / パステル・紙
  47. サー・ジョン・エヴァレット・ミレイ 《自画像》 / エッチング
  48. サー・エドワード・コーリー・バーン=ジョーンズ 《フローラ》 / 1868-84年 / 油彩・カンヴァス
  49. サー・エドワード・コーリー・バーン=ジョーンズ 《キリストの昇天》 / 1875年 / チョーク、墨・紙
  50. サー・エドワード・コーリー・バーン=ジョーンズ 《アヴァロンにおけるアーサー王の眠り》 / 1894年 / グワッシュ・紙
  51. サー・エドワード・コーリー・バーン=ジョーンズ 《フラワーブックより(10点)》 / 1905年 / リトグラフ
    - 51-1. 《1. 霧の中の愛》
    - 51-2. 《5. 天国の薔薇》
    - 51-3. 《9. 黄金の門》
    - 51-4. 《10. ヴィナスの鏡》
    - 51-5. 《14. もつれた愛》
    - 51-6. 《16. 海の墓》
    - 51-7. 《22. 風と共に》
    - 51-8. 《26. 世界の驚き》
    - 51-9. 《34. 白い庭》
    - 51-10. 《38. 昼と夜》
-

- 
52. ジェームズ・アボット・マクニール・ホイッスラー 《ラルエット坊や》 / 1859年 / エッチング
  53. ジェームズ・アボット・マクニール・ホイッスラー 《渡し場 no.2》 / 1880年 / エッチング、ドライポイント
  54. ジェームズ・アボット・マクニール・ホイッスラー 《小さなね橋、アムステルダム》 / 1889年 / エッチング
  55. アルバート・ジョセフ・ムーア 《黄色いマーガレット》 / 1881年 / 油彩・カンヴァス
  56. アルバート・グッドウィン 《エンゲルベルク》 / 水彩・紙
  57. ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス 《フローラ》 / 油彩・カンヴァス
  58. ウォルター・シッカート 《カフェの中》 / 1914年頃 / 油彩・カンヴァス
  59. ウォルター・シッカート 《麦わら帽子》 / 1907年頃 / リトグラフ
  60. フランク・ブランギン 《花園》 / 1900年頃 / 油彩・板
  61. フランク・ブランギン 《ヴェニス・運河》 / 1924年 / 油彩・カンヴァス
  62. フランク・ブランギン 《馬車》 / 水彩・紙
  63. オーブリー・ビアズリー 《おまえの口に口づけしたよ、ヨカナーン(『サロメ』挿絵)》 / 1893年 / ラインブロック
  64. オーブリー・ビアズリー 《『イエローブック』第5巻表紙デザイン》 / 1895年 / ラインブロック

## 第2部 日英美術の交流

65. 高橋由一 《風景(鳥海山)》 / 1880年代 / 油彩・カンヴァス
  66. チャールズ・ワグマン 《西洋紳士スケッチの図》 / 1870年代 / 油彩・スケッチボード
  67. チャールズ・ワグマン 《ふたりの日本女性》 / 水彩・紙
  68. 百武兼行 《風車のある風景》 / 1877年 / 油彩・カンヴァス
  69. アルフレッド・ウィリアム・パーソンズ 《箱根の秋》 / 水彩・紙
  70. アルフレッド・ウィリアム・パーソンズ 《鎌倉の茶店》 / グワッシュ・紙
  71. サー・アルフレッド・イースト 《雨後の傘干し》 / 1889年 / 水彩・紙
  72. サー・アルフレッド・イースト 《九月の陽光》 / 油彩・カンヴァス
  73. ジョン・ヴァーレー・ジュニア 《日光の茶屋》 / 1890年 / 油彩・板
  74. ジョン・ヴァーレー・ジュニア 《宮島の街並》 / 水彩・紙
  75. 諫山麗吉 《甲州猿橋》 / 油彩・カンヴァス
  76. 彭城貞徳 《雪景色》 / 水彩・紙
  77. モーティマー・メンペス 《新作芝居》 / 1887年頃 / エッチング、ドライポイント
  78. 五姓田芳柳(二世) 《風景》 / 水彩・紙
  79. 五姓田芳柳(二世) 《月の瀬・奥の谷》 / 水彩・紙
  80. 原 撫松 《日本髪の若い女性像》 / 油彩・カンヴァス
  81. 原 撫松 《牧野義雄像》 / 1904年 / 水彩・紙
  82. 原 撫松 《霧の広場》 / 1906年 / 油彩・カンヴァス
  83. フランク・ブランギン(画)、漆原木虫(刻) 《外国風景》 / 木版
  84. フランク・ブランギン(画)、漆原木虫(刻) 《橋のある風景》 / 木版
  85. 牧野義雄 《夜のリージェント・パーク》 / 1928年 / 油彩・カンヴァス
  86. 牧野義雄 《日本大使館から見たロンドン爆撃》 / 1940年 / 油彩・カンヴァス
  87. 石川欽一郎 《ロンドン、テムズ河岸ハマースミス》 / 1917年 / 水彩・紙
  88. 石川欽一郎 《サウス・ケンジントン》 / 水彩・紙
  89. 白瀧幾之助 《農婦と牛のいる風景》 / 油彩・カンヴァス
  90. 三宅克己 《ブルージュ》 / 1910年 / 水彩・紙
  91. 三宅克己 《セーヌ河畔サンジェルマンを望む》 / 水彩・紙
-

- 
92. 高木背水《港の風景》/ 油彩・カンヴァス
  93. 高木背水《風景》/ 油彩・カンヴァス
  94. 武内鶴之助《虹(英国牧場風景)》/ 油彩・カンヴァスボード
  95. 武内鶴之助《英国南部ミル牧場》/ 油彩・カンヴァス
  96. 南薫造《川べりの家》/ 水彩・紙
  97. 南薫造《橋のある河》/ 水彩・紙
  98. 南薫造《バーン=ジョーンズ作「水車」模写》/ 1908年 / 油彩・カンヴァス
  99. 栗原忠二《オックスフォード》/ グワッシュ・紙
  100. 栗原忠二《ヴァンス風景》/ 油彩・カンヴァス
  101. バーナード・リーチ《きこり》/ 油彩・紙

#### 関連事業：

---

美術講座 → p.55

ギャラリートーク

#### 広報記録：

---

##### 新聞・雑誌：

「郡山美術館の英国作品紹介」『朝日新聞』2008年10月12日

宇田 懐「英国美術の楽しみ『ノスタルジア』展の作品から」

1-4『西日本新聞』、2008年10月20日－23日夕刊

「英国近代絵画の流れ紹介〈本社の事業〉」『西日本新聞』2008年10月23日

宇田 懐「英国美術と近代日本『ノスタルジア』展の作品から」  
(上)(中)(下)『西日本新聞』2008年11月6日－8日

「肖像画や風景画約100点〈彩事館〉」『西日本新聞』2008年11月8日夕刊

菅野洋人「バーン=ジョーンズの《フローラ》男たちを惑わす『運命の女』」『西日本新聞』2008年11月14日

「〈ベスト展〉」『読売新聞』2008年11月14日夕刊

中村共子「〈美術 批評!〉美や欲望ににじむ終末感―『ノスタルジア11.11.11』展」『朝日新聞』2008年11月28日夕刊



会場風景



会場風景

## 〈交換展〉

### 「海の幸」 青木繁と久留米の美術

2008年11月1日(土)－12月14日(日)

会場：郡山市立美術館

主催：郡山市立美術館 / 石橋財団石橋美術館

概要：久留米藩士入植130周年を記念して開催された交換展。青木、坂本、古賀を中心に、久留米の近代洋画の系譜を紹介。

出品内容：油彩53点、水彩など17件、銅2点 計134件

入場者総数：6,826人(1日平均180人)



展覧会ポスター

### 出品目録：

1. 豊田勝秋《石橋正二郎胸像》 / 1968年 / 銅 / 雑49

#### 青木繁、坂本繁二郎の時代

2. 早川銈太郎《風景》 / 水彩・紙 / 日洋517
3. 早川銈太郎《戦場の図》 / 油彩・カンヴァス / 日洋518
4. 森 三美《鶏のいる風景》 / 1910年頃 / 油彩・板 / 寄託作品
5. 森 三美《農夫》 / 1910年頃 / 油彩・板 / 寄託作品
6. 森 三美《海岸風景》 / 1910年頃 / 油彩・板 / 寄託作品
7. 松本豊太《二人の少女》 / 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋535
8. 吉田博《上高地》 / 1927年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋250
9. 吉田博《ウダイプール宮殿》 / 1931年 / 油彩・カンヴァス / 日洋248
10. 吉田博《風景(ダージリン)》 / 1931年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋249
11. 吉田博《奔流》 / 1936年 / 油彩・カンヴァス / 日洋82
12. 青木繁《自画像》 / 1903年 / 油彩・カンヴァス / 日洋87
13. 青木繁《自画像》 / 1903年 / 色鉛筆・紙 / 日洋86
14. 青木繁《閻魔弥尼》 / 1903年 / 油彩・板 / 日洋89
15. 青木繁《輪転》 / 1903年 / 油彩・カンヴァス / 日洋90
16. 青木繁《海の幸》 / 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋95
17. 青木繁《海》 / 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋498
18. 青木繁《海》 / 1904年 / 油彩・板 / 日洋94
19. 青木繁《水浴》 / 1904年 / 水彩・紙 / 日洋101
20. 青木繁《丘に立つ三人》 / 1904年 / 水彩・紙 / 日洋93
21. 青木繁《光明皇后》 / 1905年 / 油彩・カンヴァス / 日洋102
22. 青木繁《大穴牟知命》 / 1905年 / 油彩・カンヴァス / 日洋197



- 
23. 青木繁《狂女》/ 1906年 / 水彩・紙 / 日洋381
  24. 青木繁《わだつみのいろこの宮》/ 1907年 / 油彩・カンヴァス / 日洋104
  25. 青木繁《春》/ 1908年 / 水彩・布(襖布) / 日洋106
  26. 青木繁《秋》/ 1908年 / 水彩・布(襖布) / 日洋107
  27. 青木繁《月下滞船図》/ 1908年 / 油彩・カンヴァス / 日洋105
  28. 坂本繁二郎《夏野》/ 1898年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
  29. 坂本繁二郎《水縄山風景》/ 1898年 / 水彩・紙 / 日洋536
  30. 坂本繁二郎《魚を持ってきた海女》/ 1913年 / 油彩・カンヴァス / 日洋204
  31. 坂本繁二郎《静物》/ 1918年 / 油彩・カンヴァス / 日洋194
  32. 坂本繁二郎《牛》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / 日洋301
  33. 坂本繁二郎《帽子を持てる女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋195
  34. 坂本繁二郎《読書の女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋112
  35. 坂本繁二郎《パリ郊外》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋192
  36. 坂本繁二郎《自像》/ 1923-30年 / 油彩・カンヴァス / 日洋300
  37. 坂本繁二郎《放牧三馬》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋114
  38. 坂本繁二郎《柿》/ 1944年 / 油彩・カンヴァス / 日洋210
  39. 坂本繁二郎《能面》/ 1954年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
  40. 坂本繁二郎《林檎 蜜柑 柿》/ 1958年 / 油彩・カンヴァス / 日洋216
  41. 坂本繁二郎《植木鉢》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品

#### 古賀春江の時代

42. 松田諦晶《刈跡》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / 日洋506
43. 松田諦晶《自画像》/ 1929年 / 油彩・板 / 日洋312
44. 高島野十郎《ベニスの昼》/ 1930-33年頃 / 油彩・カンヴァスボード / 日洋467
45. 高島野十郎《筑紫観世音寺》/ 1952年 / 油彩・カンヴァス / 日洋466
46. 古賀春江《柳川風景》/ 1914年 / 水彩・紙 / 日洋523
47. 古賀春江《筑後川》/ 1914年頃 / 水彩・紙 / 日洋471
48. 古賀春江《自画像》/ 1916年 / 水彩・紙 / 日洋322
49. 古賀春江《地藏尊》/ 1919年 / 水彩・紙 / 日洋315
50. 古賀春江《海水浴の女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋168
51. 古賀春江《誕生》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / 日洋167
52. 古賀春江《静物》/ 1925年頃 / 水彩・紙 / 日洋302
53. 古賀春江《美しき博覧会》/ 1926年 / 水彩・紙 / 日洋321
54. 古賀春江《素朴な月夜》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋161
55. 古賀春江《鳥籠》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋164
56. 古賀春江《単純な哀話》/ 1930年 / 油彩・カンヴァス / 日洋162
57. 古賀春江《厳しき伝統》/ 1931年 / 油彩・カンヴァス / 日洋163

#### その後の画家たち

58. 小松清次《由布湖にかかった橋と由布岳》/ 油彩・カンヴァス / 日洋469
59. 山村秀一《船溜り》/ 水彩・紙 / 日洋513
60. 山村秀一《さば》/ 1965年 / 水彩・紙 / 日洋514
61. 豊田勝秋《春日》/ 1930年 / 銅 / 雑46
62. 田崎廣助《風景》/ 油彩・カンヴァス / 日洋278
63. 井上三綱《収穫》/ 1928年 / 油彩・カンヴァス / 日洋289

- 
64. 井上三綱《裸婦群像》/ 1955年 / 石膏、水彩・紙 / 日洋334-1  
65. 高田力蔵《アテネのエレクテイオン》/ 1938年 / 油彩・カンヴァス / 日洋385  
66. 高田力蔵《エトルタの断崖》1939年 / 油彩・カンヴァス / 日洋182  
67. 伊東静尾《解放》/ 1953年 / 油彩・カンヴァス / 日洋339  
68. 伊東静尾《土》/ 1961年 / 油彩・板 / 日洋342  
69. 坂 宗一《脱穀》/ 油彩・カンヴァス / 日洋509  
70. 坂 宗一《久住(晩秋)》/ 油彩・カンヴァス(板に貼付) / 日洋510  
71. 内野秀美《羨の花》/ 1980年 / 油彩・カンヴァス / 日洋516  
72. 古沢岩美《地の塩》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / 日洋218

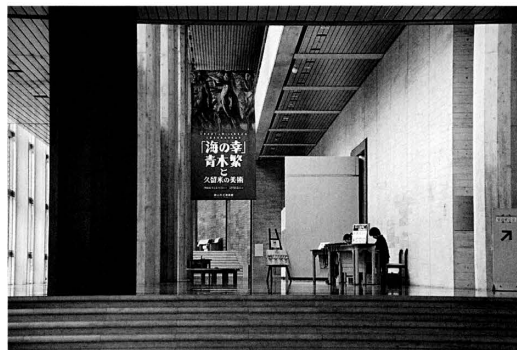
関連事業：

講演会 → p.57

特別ギャラリートーク



会場風景



会場風景



会場風景



会場風景

---

広報記事：

新聞・雑誌：

「門外不出の2点11月に市立美術館」『福島民友』2008年5月19日

高浜兼二「みんゆう随想久留米から《海の幸》」『福島民友』2008年5月24日

中川原有紀「《海の幸》青木繁と久留米の美術」『河北新報』2008年11月13日

中川原有紀「郡山市立美術館だより」『福島民報(タイム)』2008年11月20日

「青木繁作品の制作経緯学ぶ市立美術館で講座」『福島民友』2008年11月25日

中川原有紀「《海の幸》青木繁と久留米の美術」『福島民友』2008年11月26日

中川原有紀「青木繁の《海》郡山へ」『福島民報』2008年12月7日

「青木繁らの作品紹介郡山市立美術館トーク」『福島民友』2008年12月9日、10日

## 〈企画展〉

### もっと知る美術・展

〈予習編〉：2007年12月2日(日)－2008年2月17日(日)

〈講座編〉：2008年2月20日(水)－5月9日(金)

会場：本館・別館

主催：石橋財団石橋美術館 / TVQ 九州放送

後援：久留米市 / 久留米市教育委員会 / 財団法人久留米文化振興会

概要：石橋美術館所蔵作品(寄託作品やブリヂストン美術館作品を含む)のなかから、日本近代美術を展示。作家が属した美術団体や発表した展覧会に注目し、美術を学ぶひとつの方法を提示した。

出品内容：〈予習編〉：油彩107点、水彩10点、日本書画13点、陶器8点、漆器13点、その他11点 計162点

〈講座編〉：油彩104点、日本書画9点、陶器7点、漆器13点、その他20点 計149点

入場者総数：14,624人(1日平均108人)



展覧会チラシ

### 出品目録－予習編：

1. 豊福知徳《透過する立像(白)》 / 1991年 / 木(マホガニー) / 日彫19
2. 豊福知徳《半円柱Ⅰ》 / 1964年 / ブロンズ / 日彫15

### 白馬会(展示室1)

3. 黒田清輝《針仕事》 / 1890年 / 油彩・カンヴァス / 日洋7
4. 藤島武二《天平の面影》 / 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋11
5. 藤島武二《ヴェルサイユ風景》 / 1906-07年 / 油彩・カンヴァス / 日洋21
6. 岡田三郎助《薔薇の少女》 / 1901年 / 油彩・カンヴァス / 日洋231
7. 白瀧幾之助《炉端》 / 油彩・板 / 日洋235
8. 和田英作《読書》 / 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋64
9. 北 蓮蔵《風景》 / 油彩・板 / 日洋413
10. 青木繁《輪転》 / 1903年 / 油彩・カンヴァス / 日洋90
11. 青木繁《海の幸》 / 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋95
12. 青木繁《海》 / 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋498
13. 青木繁《大穴牟知命》 / 1905年 / 油彩・カンヴァス / 日洋197
14. 青木繁《わだつみのいろこの宮》 / 1907年 / 油彩・カンヴァス / 日洋104
15. 青木繁《月下滞船図》 / 1908年 / 油彩・カンヴァス / 日洋105

### 太平洋画会(展示室2)

16. 中丸精十郎《瀑》 / 1890年 / 油彩・カンヴァス / 日洋1
17. 浅井忠《樹下の女》 / 1901年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋291
18. 原田直次郎《童女図》 / 1885年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋6
19. 原田直次郎《男の人》 / 1887年 / 油彩・厚紙 / 日洋305
20. 原田直次郎《外国の男》 / 1889年 / 鉛筆・紙 / 日洋311

- 
21. 原田直次郎《村の風景》/ 油彩・板 / 日洋307
  22. 原田直次郎《風景》/ 水彩・紙 / 日洋309
  23. 萩生田文太郎《湖》/ 油彩・カンヴァス / 日洋414
  24. 満谷国四郎《坐婦》/ 1913年 / 油彩・カンヴァス / 日洋67
  25. 満谷国四郎《ブルターニュ風景》/ 1913年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋68
  26. 満谷国四郎《焦山》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / 日洋70
  27. 石川寅治《風景》/ 油彩・カンヴァス / 日洋412
  28. 吉田博《上高地》/ 1927年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋250
  29. 吉田博《ウダイプールの宮殿》/ 1931年 / 油彩・カンヴァス / 日洋248
  30. 吉田博《風景(ダージリン)》/ 1931年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋249
  31. 坂本繁二郎《町裏》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
  32. 三上知治《橋のある風景(フィレンツェ)》/ 油彩・カンヴァス / 日洋275

#### 文展(展示室3)

33. 黒田清輝《鉄砲百合》/ 1909年 / 油彩・カンヴァス / 日洋9
34. 岡田三郎助《水浴の前》/ 1916年 / 油彩・カンヴァス / 日洋63
35. 和田英作《チューリップ》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 日洋65
36. 中沢弘光《思い出(下図)》/ 1909年 / 油彩・カンヴァス / 日洋72
37. 石川寅治《農事忙》/ 1947年 / 油彩・カンヴァス / 日洋81
38. 吉田博《奔流》/ 1936年 / 油彩・カンヴァス / 日洋82
39. 坂本繁二郎《魚を持ってきた海女》/ 1913年 / 油彩・カンヴァス / 日洋204
40. 金山平三《港》/ 1945-56年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋120
41. 金山平三《石母田の堤》/ 1952-55年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋121
42. 遠山五郎《婦人読書図》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 日洋146
43. 片多徳郎《芙蓉》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / 日洋147
44. 牧野虎雄《ひまわり》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋198
45. 伊原宇三郎《椅子によれる》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋277

#### 二科会(展示室4)

46. 山下新太郎《端午》/ 1915年 / 油彩・カンヴァス / 日洋423
47. 山下新太郎《金閣寺林泉》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 日洋214
48. 石井柏亭《傘松(ナポリ風景)》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋109
49. 石井柏亭《ソレント》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋108
50. 坂本繁二郎《牛》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / 日洋301
51. 坂本繁二郎《パリ郊外》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋192
52. 坂本繁二郎《母の像》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
53. 坂本繁二郎《放牧三馬》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋114
54. 藤田嗣治《横たわる女と猫》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋215
55. 小出樞重《裸婦》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 日洋138
56. 安井曾太郎《玉蟲先生像》/ 1934年 / 油彩・カンヴァス / 日洋144
57. 安井曾太郎《レモンとメロン》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋268
58. 児島善三郎《立つ》/ 1928年 / 油彩・カンヴァス / 日洋495
59. 古賀春江《鳥籠》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋164
60. 古賀春江《厳しき伝統》/ 1931年 / 油彩・カンヴァス / 日洋163
61. 山口長男《累形》/ 1958年 / 油彩・板 / 日洋184

---

#### 来目会(展示室5)

- 62. 森 三美《鶏のいる風景》/ 1910年頃 / 油彩・板 / 寄託作品
- 63. 森 三美《農夫》/ 1910年頃 / 油彩・板 / 寄託作品
- 64. 森 三美《海岸風景》/ 1910年頃 / 油彩・板 / 寄託作品
- 65. 松本豊太《二人の少女》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋535
- 66. 青木繁《農家》/ 1904年 / 油彩・板 / 日洋96
- 67. 青木繁《木立(森の暮色)》/ 1904年 / 油彩・板 / 日洋97
- 68. 青木繁《雪景》/ 1906年 / 油彩・板 / 日洋103
- 69. 坂本繁二郎《柿》/ 1944年 / 油彩・カンヴァス / 日洋210
- 70. 坂本繁二郎《植木鉢》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
- 71. 松田諦晶《田植どき》/ 1960年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
- 72. 小松清次《由布湖にかかった橋と由布岳》/ 油彩・カンヴァス / 日洋469
- 73. 古賀春江《曲糸につく》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋546
- 74. 山村秀一《船溜り》/ 水彩・紙 / 日洋513
- 75. 坂 宗一《久住(晩秋)》/ 油彩・カンヴァス / 日洋510
- 76. 伊東静尾《激動》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
- 77. 内野秀美《ひとり》/ 1960年 / 油彩・カンヴァス / 日洋515

#### 春陽会(展示室6)

- 78. 小杉未醒《戊辰秋日》/ 1928年 / 油彩・カンヴァス / 日洋545
- 79. 斎藤与里《秋景》/ 油彩・カンヴァス / 日洋122
- 80. 梅原龍三郎《静物(りんごと梨)》/ 1917年 / 油彩・カンヴァス / 日洋270
- 81. 梅原龍三郎《桜島》/ 1935年 / 油彩・紙 / 日洋274
- 82. 梅原龍三郎《静物(茄子と南瓜)》/ 1951年 / デトランプ・紙 / 日洋273
- 83. 岸田劉生《麗子像》/ 1922年 / テンペラ・カンヴァス / 日洋226
- 84. 青山義雄《南仏アルプス遠望》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋160
- 85. 林 倭衛《フランス風景》/ 1924-25年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋171
- 86. 林 倭衛《サント・ヴィクトワール》/ 1925-29年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋170
- 87. 高田力蔵《アテネのエレクトイオン》/ 1938年 / 油彩・カンヴァス / 日洋385
- 88. 高田力蔵《パルテノンの午後》/ 1939年 / 油彩・カンヴァス / 日洋386
- 89. 高田力蔵《回想のアクロポリス》/ 1939年 / 油彩・カンヴァス / 日洋387
- 90. 木村莊八《仲見世(春陽会石版画集)》/ 1956年頃 / 石版 / 日版6-10
- 91. 中川一政《魚(春陽会石版画集)》/ 1956年頃 / 石版 / 日版6-2
- 92. 加山四郎《魚(春陽会石版画集)》/ 1956年 / 石版 / 日版6-6
- 93. 三雲祥之助《彫刻家(春陽会石版画集)》/ 1956年 / 石版 / 日版6-7
- 94. 中谷泰《風景(春陽会石版画集)》/ 1956年頃 / 石版 / 日版6-9

#### 独立美術協会(展示室7)

- 95. 長谷川利行《動物園風景》/ 1937年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋155
- 96. 長谷川利行《裸婦》/ 1938年 / 油彩・カンヴァス / 日洋156
- 97. 須田国太郎《禱原風景》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋157
- 98. 児島善三郎《トレド風景》/ 1928年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋159
- 99. 児島善三郎《海芋とキリン草》/ 1954年 / 油彩・カンヴァス / 日洋203
- 100. 高島達四郎《マントン風景》/ 1966-67年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋208
- 101. 佐伯祐三《コルドヌリ(靴屋)》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 日洋173

- 
102. 佐伯祐三《広告貼り》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 日洋176
  103. 佐伯祐三《休息(鉄道工夫)》/ 1927年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋188
  104. 海老原喜之助《青年像》/ 1944年 / 油彩・カンヴァス / 日洋286
  105. 松本英一郎《さくら・うし95-1》/ 1995年 / 油彩・カンヴァス / 日洋555
  106. 松本英一郎《さくら・うし95-2》/ 1995年 / 油彩・カンヴァス / 日洋556

#### 新制作派協会(展示室8)

107. 藤島武二《チョチャラ》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / 日洋25
108. 藤島武二《ヴィラ・デステの池》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァスボード / 日洋40
109. 藤島武二《糸杉》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァスボード / 日洋41
110. 藤島武二《浪(大洗)》/ 1931年 / 油彩・カンヴァス / 日洋48
111. 藤島武二《屋島よりの遠望》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋50
112. 藤島武二《奈良風景》/ 1934年 / 油彩・カンヴァス / 日洋52
113. 藤島武二《旭光(新高山)》/ 1935年 / 油彩・カンヴァス / 日洋244
114. 中西利雄《ピアノのある部屋》/ 1947年 / 水彩・紙 / 日洋181
115. 中西利雄《風景(東大構内)》/ 1947年 / 水彩・紙 / 日洋279
116. 荻須高德《角の居酒屋》/ 1940年 / 油彩・カンヴァス / 日洋281
117. 荻須高德《巴里風景》/ 1949年 / 水彩、ペン、インク・紙 / 日洋282
118. 荻須高德《巴里風景》/ 1949年 / 水彩、ペン、インク・紙 / 日洋283
119. 荻須高德《巴里風景》/ 1949年 / 水彩、ペン、インク・紙 / 日洋284
120. 荻須高德《巴里風景》/ 1949年 / 水彩、ペン、インク・紙 / 日洋285
121. 猪熊弦一郎《犬》/ 1954年 / グワッシュ、墨・紙 / 日洋485
122. 猪熊弦一郎《犬と猫》/ 1954年 / グワッシュ、ペン、インク、鉛筆・紙 / 日洋486
123. 小磯良平《二人》/ 1954年 / リトグラフ / 日版131
124. 三岸節子《フランス風景》/ 油彩・カンヴァス / 日洋287
125. 佐藤敬《作品》/ 1957年 / 油彩・カンヴァス / 日洋490
126. 脇田和《鳥を飼う人》/ 1958年 / 油彩・カンヴァス / 日洋186

#### 京都画壇(展示室9)

127. 竹内栖鳳《富嶽図》/ 大正末-昭和初期 / 絹本著色 / 日書64
128. 竹内栖鳳《潮汐去来》/ 1927-30年頃 / 絹本著色 / 日書65
129. 竹内栖鳳《鯉図》/ 1927-30年頃 / 絹本著色 / 日書66
130. 竹内栖鳳《錦秋図》/ 1926-27年頃 / 絹本著色 / 日書19
131. 竹内栖鳳《秋景富嶽図》/ 1933年 / 紙本著色 / 日書18
132. 山元春举《登嶽図》/ 絹本著色 / 日書75
133. 川村曼舟《嵐山》/ 絹本墨画 / 日書90
134. 橋本閑雪《巫峡帰帆図》/ 1928年 / 絹本著色 / 日書28
135. 近藤浩一路《暁港(島原港)》/ 1930年 / 紙本墨画 / 日書29
136. 近藤浩一路《暁月》/ 1930年頃 / 紙本墨画 / 日書30
137. 上村松篁《桜》/ 紙本金地著色 / 日書95
138. 上村松篁《桔梗》/ 紙本著色 / 日書96
139. 上村松篁《春日》/ 1996年 / 紙本金地著色 / 日書94
140. 清水六兵衛(6代)《古稀彩齒朶花瓶》/ 1974年 / 陶器 / 陶器217

### 漆器(展示室9)

141. 戸島光孚《雲鶴蒔絵手文庫》/ 明治-大正時代 / 漆器 / 漆器17
142. 雪雄《蜻蛉蒔絵手箱》/ 漆器 / 漆器21
143. 《吉野山蒔絵小簞笥》/ 大正-昭和時代 / 漆器 / 漆器23
144. 《三保の松原蒔絵棚》/ 大正時代? / 漆器 / 漆器25
145. 蒿山《光琳椿蒔絵硯函写し》/ 漆器 / 漆器26
146. 《双鶴蒔絵硯函》/ 大正時代以降 / 漆器 / 漆器20
147. 植松包美《美の山蒔絵文台》/ 大正-昭和初期 / 漆器 / 漆器12
148. 植松包美《美の山硯函》/ 大正-昭和初期 / 漆器 / 漆器13
149. 植松包美《水鏡蒔絵螺鈿硯函》/ 大正-昭和初期 / 漆器 / 漆器14
150. 植松包美《雲錦蒔絵手文庫》/ 大正-昭和初期 / 漆器 / 漆器15
151. 植松包美《籬菊蒔絵螺鈿手箱写し》/ 1914年 / 漆器 / 漆器11
152. 植松包美《子の日飾棚写し》/ 1920年 / 漆器 / 漆器16
153. 江馬長閑《須磨明石蒔絵小硯函》/ 20世紀前半 / 漆器 / 漆器10

### 陶磁器(展示室10)

154. 北大路魯山人《金襴手花鳥文鉢》/ 1925年 / 磁器 / 陶器216
155. 富本憲吉《色絵花柳文水指》/ 陶器 / 陶器195
156. 河井寛次郎《草花文扁壺》/ 昭和時代 / 陶器 / 寄託作品
157. 島岡達三《灰被縄文壺》/ 昭和時代 / 陶器 / 陶器223
158. 酒井田柿右衛門(14代)《濁手草花文八角蓋物器》/ 昭和時代 / 磁器 / 陶器222
159. 浅野勝《線文鉢》/ 昭和時代 / 陶器 / 陶器256
160. 添田和信《白釉花入》/ 昭和時代 / 陶器 / 陶器253

\*no.34岡田三郎助《水浴の前》は青山熊治《男の像》(日洋135)に、125佐藤敬《作品》は猪熊弦一郎《青い星座》(日洋484)に途中展示替え。

寄託作品以外の所蔵表記のない作品は、すべて石橋美術館蔵。

### 出品目録一講座編：

1. 豊福知徳《半円柱Ⅰ》/ 1964年 / ブロンズ / 日彫15
2. 豊福知徳《透過する立像(白)》/ 1991年 / 木(マホガニー) / 日彫19

### 白馬会(展示室1)

3. ロドルフ・ウィッツマン《水に映ずる家》/ 油彩・カンヴァス / 外洋216
4. 黒田清輝《針仕事》/ 1890年 / 油彩・カンヴァス / 日洋7
5. 藤島武二《天平の面影》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋11
6. 藤島武二《ヴェルサイユ風景》/ 1906-07年 / 油彩・カンヴァス / 日洋21
7. 岡田三郎助《薔薇の少女》/ 1901年 / 油彩・カンヴァス / 日洋231
8. 白瀧幾之助《炉端》/ 油彩・板 / 日洋235
9. 和田英作《読書》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋64
10. 青木繁《輪転》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / 日洋90
11. 青木繁《海の幸》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋95
12. 青木繁《海》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋498
13. 青木繁《大穴牟知命》/ 1905年 / 油彩・カンヴァス / 日洋197



- 
14. 青木繁《わだつみのいろこの宮》/ 1907年 / 油彩・カンヴァス / 日洋104
  15. 青木繁《月下滞船図》/ 1908年 / 油彩・カンヴァス / 日洋105

#### 太平洋画会(展示室2)

16. 中丸精十郎《瀑》/ 1890年 / 油彩・カンヴァス / 日洋1
17. 浅井忠《樹下の女》/ 1901年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋291
18. 浅井忠《縫物》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋4
19. 原田直次郎《童女図》/ 1885年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋6
20. 原田直次郎《男の人》/ 1887年 / 油彩・厚紙 / 日洋305
21. 原田直次郎《村の風景》/ 油彩・板 / 日洋307
22. 萩生田文太郎《湖》/ 油彩・カンヴァス / 日洋414
23. 満谷国四郎《坐婦》/ 1913年 / 油彩・カンヴァス / 日洋67
24. 満谷国四郎《ブルターニュ風景》/ 1913年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋68
25. 満谷国四郎《焦山》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / 日洋70
26. 石川寅治《風景》/ 油彩・カンヴァス / 日洋412
27. 吉田博《上高地》/ 1927年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋250
28. 吉田博《ウダイプール宮殿》/ 1931年 / 油彩・カンヴァス / 日洋248
29. 吉田博《風景(ダージリン)》/ 1931年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋249
30. 坂本繁二郎《町裏》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
31. 三上知治《橋のある風景(フィレンツェ)》/ 油彩・カンヴァス / 日洋275

#### 文展(展示室3)

32. 黒田清輝《鉄砲百合》/ 1909年 / 油彩・カンヴァス / 日洋9
33. 中沢弘光《思い出(下図)》/ 1909年 / 油彩・カンヴァス / 日洋72
34. 石川寅治《農事忙》/ 1947年 / 油彩・カンヴァス / 日洋81
35. 吉田博《奔流》/ 1936年 / 油彩・カンヴァス / 日洋82
36. 坂本繁二郎《魚を持ってきた海女》/ 1913年 / 油彩・カンヴァス / 日洋204
37. 金山平三《港》/ 1945-56年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋120
38. 金山平三《石母田の堤》/ 1952-55年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋121
39. 青山熊治《男の像》/ 1921年 / 油彩・カンヴァス / 日洋135
40. 中村彝《自画像》/ 1909年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋141
41. 遠山五郎《婦人読書図》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 日洋146
42. 片多徳郎《芙蓉》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / 日洋147
43. 牧野虎雄《ひまわり》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋198
44. 伊原宇三郎《椅子によれる》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋277

#### 二科会(展示室4)

45. 山下新太郎《端午》/ 1915年 / 油彩・カンヴァス / 日洋423
46. 山下新太郎《金閣寺林泉》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 日洋214
47. 坂本繁二郎《牛》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / 日洋301
48. 石井柏亭《傘松(ナポリ風景)》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋109
49. 坂本繁二郎《パリ郊外》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋192
50. 石井柏亭《ソレント》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋108
51. 坂本繁二郎《母の像》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
52. 坂本繁二郎《放牧三馬》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋114

- 
53. 藤田嗣治《横たわる女と猫》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋215
  54. 小出植重《帽子をかぶった自画像》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋137
  55. 小出植重《裸婦》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 日洋138
  56. 安井曾太郎《薔薇》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋143
  57. 安井曾太郎《玉蟲先生像》/ 1934年 / 油彩・カンヴァス / 日洋144
  58. 児島善三郎《立つ》/ 1928年 / 油彩・カンヴァス / 日洋495
  59. 古賀春江《鳥籠》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋164
  60. 古賀春江《厳しき伝統》/ 1931年 / 油彩・カンヴァス / 日洋163
  61. 山口長男《累形》/ 1958年 / 油彩・板 / 日洋184

#### 来目会(展示室5)

62. 森 三美《鶏のいる風景》/ 1910年頃 / 油彩・板 / 寄託作品
63. 森 三美《農夫》/ 1910年頃 / 油彩・板 / 寄託作品
64. 森 三美《海岸風景》/ 1910年頃 / 油彩・板 / 寄託作品
65. 松本豊太《二人の少女》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋535
66. 青木繁《農家》/ 1904年 / 油彩・板 / 日洋96
67. 青木繁《木立(森の暮色)》/ 1904年 / 油彩・板 / 日洋97
68. 青木繁《雪景》/ 1906年 / 油彩・板 / 日洋103
69. 坂本繁二郎《柿》/ 1944年 / 油彩・カンヴァス / 日洋210
70. 坂本繁二郎《植木鉢》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
71. 松田諦晶《田植どき》/ 1960年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
72. 小松清次《由布湖にかかった橋と由布岳》/ 油彩・カンヴァス / 日洋469
73. 古賀春江《曲衆につく》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋546
74. 山村秀一《さば》/ 1965年 / 水彩・紙 / 日洋514
75. 坂 宗一《久住(晩秋)》/ 油彩・カンヴァス / 日洋510
76. 伊東静尾《激動》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
77. 内野秀美《ひとり》/ 1960年 / 油彩・カンヴァス / 日洋515

#### 春陽会(展示室6)

78. 小杉未醒《戊辰秋日》/ 1928年 / 油彩・カンヴァス / 日洋545
  79. 斎藤与里《秋景》/ 油彩・カンヴァス / 日洋122
  80. 梅原龍三郎《三津浜海岸》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋227
  81. 梅原龍三郎《ノートルダム》/ 1965年 / 油彩・金箔押しした羊皮紙 / BMA / 日洋191
  82. 岸田劉生《麗子像》/ 1922年 / テンペラ・カンヴァス / 日洋226
  83. 青山義雄《南仏アルプス遠望》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋160
  84. 林 倭衛《フランス風景》/ 1924-25年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋171
  85. 林 倭衛《サント・ヴィクトワール》/ 1925-29年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋170
  86. 岡鹿之助《蝶(春陽会石版画集)》/ 1956年頃 / 石版 / 日版6-1
  87. 高田力蔵《アテネのエレクトイオン》/ 1938年 / 油彩・カンヴァス / 日洋385
  88. 高田力蔵《バルテノンの午後》/ 1939年 / 油彩・カンヴァス / 日洋386
  89. 高田力蔵《回想のアクロポリス》/ 1939年 / 油彩・カンヴァス / 日洋387
  90. 高田力蔵《トンネルのある風景(春陽会石版画集)》/ 1956年頃 / 石版 / 日版6-4
  91. 南城一夫《サーカスの馬(春陽会石版画集)》/ 1956年頃 / 石版 / 日版6-5
  92. 小川マリ子《静物(春陽会石版画集)》/ 1956年頃 / 石版 / 日版6-3
  93. 鳥海青児《川沿いの家》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋303
-

---

94. 倉田三郎《風景(春陽会石版画集)》/ 1956年頃 / 石版 / 日版6-8

#### 独立美術協会(展示室7)

95. 長谷川利行《動物園風景》/ 1937年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋155  
96. 長谷川利行《裸婦》/ 1938年 / 油彩・カンヴァス / 日洋156  
97. 須田国太郎《禱原風景》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋157  
98. 児島善三郎《トレド風景》/ 1928年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋159  
99. 児島善三郎《海芋とキリン草》/ 1954年 / 油彩・カンヴァス / 日洋203  
100. 高島達四郎《マントン風景》/ 1966-67年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋208  
101. 佐伯祐三《コルドヌリ(靴屋)》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 日洋173  
102. 佐伯祐三《広告貼り》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 日洋176  
103. 佐伯祐三《休息(鉄道工夫)》/ 1927年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋188  
104. 海老原喜之助《青年像》/ 1944年 / 油彩・カンヴァス / 日洋286  
105. 松本英一郎《平均的肥満体 No.9-J》/ 1967年 / 油彩・カンヴァス / 日洋554  
106. 松本英一郎《花と雲と牛》/ 1998年 / 油彩・カンヴァス / 日洋557

#### 東京ビエンナーレ(展示室8)

107. ジュール・ヴァン・ド・レーヌ《鏡の前》/ 1952年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋153  
108. 安井曾太郎《安倍能成君像》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋217  
109. 古沢岩美《斃卒》/ 1956年 / 油彩・カンヴァス / 日洋330  
110. 古沢岩美《地の塩》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / 日洋218  
111. 杉全直《キッコウ》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / 日洋187  
112. 駒井哲郎《果实》/ 1958年 / エッチング、アクワチント / 日版8  
113. 駒井哲郎《版画》/ 1958年 / アクワチント、エッチング / 日版11  
114. 駒井哲郎《鳥と果实》/ 1959年 / シュガーアクワチント、アクワチント / 日版9  
115. 駒井哲郎《果实の受胎》/ 1959年 / アクワチント / 日版10  
116. 駒井哲郎《エチュード》/ 1959年 / シュガーアクワチント、ビュラン / 日版12  
117. 近藤弘明《寂光》/ 1965年 / 紙本著色 / 日書41  
118. 松本英一郎《退屈な風景 茶畑》/ 1974年 / 油彩・カンヴァス / 日洋553

#### 日本美術院(展示室9)

119. 横山大観《神州第一峰》/ 1930年 / 絹本著色 / 日書23  
120. 川合玉堂《秋郊帰雁》/ 紙本墨画淡彩 / 日書77  
121. 筆谷等観《飛瀑双幅》/ 1930年 / 絹本著色 / 日書24  
122. 富田溪仙《聖人観瀑図》/ 絹本著色 / 日書83  
123. 今村紫紅《海の幸山の幸屏風》/ 1908年 / 絹本金地著色 / 日書88、89  
124. 小杉未醒(放庵)《山幸彦》/ 1917年 / 油彩・カンヴァス / 日洋85  
125. 戸張孤雁《曇り》/ 1917年 / ブロンズ / 日彫1  
126. 川端龍子《白梅図》/ 紙本金地墨画淡彩 / 日書32  
127. 前田青邨《風神雷神》/ 1949年頃 / 紙本墨画淡彩 / 日書37  
128. 堅山南風《鯉》/ 絹本著色 / 日書35  
129. 山本豊市《若い女》/ 1956年 / 乾漆 / 日彫3

#### 漆器(展示室9)

130. 戸島光孚《雲鶴蒔絵手文庫》/ 明治-大正時代 / 漆器 / 漆器17

- 
131. 雪雄《蜻蛉蒔絵手箱》/ 漆器 / 漆器21
  132. 《吉野山蒔絵小筆筥》/ 大正-昭和時代 / 漆器 / 漆器23
  133. 《三保の松原蒔絵棚》/ 大正時代? / 漆器 / 漆器25
  134. 蒿山《光琳椿蒔絵硯函写し》/ 漆器 / 漆器26
  135. 《双鶴蒔絵硯函》/ 大正時代以降 / 漆器 / 漆器20
  136. 植松包美《美のの山蒔絵文台》/ 大正-昭和初期 / 漆器 / 漆器12
  137. 植松包美《美のの山硯函》/ 大正-昭和初期 / 漆器 / 漆器13
  138. 植松包美《水鏡蒔絵螺鈿硯函》/ 大正-昭和初期 / 漆器 / 漆器14
  139. 植松包美《雲錦蒔絵手文庫》/ 大正-昭和初期 / 漆器 / 漆器15
  140. 植松包美《籬菊蒔絵螺鈿手箱写し》/ 1914年 / 漆器 / 漆器11
  141. 植松包美《子の日飾棚写し》/ 1920年 / 漆器 / 漆器16
  142. 江馬長閑《須磨明石蒔絵小硯函》/ 20世紀前半 / 漆器 / 漆器10

#### 陶磁器(展示室10)

143. 北大路魯山人《金襴手花鳥文鉢》/ 1925年 / 磁器 / 陶器216
144. 富本憲吉《色絵花柳文水指》/ 陶器 / 陶器195
145. 河井寛次郎《草花文扁壺》/ 昭和時代 / 陶器 / 寄託作品
146. 島岡達三《灰被縄文壺》/ 昭和時代 / 陶器 / 陶器223
147. 酒井田柿右衛門(14代)《濁手草花文八角蓋物器》/ 昭和時代 / 磁器 / 陶器222
148. 浅野勝《線文鉢》/ 昭和時代 / 陶器 / 陶器256
149. 添田和信《白釉花入》/ 昭和時代 / 陶器 / 陶器253

\*BMA は、ブリヂストン美術館の所蔵であることを示す。また、寄託作品以外の所蔵表記のない作品は、すべて石橋美術館蔵。

#### 関連事業：

展示室での講座を開催した。

日時・内容：

2月9日「新制作派協会」/ 2月16日「京都画壇」/ 2月23日「白馬会」/ 3月1日「日本美術院」/ 3月8日「太平洋画会」/ 3月22日「文展」/ 3月29日「二科会」/ 4月5日「来目会」/ 4月12日「春陽会」/ 4月19日「独立美術協会」/ 4月26日「東京ビエンナーレ」

※いずれも土曜日、14:00-14:40

ギャラリートーク

#### 広報記録：

新聞・雑誌：

宇田 懐「もっと知る美術・展から」上・中・下『西日本新聞』2008年1月13日-15日

森山秀子「〈感動 MUSEUM〉楽しく学び作品に近づく」『西日本新聞』2008年2月9日

## 雪舟で、み展

2008年7月29日(火)－10月3日(金)

会場：全館

主催：石橋財団石橋美術館 / TVQ 九州放送

後援：久留米市 / 久留米市教育委員会 / 財団法人久留米文化振興会

概要：京都および東京国立博物館からの特別出品を含む、コレクションによる企画展。雪舟筆《四季山水図》の紹介をメインに、ジャンルや時代の異なる作品を取り混ぜて見ることで、日本美術の魅力を味わってもらおうというもの。

出品内容：油彩・水彩・版画など93件、書画29件、史料12件 計134件

入場者総数：9,656人(1日平均161人)



展覧会ポスター

## 出品目録：

### 1 雪舟といえば、水墨画Ⅰ：墨と絵の具(画材編) 展示室1

1. 狩野周信《琴高仙人図》/ 江戸時代 / 絹本墨画 / 日書51
2. 竹内栖鳳《溪山雨後》/ 1927年頃 / 紙本墨画 / 日書20
3. 川端龍子《木菟(竹夜)》/ 近代 / 紙本墨画淡彩 / 日書31
4. 富岡鉄斎《飲中八仙図》/ 近代 / 紙本著色 / 日書16
5. 土佐光起《白菊鶏図》/ 江戸時代 / 絹本著色 / 寄託作品
6. 青木繁《木立(森の暮色)》/ 1904年 / 油彩・板 / 日洋97
7. 青木繁《農家》/ 1904年 / 油彩・板 / 日洋96
8. 青木繁《自画像》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / 日洋87
9. 青木繁《自画像》/ 1903年 / 色鉛筆・紙 / 日洋86
10. 青木繁《春》/ 1904年 / 水彩、パステル・紙 / 日洋92
11. 青木繁《水浴》/ 1904年 / 水彩・紙 / 日洋101
12. 青木繁《丘に立つ三人》/ 1904年 / 水彩・紙 / 日洋93
13. 中西利雄《風景(東大構内)》/ 1947年 / 水彩・紙 / 日洋279
14. 中西利雄《ピアノのある部屋》/ 1947年 / 水彩・紙 / 日洋181
15. 井上三綱《相》/ 1960年 / 水彩、油彩・紙 / 日洋335
16. 井上三綱《ドン・キホーテ》/ 1954年 / 石膏、墨・紙 / 日洋333
17. 海老原喜之助《素描22》/ 鉛筆、木炭・紙 / 日洋223-22
18. 海老原喜之助《素描28》/ インク、水彩・紙 / 日洋223-28
19. 海老原喜之助《素描30》/ インク、水彩・紙 / 日洋223-30
20. 海老原喜之助《素描20》/ インク、墨・紙 / 日洋223-20
21. 海老原喜之助《素描24》/ 鉛筆・紙 / 日洋223-24
22. 藤田嗣治《猫》/ 1934年 / 胡粉、墨、顔彩・紙 / 日洋262
23. 岸田劉生《麗子像》/ 1922年 / テンペラ・カンヴァス / 日洋226

---

## 2 雪舟といえば、水墨画Ⅱ：墨と絵の具(えがき方編) 展示室2

- 24. 中村不折《達磨》/ 近代 / 紙本墨画 / 日書70
- 25. 前田青邨《日の出鶴》/ 1965-75年頃 / 紙本着色 / 日書33
- 26. 前田青邨《獅子図》/ 1935年頃 / 紙本金地着色 / 日書39
- 27. 古賀春江《街の風景》/ 1923年頃 / 水彩・紙 / 日洋325
- 28. 藤島武二《朝鮮婦人》/ 1914年頃 / 油彩、パステル・紙 / 日洋45-2, 3
- 29. 藤島武二《奈良風景》/ 1934年 / 油彩・カンヴァス / 日洋52
- 30. 藤田嗣治《横たわる女と猫》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋215
- 31. 藤田嗣治《人形を抱く子供》/ 1948年 / 墨・紙 / 日洋130
- 32. 青木繁《海》/ 1904年 / 油彩・板 / 日洋94
- 33. 青木繁《海》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋498
- 34. 長谷川利行《裸婦》/ 1938年 / 油彩・カンヴァス / 日洋156
- 35. 長谷川利行《動物園風景》/ 1937年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋155
- 36. 須田国太郎《壽原風景》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 日洋157
- 37. 牧野虎雄《ひまわり》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋198
- 38. 杉全直《キッコウ》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / 日洋187

## 3 雪舟といえば、山水画Ⅰ：景色をえがく 展示室3

- 39. 木米《秋溪渡橋》/ 江戸時代 / 紙本墨画淡彩 / 日書55
- 40. 井上三綱《収穫》/ 1928年 / 油彩・カンヴァス / 日洋289
- 41-1. 坂本繁二郎《日本風景版画 筑紫之部 榎寺神社》/ 1918年 / 木版 / 日版49-1
- 41-2. 坂本繁二郎《日本風景版画 筑紫之部 神湊》/ 1918年 / 木版 / 日版49-2
- 41-3. 坂本繁二郎《日本風景版画 筑紫之部 水縄山》/ 1918年 / 木版 / 日版49-3
- 41-4. 坂本繁二郎《日本風景版画 筑紫之部 筑後川》/ 1918年 / 木版 / 日版49-4
- 41-5. 坂本繁二郎《日本風景版画 筑紫之部 火の海》/ 1918年 / 木版 / 日版49-5
- 42. 富田溪仙《手向山春雪図》/ 近代 / 絹本着色 / 日書86
- 43. 富田溪仙《宮島》/ 近代 / 絹本着色 / 日書85
- 44. 富田溪仙《宇治》/ 近代 / 絹本着色 / 日書87
- 45. 吉田博《剣山の朝》/ 1926年 / 木版 / 日版25
- 46. 吉田博《瀬戸内海集 帆船 夜》/ 1926年 / 木版 / 日版70
- 47. 吉田博《ルガノ風景》/ 1925年 / 木版 / 日版26
- 48. 吉田博《ウェテホルン》/ 1925年 / 木版 / 日版68
- 49. 吉田博《レニヤ山》/ 1925年 / 木版 / 日版23
- 50. 辻 永《ハルピンの冬》/ 1917年 / 油彩・カンヴァス / 日洋116
- 51. 辻 永《春(パリ郊外)》/ 1921年 / 油彩・カンヴァス / 日洋117
- 52. 満谷国四郎《焦山》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / 日洋70
- 53. 石井柏亭《傘松(ナポリ風景)》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋109
- 54. 藤島武二《ネミ湖》/ 1908年 / 油彩・板 / 日洋24
- 55. 藤島武二《糸杉》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァスボード / 日洋41
- 56. 藤島武二《雲(ローマ)》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / 日洋33
- 57. 藤島武二《五剣山の日の出》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋49
- 58. 藤島武二《屋島よりの遠望》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋50
- 59. 古賀春江《素朴な月夜》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋161

---

#### 4 雪舟といえば、昔の絵：その時その時のコンテンポラリーアート 展示室4

- 60. 《古今和歌集巻一断簡 高野切》 / 平安時代 / 紙本墨書 / 日書44
- 61-1. 宗達派《保元平治物語絵扇面》 / 江戸時代 / 紙本着色 / 日書5
- 61-2. 宗達派《保元平治物語絵扇面》 / 江戸時代 / 紙本着色 / 日書6
- 61-3. 宗達派《保元平治物語絵扇面》 / 江戸時代 / 紙本着色 / 日書7
- 62. 円山応挙《牡丹孔雀図屏風》 / 1781年 / 絹本着色 / 日書42
- 63. 鈴木其一《富士筑波山図屏風》 / 江戸時代 / 紙本金地着色 / 日書106
- 64. 黒田清輝《針仕事》 / 1890年 / 油彩・カンヴァス / 日洋7
- 65. 藤島武二《天平の面影》 / 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋11
- 66. 青木繁《海の幸》 / 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋95
- 67. 牧野虎雄《罌粟》 / 油彩・カンヴァス / 日洋153
- 68. 古賀春江《単純な哀話》 / 1930年 / 油彩・カンヴァス / 日洋162
- 69. 山口長男《累形》 / 1958年 / 油彩・板 / 日洋184
- 70. 白髪一雄《白い扇》 / 1965年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋543

#### 5 雪舟といえば、山水画Ⅱ：山に注目 展示室5

- 71. 野口小蘗《谿山疊翠図》 / 1899年 / 絹本着色 / 日書17
- 72. 安井曾太郎《焼岳》 / 1941年頃 / 水彩・紙 / BMA / 日洋264
- 73. 安井曾太郎《北京風景》 / 1944年 / 鉛筆、パステル、水彩・紙 / 日洋266
- 74. 安井曾太郎《北京風景》 / 1944年頃 / 水彩・紙 / 日洋267
- 75. 辻永《上高地》 / 1940年 / 油彩・カンヴァス / 日洋258
- 76. 斎藤与里《秋景》 / 油彩・板 / 日洋122
- 77. 吉田博《上高地》 / 1927年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋250
- 78. 和田英作《早春(富士)》 / 1939年 / 油彩・カンヴァス / 日洋66
- 79. 藤島武二《青富士》 / 油彩・板 / BMA / 日洋58
- 80. 和田三造《伊豆の富士》 / 1927年頃-30年 / 油彩・紙 / 日洋256
- 81. 《武蔵野図屏風》 / 江戸時代 / 紙本金地着色 / 日書49
- 82. 尾形乾山《不二図》 / 江戸時代 / 紙本着色 / 日書50
- 83. 梅原龍三郎《桜島》 / 1935年 / 油彩・紙 / 日洋274
- 84. 林倭衛《サント・ヴィクトワール》 / 1925-29年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋170
- 85. 児島善三郎《風景》 / 1951年 / 水彩・紙 / 日洋190

#### 6 雪舟といえば、中国へ：異文化にふれて気付いたこと 展示室6

- 86. 黒田清輝《鉄砲百合》 / 1909年 / 油彩・カンヴァス / 日洋9
- 87. 岡田三郎助《臥裸婦》 / 1901年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋230
- 88. 岡田三郎助《婦人像》 / 1907年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋60
- 89. 坂本繁二郎《バリ郊外》 / 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋192
- 90. 坂本繁二郎《帽子を持てる女》 / 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋195
- 91. 坂本繁二郎《放牧三馬》 / 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋114
- 92. 坂本繁二郎《植木鉢》 / 1959年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
- 93. 小杉未醒(放庵)《山幸彦》 / 1917年 / 油彩・カンヴァス / 日洋85
- 94. 梅原龍三郎《椿》 / 1944年 / 油彩(岩絵具併用)・紙 / BMA / 日洋272
- 95. 梅原龍三郎《静物(茄子と南瓜)》 / 1951年 / デトランプ・紙 / 日洋273
- 96. 佐伯祐三《休息(鉄道工夫)》 / 1927年頃 / 油彩・カンヴァス / 日洋188
- 97. 佐伯祐三《コルドヌリ(靴屋)》 / 1925年 / 油彩・カンヴァス / 日洋173

---

## 7 四季山水図に近づくⅠ：小さなモチーフ 展示室7

- 98. 因陀羅《禅機図断簡 丹霞焼仏図》/ 元時代 / 紙本墨画 / 日書100
- 99. 《伊勢集断簡 石山切(みそめすも)》/ 平安時代 / 紙本墨書 / 日書47
- 100. 坂本繁二郎《牛》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / 日洋301
- 101. 岡田三郎助《水浴の前》/ 1916年 / 油彩・カンヴァス / 日洋63
- 102. 岡田三郎助《髪梳く女》/ 1915年 / 油彩・カンヴァス / 日洋62
- 103. 青木繁《わだつみのいろこの宮》/ 1907年 / 油彩・カンヴァス / 日洋104
- 104. 小出栖重《裸婦》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 日洋138
- 105. 児島善三郎《立つ》/ 1928年 / 油彩・カンヴァス / 日洋495
- 106. 脇田和《鳥を飼う人》/ 1958年 / 油彩・カンヴァス / 日洋186
- 107. 伊東静尾《土(A)》/ 1961年 / 油彩・板 / 日洋341
- 108. 池田孤邨《青楓紅楓図屏風》/ 江戸時代 / 紙本金地著色 / 日書57

## 8 四季山水図に近づくⅡ：サイン、そして真筆とは 展示室8

- 109. 仙厓《猫鼠》/ 江戸時代 / 紙本墨画 / 日書14
- 110. 伝曾我蕭白《山水図》/ 江戸時代 / 紙本墨画 / 寄託作品
- 111-1. 宗達派《保元平治物語絵扇面》/ 江戸時代 / 紙本着色 / 日書8
- 111-2. 宗達派《保元平治物語絵扇面》/ 江戸時代 / 紙本着色 / 日書9
- 111-3. 宗達派《保元平治物語絵扇面》/ 江戸時代 / 紙本着色 / 日書10
- 112. 狩野派《竹林七賢人図屏風》/ 江戸時代 / 紙本墨画 / 日書53
- 113. 青木繁《月下滞船図》/ 1908年 / 油彩・カンヴァス / 日洋105
- 114. 藤島武二《チョチャラ》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / 日洋25
- 115. 坂本繁二郎《読書の女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 日洋112
- 116. 坂本繁二郎《柿》/ 1944年 / 油彩・カンヴァス / 日洋210
- 117. 坂本繁二郎《箱》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / 寄託作品
- 118. 片多徳郎《芙蓉》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / 日洋147
- 119. 佐伯祐三《広告貼り》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 日洋176

## 9 雪舟と出会う：いよいよ対面！ でもその前に、この人もみた 展示室9

- 120. 狩野探幽《探幽縮図》/ 江戸時代 / 紙本墨画淡彩 / 京都国立博物館
- 121. 狩野探幽《極札》/ 江戸時代 / 紙本墨書
- 122. 狩野安信《覚書》/ 江戸時代 / 紙本墨書
- 123. 《122の包紙》/ 墨書あり
- 124. 《121、122、123の包紙》/ 墨書あり
- 125. 《121、122、123、124の包紙》/ 墨書あり
- 126. 《四季山水図旧内箱の蓋》/ 桐材・墨書あり
- 127. 《和田弾右衛門書状》/ 紙本墨書
- 128. 《臨時全国宝物取調局鑑査状》/ 紙本墨書、印刷
- 129. 《128の包紙》/ 墨書あり
- 130. 《パリ万国博覧会借用書写し》/ 紙本墨書
- 131. 横山大観(原本雪舟)《四季山水図模本》/ 1897年 / 紙本墨画淡彩 / 東京国立博物館
- 132. 《大師会出品札》/ 紙本墨書
- 133. 《黒田家譲渡状》/ 昭和19年 / 紙本墨書
- 134. 雪舟《四季山水図》/ 室町時代 / 絹本墨画淡彩 / 日書1~4



## 10 雪舟と出会う：雪舟雑学部屋 展示室10

パネル展示

\*BMA はブリヂストン美術館の所蔵であることを示す。また、寄託作品以外の所蔵表記のない作品は、すべて石橋美術館蔵。

### 関連事業：

美術講座 → p.55

ギャラリートーク

夏休みこどもプログラム → p.58

### 広報記録：

#### 新聞・雑誌：

「石橋美術館で企画展」『西日本新聞』2008年7月30日筑後版

「作品を見比べる企画展」『朝日新聞』2008年8月3日筑後版

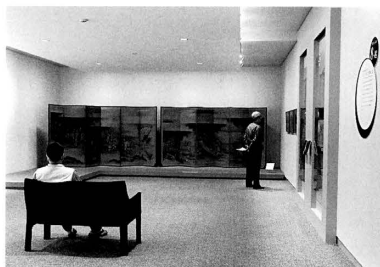
平間理香、伊藤絵里子「ミュージアム巡り 学芸員のいちおし」『西日本新聞社』2008年8月24日、9月30日県総合

#### テレビ・ラジオ：

「はぴはぴテレビ」(ギャラリー情報)NHK 佐賀放送局、2008年9月3日放映



会場風景



会場風景



会場風景



会場風景

〈土曜講座〉

土曜日 14:00－16:00 ホール

通算回数	月 日	講座題目	講師
《コレクションの新天地—戦後美術から現代へ》			
企画＝田所夏子			
2104	2008年3月8日	20世紀美術の息吹：展覧会にちなんで	島田紀夫
2105	3月15日	現代の美術：今世界で何が起こっているのか—中国からインド、そしてアブダビへ	南條史生 氏(森美術館館長)
2106	3月22日	現代美術とコレクション	尾崎信一郎 氏(鳥取県立博物館美術振興課長)
2107	3月29日	アンフォルメルと抽象表現主義	出原 均 氏(兵庫県立美術館学芸員)
2108	4月5日	美術作家たちがみた「技術立国日本」—戦後日本美術とテクノロジー	住友文彦 氏(東京都現代美術館企画係長)

《ヨーロッパとイスラム世界》

企画＝高山 博氏(東京大学教授、地中海学会)

2109	2008年4月26日	スペイン—三つの宗教が共存した土地	樺山紘一 氏(印刷博物館館長)
2110	5月3日	イスラム世界と近代ヨーロッパ文明—そして誰も何かがイスラムなのかわからなくなった	飯塚正人 氏(東京外国語大学教授)
2111	5月10日	中世シチリアー文明の交差点	高山 博 氏(東京大学教授)
2112	5月17日	イタリア中世海洋都市とイスラム世界	陣内秀信 氏(法政大学教授)
2113	5月24日	スペインとシリアー聖地巡礼と建築の交流	山田幸正 氏(首都大学東京教授)

《岡鹿之助への、5つのいざない》

企画＝貝塚 健

2114	2008年5月31日	岡鹿之助—パリ、音楽とその身のまわり	田辺 徹 氏(成安造形大学名誉教授)
2115	6月7日	岡鹿之助とアンリ・ルソー	岡谷公二 氏(跡見学園女子大学名誉教授)
2116	6月14日	1920年代の岡鹿之助—藤田嗣治というパリへの扉	林 洋子 氏(京都造形芸術大学准教授)
2117	6月21日	岡鹿之助とジョルジュ・スーラ	富田 章 氏(サントリーミュージアム[天保山]学芸部長)
2118	6月28日	“発電所” 探索—岡鹿之助が見たもの、考えていたこと	貝塚 健

---

《江戸東京・美術散歩3—画家たちが愛した街、歩いた街》

企画＝貝塚 健

- |      |           |                         |                         |
|------|-----------|-------------------------|-------------------------|
| 2119 | 2008年9月6日 | 中橋・鍛冶橋・木挽町界限—江戸狩野家の歩んだ道 | 安村敏信 氏(板橋区立美術館館長)       |
| 2120 | 9月13日     | 田端文土村界限—小杉放菴のネットワークを中心に | 田中正史 氏(小杉放菴記念日光美術館学芸係長) |
| 2121 | 9月20日     | 鳥居清長—江戸の名所を歩く八頭身美人      | 浅野秀剛 氏(大和文華館館長)         |
| 2122 | 9月27日     | 松本竣介が描いた東京              | 村上博哉 氏(国立西洋美術館学芸課長)     |

《パリと近代芸術家たち》

企画＝塩島明美

- |      |             |                          |                     |
|------|-------------|--------------------------|---------------------|
| 2123 | 2008年10月25日 | マネー都市の鏡としての芸術家           | 高橋明也 氏(三菱一号館美術館館長)  |
| 2124 | 11月1日       | 現代性とメランコリー—変容するパリのボードレール | 中地義和 氏(東京大学教授)      |
| 2125 | 11月8日       | プレスダン、メリヨン—19世紀フランスの銅版画  | 岩崎余帆子 氏(ポーラ美術館学芸課長) |
| 2126 | 11月15日      | 19世紀都市パリの新たな表現—版画家たちの挑戦  | 今橋映子 氏(東京大学准教授)     |

《地中海世界の造形文化—聖なるものと俗なるもの—》

企画＝小池寿子氏(國學院大學教授、地中海学会)

- |      |             |   |                     |
|------|-------------|---|---------------------|
| 2127 | 2008年11月22日 | 人間ピカソの愛と苦悩—磔刑とエロスの往還                      | 大高保二郎 氏(早稲田大学教授)    |
| 2128 | 11月29日      | イタリアの都市と聖人崇拜—聖遺物・伝説・美術                    | 金原由紀子 氏(尚美学園大学准教授)  |
| 2129 | 12月6日       | イタリア都市空間の中の聖と俗                            | 陣内秀信 氏(法政大学教授)      |
| 2130 | 12月13日      | 聖なるものの形—イスタンブールのビザンティン・モザイク               | 益田朋幸 氏(早稲田大学教授)     |
| 2131 | 12月20日      | 古代ギリシアの聖なる乙女の図像系譜—パルテノン・フリーズの《乙女の行列》をめぐって | 篠塚千恵子 氏(東北芸術工科大学教授) |

---

## 〈ギャラリートーク〉

---

展示室でのギャラリートークを毎週水曜日と金曜日に実施した。今年度は下記の時間帯に当館学芸員が、また各月の最終水曜日はディレクターズトークとし、館長が実施した。

水曜日、金曜日 15:00－16:00

---

## 〈ファミリープログラム〉

---

小学生を含む家族を対象にしたプログラムを、毎月2回、下記の時間帯に実施した。

日曜日 10:30－12:30

- 2008年 1月13日 「アート・サファリ」  
3組7人(子ども3人、おとな4人)
- 1月20日 「アート・サファリ」  
4組9人(子ども5人、おとな4人)
- 2月24日 「あの色、この色、どんな色？」  
5組16人(子ども7人、おとな9人)
- 3月16日 「あの色、この色、どんな色？」  
5組12人(子ども6人、おとな6人)
- 3月23日 「あの色、この色、どんな色？」  
4組18人(子ども8人、おとな10人)
- 7月20日 「暑中お見舞い申し上げます」  
4組9人(子ども4人、おとな5人)
- 7月21日 「暑中お見舞い申し上げます」  
4組9人(子ども5人、おとな4人)
- 7月27日 「暑中お見舞い申し上げます」  
5組12人(子ども6人、おとな6人)
- 8月17日 「帽子好き！好き？大好き」  
5組15人(子ども8人、おとな7人)
- 8月24日 「帽子好き！好き？大好き」  
4組9人(子ども5人、おとな4人)
- 9月21日 「親子で散策！絵の中の道」  
6組12人(子ども6人、おとな6人)
- 9月28日 「親子で散策！絵の中の道」  
4組13人(子ども7人、おとな6人)
- 10月12日 「ごちそう美術館」  
2組4人(子ども2人、おとな2人)
- 10月19日 「ごちそう美術館」  
1組4人(子ども2人、おとな2人)
- 11月16日 「変身ものがたり」  
3組9人(子ども4人、おとな5人)

- 
- 11月23日 「変身ものがたり」  
1組2人(子ども1人、おとな1人)
- 12月 7日 「クリスマス・プレゼント」  
3組9人(子ども4人、おとな5人)
- 12月14日 「クリスマス・プレゼント」  
2組4人(子ども2人、おとな2人)

〈美術講座〉

---

月 日	講座題目	講師
《坂本繁二郎旧アトリエ リニューアル記念講演会》 石橋文化会館小ホール 14:00-15:30		
2008年 3月15日	坂本繁二郎アトリエの特徴と意味	藤森照信 氏(東京大学教授)
《「パリーニューヨーク、20世紀絵画の流れ」開催記念美術講座》 講座室 14:00-15:30		
6月14日	20世紀美術—抽象絵画の誕生とその後—	岡部信幸 氏(財団法人山形美術館学芸課長)
6月28日	アメリカ絵画の成立と1945年以後の美術	山村仁志 氏(府中市生涯学習推進担当副主幹)
《「雪舟で、み展」開催記念美術講座》 講座室 14:00-15:30		
9月 6日	雪舟と四季山水	荏開津通彦 氏(山口県立美術館学芸員)
9月20日	雪舟人気の秘密	平間理香
《「ノスタルジア 11.11.11」記念美術講座》 講座室 14:00-15:30		
11月 8日	イギリス美術の流れ	管野洋人 氏(郡山市立美術館学芸員)
11月15日	近代日本美術とイギリス	森山秀子
11月29日	郡山市立美術館—コレクションの魅力—	中川原有紀 氏(郡山市立美術館学芸員)

---

## 〈ギャラリートーク〉

---

毎週土曜日は当館サポートボランティアが、また日曜日は学芸員が、本館または別館の展示室で実施した。  
時間：14:00－14:20

## 〈学習の場としての美術館利用〉

---

- 2008年 1月29日(火) 久留米市立明星中学校1年生「地域発見学習：画家 青木繁について」  
——4名(対応＝森山)  
6月 5、6日(木、金) 久留米市立江南中学校3年生「職場体験学習」 ——3名(対応＝後藤、伊藤)  
7月29、30日(火、水) 私立久留米信愛女学院中学校3年生「職場体験学習」  
——2名(対応＝後藤、森山、平間)  
10月28日(火) 久留米市立城島小学校5年生「社会科 自動車工業の盛んな地域：プリヂストン  
タイヤの親<石橋正二郎>」 ——60名(対応＝伊藤)  
11月14日(金) 久留米市立城南中学校1年生「総合学習：くるめ学」 ——24名(対応＝森山、伊藤)



総合学習の様子

---

## 〈館外活動〉

---

- 2008年 3月23日(日) 「第17回青木繁記念大賞公募展記念講演会：青木繁について」  
於：石橋美術館講座室——約50名(担当＝植野)
- 4月10日(木) 西日本新聞 TNC 文化サークル「もっと知る美術：黒田清輝と明治の洋画」  
於：石橋美術館講座室——約20名(担当＝植野)
- 4月24日(木) 西日本新聞 TNC 文化サークル「もっと知る美術：安井曾太郎と二科会の画家たち」  
於：石橋美術館講座室——約20名(担当＝森山)
- 5月 3日(土) 福岡市美術館「第26回上野の森美術館大賞展・九州展美術講演会：九州の洋画家たち」 於：福岡市美術館——約40名(担当＝植野)
- 5月 8日(木) 西日本新聞 TNC 文化サークル「もっと知る美術：横山大観と日本美術院」  
於：石橋美術館講座室——約20名(担当＝平間)
- 5月12日(月) 久留米大学経済学部「地域文化政策論：石橋美術館の概要と役割」  
於：久留米大学——約40名(担当＝後藤)
- 5月30日(金) 久留米文化振興会「2008早朝緑陰講座：美術展を見に行く楽しみ」  
於：久留米市立中央図書館南側広場——約80名(担当＝植野)
- 9月 2日(火) 生きがい健康づくり財団「平成20年度えーるピアシニアカレッジ基礎科目：雪舟で  
日本美術をみてみよう」 於：えーるピア久留米生涯学習センター  
——約200名(担当＝平間)
- 10月 2日(木) 久留米大学「久留米学：筑後の画家たち」 於：久留米大学  
——約200名(担当＝植野)
- 10月18日(土) 芳賀町総合情報館開館記念展「福田たね 青木繁のロマン展講演会：青木繁、福田  
たねとその時代」 於：芳賀町総合情報館——65名(担当＝植野)
- 11月 9日(日) 郡山市立美術館交換展「石橋コレクションの洋画―青木繁と久留米の画家を中心に  
―」 於：郡山市立美術館——約20名(担当＝植野)
- 12月 7日(日) 郡山市立美術館交換展特別ギャラリートーク 於：郡山市立美術館  
——約50名(担当＝森山)
-



## 〈夏休みこどもプログラム2008〉

2008年7月29日(火)ー8月31日(日)、企画展「雪舟で、み展」にあわせ、筆遣いや画題についての子供むけクイズ・課題の記載されたパンフレットを受付で配布。また、久留米在住の庭師中村茂氏(中村桂園)の協力を得て、8月7日、20日の2回、雪舟の姿に変身した子供たちが庭造りに挑戦するワークショップ「お庭をつくって、雪舟になろう!」を実施。別館前の花壇につくられた石庭は、10月3日の展覧会終了まで公開。各自制作の箱庭は、参加者が持ち帰った。18名の家族が参加。



ワークショップの様子



ワークショップの様子

## 〈サポートボランティア〉

2008年度の登録は22名。年間10回の研修を実施。ギャラリートーク、坂本旧アトリエ解説、開会式やクイズなどのイベント補助をとおして、4,000名を超える来館者に対応した。  
(ボランティアの活動期間は4月から翌3月までの1年間)

サポートボランティア：

秋元和恵、岩橋和子、牛島千春、隈早苗、菰原貴子、坂井弘美、高橋有嘉子、高橋由希子、高本元子、棚町薫子、筒井つや子、豊福真知子、仲上祥世、福田悉子、福山清美、本田博子、牟田麻里耶、森房乃、諸富孝子、矢ヶ部節子、柳秀昭、杠和子 以上22名(50音順 敬称略)



ギャラリーガイド



イベントの補助

## 〈博物館実習生受入〉

学芸員資格取得のための博物館実習を下記のように実施した。

期間：2008年7月26日(土)－8月31日(日)

実習生：7名(7校)

実習内容：

	1	2	3	4	5	6
	9:30－10:45	10:45－12:00	13:00－14:15	14:15－15:30	15:30－16:45	16:45－17:30
7月26日 (土)	ガイダンス・展示替え実習・見学 (森山・伊藤)		展示替え実習・見学 (森山)			
7月27日 (日)	展示替え実習・見学 (植野)		展示替え実習・見学 (平間)			
8月 7日 (木)	こどもプログラムワークショップ 補助 (植野・平間・伊藤)		ノートまとめ			
8月20日 (水)	こどもプログラムワークショップ 補助 (平間・伊藤)		ノートまとめ			
8月26日 (火)	ガイダンス(植野) 美術館運営(平野・後藤)		施設見学1 (後藤)	施設見学2 (平間)	課題説明 (植野)	質疑・応答 ノートまとめ
8月27日 (水)	展覧会概説 (平間)	展覧会カタログ (植野)	作品調査1 (平間)	作品調査2 (植野)	教育普及 (後藤・伊藤)	質疑・応答 ノートまとめ
8月28日 (木)	作品管理1 (森山)	作品管理2 (森山)	文献・情報検索 (森山)	文献調査1 (森山)	文献調査2 (森山)	質疑・応答 ノートまとめ
8月29日 (金)	展覧会展示プラン (植野)	解説作成1 (植野)	解説作成2 (植野)	解説作成3 (植野)	発表 (植野・伊藤)	質疑・応答 ノートまとめ
8月30日 (土)	解説作成4 (森山・平間)	解説作成5 (森山)	解説作成6 (森山)	解説作成7 (平間)	発表 (森山・平間)	質疑・応答 ノートまとめ
8月31日 (日)	リーフ作成1 (森山)	リーフ作成2 (森山)	リーフ作成3 (植野)	リーフ作成4 (植野)	リーフ設置 (植野)	質疑・応答 終了会

※実習生が作成した解説リーフレットは展示室内に設置した。

---

## 〈坂本繁二郎旧アトリエの活用について〉

---

### ・保存修理工事の実施

1980年3月石橋文化センターに移築後はじめて、2007年10月22日から12月20日にかけて、屋根瓦や外壁杉板の取替え、床・外壁の耐震補強、電気・給排水設備の新設などの大規模な保存修理工事を実施。2008年3月より本格的な公開を実施。

### ・2008年活用状況

石橋文化センターを管理運営する(財)久留米文化振興会と共同で、園内イベントにあわせてアトリエを公開。当館ボランティアによるアトリエ・トーク、工芸作品の展示、朗読会、ミニコンサートなどを実施。また喫茶や関連グッズの販売も実施。年間15日間公開し、4,037名が来場した。



修理を終えた坂本繁二郎旧アトリエ



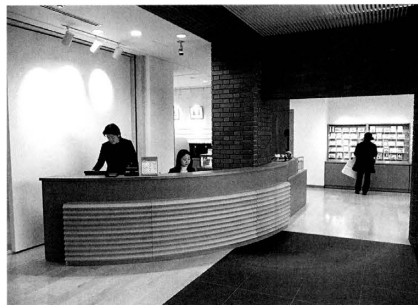
アトリエ内部

---

## 〈ショップ改修工事について〉

---

2008年12月17日から28日にかけて本館2階ショップ改修工事を実施。入り口変更に伴う受付カウンターの更新、ショップ内の陳列台や棚、照明の新設、情報コーナーのパソコンの更新などを実施。あわせて本館展示室の壁の補修と塗り替え、本館1階ギャラリーの受付カウンターと椅子、展示室用ベンチ、講座室用椅子の更新、1階講座室用空調機の新設などを実施した。



受付とショップ入口



ショップ内

入場者数

ブリヂストン美術館

月	開館日数	有 料				無 料		総 計	一日平均
		一般	大・高生	団体	合計		(中・小生)		
1	23	4,840	655	138	5,633	6,987	(157)	12,620	549
2	18	3,395	431	95	3,921	1,886	(297)	5,807	323
3	26	4,523	539	57	5,119	2,628	(302)	7,747	298
4	16	2,724	250	103	3,077	1,975	(94)	5,052	316
5	28	7,965	422	203	8,590	3,172	(269)	11,762	420
6	24	8,175	405	170	8,750	4,256	(298)	13,006	542
7	17	5,412	616	111	6,139	3,309	(512)	9,448	556
8	28	7,398	885	78	8,361	3,571	(1,485)	11,932	426
9	25	6,185	515	142	6,842	2,208	(270)	9,050	362
10	23	5,387	407	317	6,111	2,716	(226)	8,827	384
11	26	4,963	407	329	5,699	2,294	(180)	7,993	307
12	24	3,883	604	100	4,587	1,851	(95)	6,438	268
合計	278	64,850	6,136	1,843	72,829	36,853	(4,185)	109,682	395

ブリヂストン美術館ホールイベント

	イベント名	開催日時	入場料	入場者数	出演者
1	ボリビアのカーニバル	2.16(土) 14:30/18:30	前売 2500円 当日 3000円	昼の部 130人 夜の部 107人	木下尊惇 菱本幸二 橋本 仁 笹久保伸 小澤敏也
2	ギタリスト鈴木大介の 展覧会の絵	3.30(日)15:00	前売 2500円 当日 3000円	130人	鈴木大介
3	古代ギリシャの アングルハープ 復元と演奏	5.30(金)18:30	前売 2000円 当日 2500円	122人	木戸敏郎 西 陽子
4	世紀末都市パリの ビスメロディカ	11.9(日)15:00	前売 2500円 当日 3000円	61人	辻 康介 近藤治夫 福島久雄 鈴木広志 立岩潤三
5	クレーの詩・クレーの音楽 Part 2	12.23(火祝)14:00	前売 2500円 当日 3000円	100人	新藤 信 クロード・小林 鈴木智子 川村紀子

石橋美術館

月	開館 日数	有 料				無 料			総 計	一日平均
		一般	大高生	団体	合計	中小生	招待他	合計		
1	25	1,161	51	306	1,518	1,304	616	1,920	3,438	138
2	25	1,473	58	363	1,894	757	318	1,075	2,969	119
3	26	927	66	841	1,834	184	336	520	2,354	91
4	26	1,044	27	426	1,497	67	503	570	2,067	80
5	22	2,766	158	625	3,549	130	826	956	4,505	205
6	25	2,092	156	695	2,943	251	1,126	1,377	4,320	173
7	21	1,672	175	611	2,458	800	2,239	3,039	5,497	262
8	28	2,171	177	314	2,662	741	325	1,066	3,728	133
9	26	2,428	120	527	3,075	418	1,005	1,423	4,498	173
10	22	1,707	67	935	2,709	463	1,170	1,633	4,342	197
11	28	2,320	101	1,401	3,822	359	1,543	1,902	5,724	204
12	12	698	49	288	1,035	1,070	1,581	2,651	3,686	307
合計	286	20,459	1,205	7,332	28,996	6,544	11,588	18,132	47,128	620

---

## 新収蔵作品 New Acquisitions

絵画 Paintings

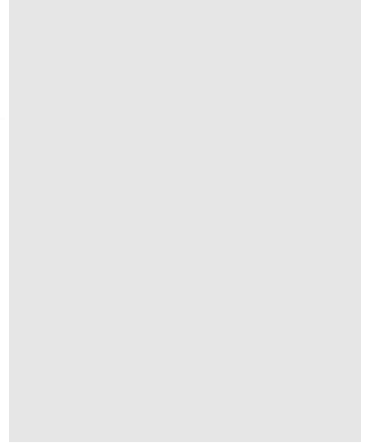
---

田中敦子  
TANAKA, Atsuko  
1932-2005

無題  
1965年  
エナメル塗料・カンヴァス  
92.5×74.3cm  
裏面に署名：Atsuko Tanaka  
裏面に書込：1965, June (「July」を抹消した跡あり)  
日洋566

Untitled  
1965  
Enamel paint on canvas  
92.5×74.3cm  
Signed and inscribed on the reverse

来歴：2008年、石橋財団  
Prov. : 2008, Ishibashi Foundation.



---

坂本繁二郎  
SAKAMOTO, Hanjiro  
1882-1969

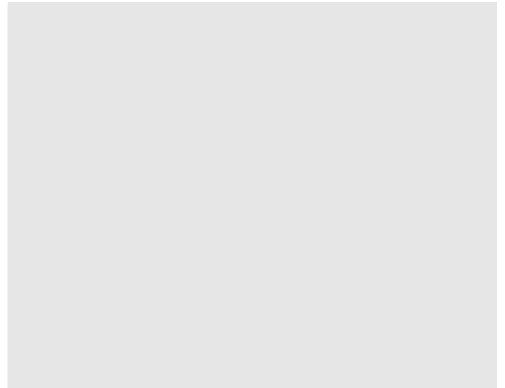
茄子と梨  
1944年  
油彩・カンヴァス  
31.7×40.6cm  
右下に署名など：謹呈 / 森部先生 / さかもと / 昭和十九年  
日洋565

Still Life with Eggplants and Pears  
1944  
Oil on canvas  
31.7×40.6cm  
Signed and dated lower right

来歴：個人蔵、福岡；2008年、石橋財団へ寄贈  
Prov. : Private collection, Fukuoka ; 2008, donated to the Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh : 1947、「坂本繁二郎作品回顧展」(福岡) no. 29 ; 1950、「坂本繁二郎自選回顧展」(東京、大阪) no. 71 / 「坂本繁二郎画業五十年展」(福岡) no.38 / 「坂本繁二郎回顧展」(熊本) no. 38 ; 1953、「坂本繁二郎先生作品鑑賞展」(大牟田) ; 1971、「坂本繁二郎その人と作品」(石橋美術館) no.58

文献 Bibl. : 1970、『坂本繁二郎作品全集』朝日新聞社、no. 283 ; 1981、『増補坂本繁二郎作品全集』朝日新聞社、no. 317



これまで図書として所蔵していた下記のものを、美術品として登録変更した。

1. Vlaininck, Maurice de / *Rive Gauche* / André Salmon / Paris : Chez l' Auteur-editeur, 1951 / 限定300部の No.242 / 42.3×34.3×8.0cm / 雑85
2. Braque, Georges / *Une aventure méthodique* / Pierre Reverdy / Paris : Maeght Editeur, 1949 / 限定250部の No.212 / 46.7×35.4×4.9cm / 雑86
3. 藤田嗣治 / *La rivière enchantée* / Réne Héron de Villefosse / Paris : Bernard Klein Editeur, 1951 / 限定300部の No.200 / 41.5×31.3×7.5cm / 雑87
4. Brianchon, Maurice / *Vins : fleurs et flammes* / Georges Duhamel, Max Jacob, Roger Vitrac, Raoul Ponchon, Tristan Dereme, Louis Juvet, Colette, Mac Orlan, Héron de Villefosse, Fernand Fleuret, Maurice Fombeure et Paul Valéry / Paris : Bernard Klein Editeur, 1952 / 限定300部の No.13 / 41.5×31.2×7.4cm / 雑88
5. Le Corbusier / *Poème de l'angle droit* / Le Corbusier / Paris : Tériade Editeur, 1955 / 限定250部の No.159 / 43.6×34.0×5.2cm / 雑89
6. Arp, Jean / *Dreams and projects* / Jean Arp / New York : Curt Valentin, 1952 / 限定250部の No.17 / 30.4×24.0×5.2cm / 雑90
7. Clavé, Antoni / *Gargantua* / François Rabelais / Paris : Les Bibliophiles de Provence, 1955 / 限定200部の No.94 / 40.7×30.3×8.0cm / 雑91
8. Lurçat, Jean / *Domaine* / Jean Lurçat / Paris : Pierre de Tartas, 1957 / 限定126部の No.46 / 39.8×30.6×4.3cm / 雑92
9. 長谷川 潔 / *Portrait de Kiyoshi Hasegawa* / Robert Rey / Paris : Editions Manuel Bruker, 1963 / 限定200部の No.109 / 33.0×25.5×1.5cm (外箱なし) / 雑93
10. Picasso, Pablo / *Poèmes et lithographies* / Pablo Picasso / Paris : Galerie Louise Leris, 1954 / 限定50部の No.38 / 67.4×52.5×2.2cm / 雑94
11. Marini, Marino / *Idea e Spazio* / Egle Marini / Paris : Les Cent Bibliophiles de France et d'Amérique, 1963 / 限定100部の No.66 / 53.8×41.0×5.2cm / 雑95
12. Buffet, Bernard / *La passion du Christ* / Paris : Henri Creuzevault, 1954 / 限定140部の No.22 / 50.5×30.6×3.9cm / 雑96
13. Picasso, Pablo / *Carmen* / Prosper Mérimée / Paris : La Bibliothèque française, 1949 / 限定289部の No.46 / 35.0×27.5×7.5cm / 雑97

---

## 新収図書

### ブリヂストン美術館

	購入	寄贈	計
和書	10冊	1冊	11冊
洋書	6冊	1冊	7冊
計	16冊	2冊	18冊

(展覧会図録・逐次刊行物は含まない)

### 石橋美術館

	購入	寄贈	計
和書	43冊	197冊	240冊
洋書	1冊	6冊	7冊
漢書	0冊	2冊	2冊
計	44冊	205冊	249冊

(展覧会図録・逐次刊行物は含まない)



## 修復記録

	作品	修復報告
1	コンスタンタン・ギース《酒場》 BMA、外洋12	水彩・紙 / 18.5×21.5cm 旧ヒンジ除去、マッティング
2	エドガー・ドガ《踊り子》 BMA、外洋16	鉛筆、油彩・紙 / 27.7×21.8cm マッティング
3	エドゥアール・マネ《裸婦》 BMA、外洋131	チョーク(黒、赤)・紙 / 47.9×31.1cm マッティング
4	ザオ・ウーキー《無題》 1982年、BMA、外洋200	墨・紙 / 145.6×372.2cm 周辺に和紙を付け、パネルに張り込み(設置作業および取り外し作業)
5	ロドルフ・ウィッツマン《水に映ずる家》 IMA、外洋216	油彩・カンヴァス / 81.9×66.1cm 調査・記録・写真撮影、絵具層浮き上がり接着、画面洗浄、 絵具層欠損部充填補彩、画面艶の調整、額装の改善、報告書作成
6	ショーン・スカリー《12.15.1993》 1993年、BMA、外洋222	水彩・紙 / 38.1×45.6cm フラットニング、マッティング
7	川端実《作品(B)》 1963年、IMA、日洋189	油彩・カンヴァス / 132.0×181.5cm 調査・記録、浮き上がり箇所の再固着、表面の埃除去、絵具 層剥落部分への補彩、額縁補修、報告書作成
8	堂本尚郎《二次元的なアンサンブル》 1961年、BMA、日洋531	顔料・紙 / 76.3×57.0cm 裏面のテープ除去、コンソリデーション、フラットニング、 マッティング
9	田中敦子《無題》 1965年、BMA、日洋566	エナメル塗料・カンヴァス / 92.5×74.3cm 調査・記録・写真撮影、額装除去、画面および裏面の汚れ除 去、絵具層浮き上がり部分の剥落留め、絵具層欠損部充填補 彩、画面艶の調整、処置後写真撮影、報告書作成、額装の改 善
10	ポール・ガヴァルニ 《ダブレ・ナチュール：「こんな奥さんたちの 為だよ。パリの往来を広げるのは。」》 1857-58年、BMA、外版3-10	リトグラフ / 20.3×16.1cm(画面)； 37.1×26.8(紙) テープ粘着剤除去、マッティング
11	ポール・ガヴァルニ 《ダブレ・ナチュール：「雨は降らないよ、 きっと！ でも降るかもしれない。」「死ん だ親父がよく言ったものだ—お天気がいい ならレインコートを持っていけ、もし雨降 りなら、持って行きたいなら持って行け— と。」》 1857-58年、BMA、外版3-16	リトグラフ / 20.3×16.2cm(画面)； 37.1×26.8cm(紙) 紙中異物除去、マッティング
12	ポール・ガヴァルニ 《ダブレ・ナチュール：大饗宴》 1857-58年、BMA、外版3-26	リトグラフ / 20.2×16.1cm(画面)； 37.1×26.8cm(紙) テープ粘着剤除去、マッティング
13	アンリ・ブテ《パリの女》 『レスタンプ・オリジナル』第2号(1893)所収、 BMA、外版30	エッチング、アクアチント、ドライポイント、ルーレット / 49.5×27.4cm(画面)； 60.2×43.5cm(紙) マッティング

	作品	修復報告
14	フェルナン・レジェ 《女の顔》 1953年、BMA、外版190	リトグラフ / 51.0×35.0cm(画面); 65.8×66.1cm(紙) 旧ヒンジ除去、ヒンジ、マッティング
15	アンリ=エドモン・クロス 《シャンゼリゼで》 『パン』第4年次第1号(1898)所収、BMA、外版 196-72	リトグラフ / 20.3×26.2cm(画面); 27.4×36.8cm(紙) マッティング
16	ジョアン・ミロ 《Els Gossos 4》 1978-79年、BMA、外版236	アクアチント / 73.4×115.7cm(画面); 73.4×115.7cm(紙) フラットニング、マッティング
17	ベン・シャーン 《リルケ『マルテの手記』より一行の詩の ためには…I あまたの都市を》 1968年、BMA、外版238	リトグラフ / 43.0×37.7cm(画面); 57.5×45.2cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
18	ベン・シャーン 《リルケ『マルテの手記』より一行の詩の ためには…II あまたの人々を》 1968年、BMA、外版239	リトグラフ / 43.6×38.3cm(画面); 56.9×45.3cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
19	ベン・シャーン 《リルケ『マルテの手記』より一行の詩の ためには…III あまたの書物を》 1968年、BMA、外版240	リトグラフ / 41.9×34.3cm(画面); 57.4×45.0cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
20	ベン・シャーン 《リルケ『マルテの手記』より一行の詩の ためには…IV 禽獣を知らねばならぬ》 1968年、BMA、外版241	リトグラフ / 47.2×39.0cm(画面); 57.2×45.1cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
21	ベン・シャーン 《リルケ『マルテの手記』より一行の詩の ためには…V 空飛ぶ鳥のすがた》 1968年、BMA、外版242	リトグラフ / 57.2×45.0cm(画面); 57.2×45.0cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
22	ベン・シャーン 《リルケ『マルテの手記』より一行の詩の ためには…VI 小さな草花のたたずまい》 1968年、BMA、外版243	リトグラフ / 44.2×37.0cm(画面); 57.4×44.8cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
23	ベン・シャーン 《リルケ『マルテの手記』より一行の詩の ためには…VII まだ知らぬ国々の道を》 1968年、BMA、外版244	リトグラフ / 57.1×45.2cm(画面); 57.1×45.2cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
24	ベン・シャーン 《リルケ『マルテの手記』より一行の詩の ためには…X 少年の日の思い出を》 1968年、BMA、外版247	リトグラフ / 57.1×45.2cm(画面); 57.1×45.2cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング

	作品	修復報告
25	ベン・シャーン 《リルケ『マルテの手記』より一行の詩の ためには…XII 少年時代の病気》 1968年、BMA、外版249	リトグラフ / 55.1×43.7cm(画面)； 57.3×44.9cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
26	ベン・シャーン 《リルケ『マルテの手記』より一行の詩の ためには…XIII 静かなしんとした部屋で》 1968年、BMA、外版250	リトグラフ / 57.4×45.0cm(画面)； 57.4×45.2cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
27	ベン・シャーン 《リルケ『マルテの手記』より一行の詩の ためには…XIV 海辺の朝》 1968年、BMA、外版251	リトグラフ / 54.8×45.0cm(画面)； 57.4×45.0cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
28	ベン・シャーン 《リルケ『マルテの手記』より一行の詩の ためには…XV 海そのものの姿》 1968年、BMA、外版252	リトグラフ / 32.2×40.1cm(画面)； 57.3×45.2cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
29	ベン・シャーン 《リルケ『マルテの手記』より一行の詩の ためには…XVI 星くずとともに消え去った 旅寝の夜々》 1968年、BMA、外版253	リトグラフ / 44.7×41.2cm(画面)； 57.3×45.2cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
30	ベン・シャーン 《リルケ『マルテの手記』より一行の詩の ためには…XVIII 産婦の叫び》 1968年、BMA、外版255	リトグラフ / 56.3×45.2cm(画面)； 57.3×45.2cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
31	ベン・シャーン 《リルケ『マルテの手記』より一行の詩の ためには…XIX 白衣の中に眠りにおちて恢 復をまつ産後の女》 1968年、BMA、外版256	リトグラフ / 23.1×39.4cm(画面)； 57.4×45.1cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
32	ベン・シャーン 《リルケ『マルテの手記』より一行の詩の ためには…XX 死んで行く人の枕辺に》 1968年、BMA、外版257	リトグラフ / 57.2×45.3cm(画面)； 57.2×45.3cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
33	ベン・シャーン 《リルケ『マルテの手記』より一行の詩の ためには…XXI 死者の傍らで》 1968年、BMA、外版258	リトグラフ / 44.4×41.2cm(画面)； 57.3×45.1cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
34	ベン・シャーン 《リルケ『マルテの手記』より一行の詩の ためには…XXII 一篇の詩の最初の言葉》 1968年、BMA、外版259	リトグラフ / 41.5×34.3cm(画面)； 57.2×45.1cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング

	作品	修復報告
35	ベン・シャーン 《リルケ『マルテの手記』より一行の詩の ためには…扉》 1968年、BMA、外版260	リトグラフ / 23.7×22.4cm(画面)；57.2×45.2cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
36	ベン・シャーン 《リルケ『マルテの手記』より一行の詩の ためには…天飾り》 1968年、BMA、外版261	リトグラフ / 29.4×23.1cm(画面)；57.0×45.3cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
37	ピエール・スーラージュ《作品》 1947年、BMA、外版276	リトグラフ / 74.3×47.8cm(画面)；90.3×56.5cm(紙) マッティング
38	ピエール・スーラージュ《リトグラフ No.6》 1957年、BMA、外版277	リトグラフ / 56.8×44.3cm(画面)；65.6×50.4cm(紙) 旧ヒンジ除去、フラットニング、マッティング
39	アンリ=ガブリエル・イベルス 《舗装工事の男たち》 『レスタンプ・オリジナル』第8号(1894)所収、 BMA、外版298	エッチング / 27.4×15.4cm(画面)；59.4×39.5cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
40	フェリックス・ブラックモン 《レオン・クラデルの肖像》 協会版『レスタンプ・オリジナル』第1号(1888) 所収、BMA、外版302	エッチング、アクアチント / 31.6×25.7cm(画面)；45.8×32.7 cm(紙) 台紙除去、しわ軽減、マッティング
41	アンリ・ブーテ《舗道にて》 協会版『レスタンプ・オリジナル』第1号(1888) 所収、BMA、外版306	ドライポイント、アクアチント / 28.3×10.4cm(画面)；37.0 ×15.5cm(紙) 台マット除去、洗浄・部分脱酸性処置、フラットニング、 マッティング
42	アンリ・ブーテ《パリの街角、夜》 協会版『レスタンプ・オリジナル』第1号(1888) 所収、BMA、外版307	ドライポイント、アクアチント / 32.7×18.7cm(画面)；38.1 ×20.3cm(紙) 台マット除去、マッティング
43	オーギュスト=ルイ・ルペール 《モンターニュ=サント=ジュヌヴィエーヴ 通り》 協会版『レスタンプ・オリジナル』第1号(1888) 所収、BMA、外版310	木口木版 / 31.1×13.7cm(画面)；41.0×23.4cm(紙) 台紙除去、旧ヒンジ除去、洗浄、フォクシング処置、フラッ トニング、マッティング
44	オーギュスト=ルイ・ルペール 《オーステルリッツ橋から望むセーヌ川》 協会版『レスタンプ・オリジナル』第1号(1888) 所収、BMA、外版311	木口木版 / 17.0×27.0cm(画面)；30.4×45.9cm(紙) 台紙除去、マッティング
45	アンリ・ソム《パリの女》 『レスタンプ・オリジナル』第5号(1894)所収、 BMA、外版316	ドライポイント / 24.5×16.9cm(画面)；60.0×43.0cm(紙) マッティング
46	ジュール・シェレ《ダンス》 『レスタンプ・オリジナル』第4号(1893)所収、 BMA、外版322	リトグラフ / 37.0×23.1cm(画面)；59.8×43.0cm(紙) 旧ヒンジ除去、洗浄・脱酸性処置、フォクシング処置、補修、 フラットニング、マッティング

	作品	修復報告
47	シャルル・メリヨン 《パリの銅版画：プティ・ボン》 1850年以降、BMA、外版325	エッチング、エングレーヴィング / 24.5×18.8cm(画面)； 32.0×23.9cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
48	シャルル・メリヨン 《パリの銅版画：時計塔》 1852年以降、BMA、外版326	エッチング、エングレーヴィング、ドライポイント / 24.6 ×18.1cm(画面)；49.0×32.5cm(紙) ドライクリーニング、マッティング
49	シャルル・メリヨン 《パリの銅版画：ティクセランドリ通りの 小塔》 1852年以降、BMA、外版327	エッチング / 24.8×13.0cm(画面)；30.9×19.9cm(紙) 旧ヒンジ除去、洗浄・脱酸性処置、マッティング
50	シャルル・メリヨン 《パリの銅版画：ノートルダムの揚水機》 1852年以降、BMA、外版328	エッチング / 16.6×24.9cm(画面)；22.6×30.3cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
51	シャルル・メリヨン《ボン=ト=シャンジュ》 1854年、BMA、外版329	エッチング、ドライポイント / 14.4×32.9cm(画面)；27.9× 42.2cm(紙) 旧ヒンジ除去、粘着剤除去、サビ除去、マッティング
52	シャルル・メリヨン 《パリの銅版画：屍体公示所》 1854年、BMA、外版330	エッチング、ドライポイント / 21.3×19.0cm(画面)；25.0× 22.8cm(紙) フラットニング、マッティング
53	シャルル・メリヨン 《パリの銅版画：ノートルダム寺院の後陣》 1853年、BMA、外版331	エッチング、エングレーヴィング、ドライポイント / 14.8 ×28.9cm(画面)；27.9×40.3cm(紙) テープ粘着剤除去、マッティング
54	シャルル・メリヨン 《1621年の火災後のボン=ト=シャンジュの 歩道橋(デッラ・ベッラに基づく)》 1860年、BMA、外版332	エッチング / 9.5×20.0cm(画面)；18.7×27.9cm(紙) 旧ヒンジ除去、フォクシング処置、マッティング
55	シャルル・メリヨン 《エコール・ド・メドゥシヌ通り22番地の 小塔》 1861年以降、BMA、外版333	エッチング、ドライポイント / 19.0×10.1cm(画面)；50.4× 33.8cm(紙) 旧ヒンジ除去、洗浄・脱酸性処置、フォクシング処置、マッ ティング
56	シャルル・メリヨン《シャントル通り》 1862年、BMA、外版334	エッチング / 28.8×12.1cm(画面)；50.3×34.4cm(紙) マッティング
57	シャルル・メリヨン《アンリ4世校》 1863-64年、BMA、外版335	エッチング / 22.1×41.6cm(画面)；31.8×49.7cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
58	シャルル・メリヨン《アンリ4世校》 1863-64年、BMA、外版336	エッチング / 22.7×41.6cm(画面)；35.5×52.0cm(紙) 洗浄・脱酸性処置、マッティング
59	シャルル・メリヨン《シュヴリエ冷水浴場》 1864年、BMA、外版337	エッチング / 12.1×13.8cm(画面)；25.0×32.9cm(紙) 旧ヒンジ除去、サビ除去、マッティング
60	シャルル・メリヨン《海軍省》 1865年、BMA、外版338	エッチング / 14.0×12.8cm(画面)；48.5×32.5cm(紙) ドライクリーニング、マッティング
61	シャルル・メリヨン 《昔日のルーヴル(ゼーマンに基づく)》 1865-66年頃、BMA、外版339	エッチング / 14.0×24.7cm(画面)；22.1×28.1cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング

	作品	修復報告
62	ロドルフ・プレスダン 《死の喜劇》 1854年、BMA、外版344	リトグラフ / 21.2×15.1cm(画面); 40.4×28.3cm(紙) 旧ヒンジ除去、破れ補修、マッティング
63	ロドルフ・プレスダン 《『ラ・ルヴュ・ファンテジスト』の口絵》 1861年、BMA、外版347	エッチング / 19.5×12.2cm(画面); 21.4×16.3cm(紙) 洗浄・脱酸性処理、フォクシング処理、マッティング
64	ロドルフ・プレスダン 《魔法の家》 1871年、BMA、外版350	リトグラフ / 17.2×24.4cm(画面); 30.1×43.5cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
65	ロドルフ・プレスダン 《驢馬のいるエジプトへの逃避途上の休息》 1878年、BMA、外版351	エッチング / 22.9×20cm(画面); 42.2×33.2cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
66	ロドルフ・プレスダン 《私の夢》 1883年、BMA、外版354	エッチング / 18.5×11.9cm(画面); 37.5×26.0cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
67	ジャック・カロ 《パリ二大景観：ルーヴル宮眺望》 1628-31年頃、BMA、外版358	エッチング / 16.7×33.7cm(画面); 22.0×39.4cm(紙) 旧ヒンジ除去、ドライクリーニング、マッティング
68	ジャック・カロ 《パリ二大景観：ボン・ヌフ眺望》 1628-31年頃、BMA、外版359	エッチング / 15.8×33.5cm(画面); 18.3×35.5cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
69	ピエール・アレシンスキー 《何が起きたのか?》 1963年、BMA、外版424	リトグラフ / 28.6×41.5cm(画面); 33.2×50.6cm(紙) マッティング
70	ピエール・スーラージュ 《リトグラフ No.32B》 1975年、BMA、外版425	リトグラフ / 65.0×45.0cm(画面); 75.7×56.5cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
71	ハンス・アルプ 《For Saint Gaiden》 BMA、外版426	シルクスクリーン / 41.1×37.3cm(画面); 65.0×49.9cm(紙) マッティング
72	セルジュ・ポリアコフ 《ピンクと赤と青のコンポジション》 BMA、外版430	リトグラフ / 32.7×25.3cm(画面); 50.3×40.0cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング
73	ジョアン・ミロ 《迷宮の星》1967年 BMA、外版431	エッチング、ドライポイント、アクアチント、研磨剤 / 103.4 ×70.4cm(画面); 104.2×71.6cm(紙) 旧ヒンジ除去、フラットニング、マッティング
74	ジョアン・ミロ 《岩壁の軌跡Ⅵ》1967年 BMA、外版432	エッチング、アクアチント、研磨剤 / 58.8×92.8cm(画面); 73.0×104.4cm(紙) 旧ヒンジ除去、マッティング

\* 修復報告欄に載せる内容は、修復担当者による報告書に基づく。

作品欄に載せる内容で、一部、「都市の表象と心象」展刊行物に記載するものと、異なるものもある。

「田園賛歌—近代絵画に見る自然と人間」展

財団法人ひろしま美術館 / 2008年2月23日－2008年4月6日

- 1) カミュー・コロー 《オンフルールのトゥータン農場》(外洋8)

山梨県立美術館 / 2008年4月19日－2008年6月1日

- 1) ジャン＝フランソワ・ミレー 《乳しぼり》(外洋119)

---

「マティスとボナール—地中海の光の中へ」展

川村記念美術館 / 2008年3月15日－2008年5月25日

- 1) ピエール・ボナール 《桃》(外洋52)  
2) アンリ・マティス 《青い胴着の女》(外洋62)

神奈川県立近代美術館葉山 / 2008年5月31日－2008年7月27日

- 1) アンリ・マティス 《両腕をあげたオダリスク》(外洋59)

---

「コロー—光と追憶の変奏曲」展

国立西洋美術館 / 2008年6月14日－2008年8月31日

- 1) カミュー・コロー 《ヴィル・ダヴレー》(外洋7)

---

「アメデオ・モディリアーニ」展

岩手県立美術館 / 2008年8月12日－2008年10月5日

- 1) アメデオ・モディリアーニ 《若い農夫》(外洋115)

---

「佐伯祐三とフランス—ヴラマンク、ユトリロ、日本の野獣派」展

ポーラ美術館 / 2008年9月13日－2009年3月8日

- 1) 佐伯祐三 《テラスの広告》(日洋174)

---

「Happy Mother, Happy Children—微笑みの太陽・母と子の詩」展

東京富士美術館 / 2008年10月4日－2008年12月14日

- 1) 山下新太郎 《海棠》(日洋383)

---

「没後80年記念 佐伯祐三展—パリで夭逝した天才画家の道」

高松市美術館 / 2008年10月24日－2008年12月7日

1) 佐伯祐三 《ガラージュ》 (日洋175)

---

「セザンヌ主義—父と呼ばれる画家への礼賛」展

横浜美術館 / 2008年11月15日－2009年1月25日

1) ポール・セザンヌ 《帽子をかぶった自画像》 (外洋31)

---

「名古屋市美術館開館20周年記念 モネ《印象 日の出》」展

名古屋市美術館 / 2008年12月23日－2009年2月8日

1) クロード・モネ 《睡蓮》 (外洋22)



「田園賛歌 近代絵画に見る自然と人間」展

北九州市立美術館 / 2008年1月2日－2008年2月17日

財団法人ひろしま美術館 / 2008年2月23日－2008年4月6日

山梨県立美術館 / 2008年4月19日－2008年6月1日

- 1) 井上三綱《収穫》(日洋289)
- 2) 高田力蔵《ミレー《落ち穂拾い》の模写》(日洋408)
- 3) 松田諦晶《刈跡》(日洋506)
- 4) 森三美《筑後風景》(寄託作品)

---

「日展100年」展

広島県立美術館 / 2008年2月19日－2008年3月30日

富山県立近代美術館 / 2008年4月12日－2008年5月18日

- 1) 岡田三郎助《水浴の前》(日洋63)

---

「夢とサーカスの世界」展

熊本県立美術館 / 2008年7月18日－2008年8月31日

- 1) 古賀春江《〈無題〉のためのスケッチ》(日洋347)
- 2) 古賀春江《〈美貌なる虚無〉のためのスケッチ》(日洋348)
- 3) 古賀春江《〈現実線を切る主智的表情〉のためのスケッチ》(日洋350)
- 4) 古賀春江《〈音のない昼の夢〉のためのスケッチ》(日洋353)
- 5) 古賀春江《〈そこに在る〉のためのスケッチ》(日洋355)
- 6) 古賀春江《〈深海の情景〉のためのスケッチ》(日洋356)
- 7) 古賀春江《〈楽しき饗宴〉のためのスケッチ》(日洋357)
- 8) 古賀春江《〈文化は人間を妨害する〉のためのスケッチ》(日洋359)
- 9) 古賀春江《〈檻〉(『東京パック』裏表紙)のためのスケッチ》(日洋365)
- 10) 古賀春江《『誌神』表紙のためのデザイン》(日洋366)
- 11) 古賀春江《〈ロボットも微笑む〉(『東京パック』裏表紙)のためのスケッチ》(日洋369)
- 12) 猪熊弦一郎《青い星座》(日洋484)
- 13) 猪熊弦一郎《犬》(日洋485)

---

「明治の洋画―解説から鑑賞へ」展

茨城県近代美術館 / 2008年8月2日－2008年9月23日

1) 和田英作《読書》(日洋64)

---

「没後80年記念 佐伯祐三展―パリで夭折した天才画家の道」

大阪市立美術館 / 2008年9月9日－2008年10月19日

1) 佐伯祐三《広告貼り》(日洋176)

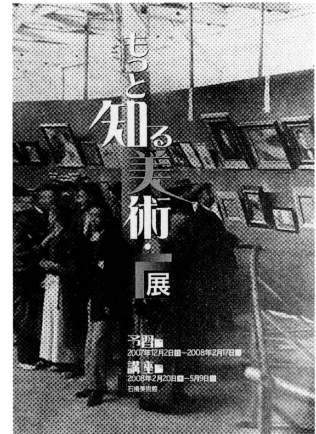
〈展覧会カタログ〉

「もっと知る美術・展 予習編・講座編」(企画展)

鑑賞ガイド

編集・発行：石橋財団石橋美術館(2007年12月)

29.7×21.0cm 4p 二つ折りリーフレット



「コレクションの新地平—20世紀美術の息吹」(特集展示)

New horizons: the collection of the Ishibashi Foundation

本文：

「コレクションの新地平—20世紀美術の息吹」展に寄せて / 島田紀夫(p.9-15)  
カタログ(I. 抽象への道; II. 版画と水彩; III. ザオ・ウーキ; IV. 戦後美術から現代へ) [英文併記]

コレクターの美意識 / 石橋 寛(p.100-101)

石橋幹一郎による『アサヒカメラ』掲載写真[英文併記]

禁則を破ったカラー撮影 / 石橋幹一郎(p.104-105)

循環するコレクション / 尾崎信一郎(p.110-114)

慧眼の収集家 石橋幹一郎 / 山本 進(p.115-119)

作家解説(島田紀夫、塩島明美、田所夏子)

石橋幹一郎・ブリヂストン美術館関連略年譜

New horizons: the collection of the Ishibashi Foundation / Shimada Norio (p.129-134)

The aesthetics of a collector / Ishibashi Hiroshi (p.135-136)

Color photography breaking the rules / Ishibashi Kan'ichiro (p.137-138)

Collection as circulation / Osaki Shinichiro (p.139-143)

A collector of keen insight—Ishibashi Kan'ichiro / Yamamoto Susumu (p.144-147)

Biography (Shimada Norio, Shiojima Akemi, Tadokoro Natsuko)

Brief chronology of Ishibashi Kan'ichiro and the Bridgestone Museum of Art

作家作品名リスト[英文併記]

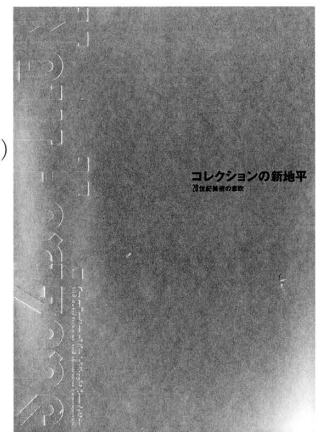
図版(カラー96図、参考20図、肖像4図)

制作：印象社

表紙デザイン：飯田京子

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館(2008年2月)

29.0×22.5cm 161 p ISBN 978-4-901528-08-5



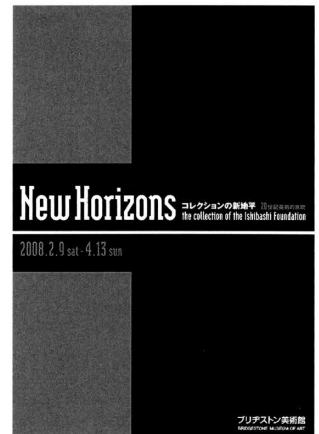
「コレクションの新地平—20世紀美術の息吹」(特集展示)

New horizons: the collection of the Ishibashi Foundation

出品目録

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館(2008年2月)

30.0×21.0cm 8 p



「岡鹿之助展」(特別展)

Oka Shikanosuke: variations in serenity

本文：

岡鹿之助—または、絵空事の重さ / 貝塚 健(p.11-25)

カタログ(1章 海；2章 掘削；3章 献花；4章 雪；5章 燈台；6章 発電所；  
7章 群落と廃墟；8章 城館と礼拝堂；9章 融合(章解説 / 貝塚 健[英文  
併記]；作品解説 / 貝塚 健、田所夏子)

資料1 岡鹿之助第一次フランス滞在期書簡(貝塚 健編)

資料2 岡鹿之助 パリ短信 1931-39年(田辺 徹編)

岡鹿之助文献目録(中村節子編)

岡鹿之助年譜(岡畏三郎編、貝塚 健補)

Oka Shikanosuke, or the burden of invention / Kaizuka Tsuyoshi (p.171-183)

出品作品リスト[英文併記]

図版(カラー70図、参考25図、肖像16図)

編集：貝塚 健

執筆：貝塚 健、田所夏子

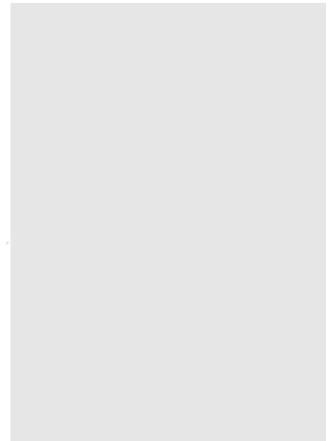
特別編集協力：田辺 徹

制作：エディタス

表紙デザイン：若林伸康

発行：石橋財団ブリヂストン美術館(2008年4月)

28.0×22.5cm 187 p



---

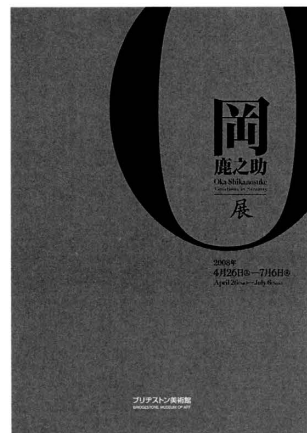
「岡鹿之助展」(特別展)

Oka Shikanosuke : variations in serenity

出品目録

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館(2008年4月)

30.0×21.0cm 8 p



---

「パリーニューヨーク20世紀絵画の流れ フランシス・リーマン・  
ロブ・アート・センター所蔵品展」(特別展)

Paris-New York: Modern paintings in 19th and 20th Century,  
Masterworks from the Frances Lehman Loeb Art Center,  
Vassar College, Poughkeepsie, New York

本文：

ヴァッサー大学の美術館の歴史 / ジェームズ・マンディ (p.16-20)

〈仕事の倫理〉アメリカ美術の一側面 / 本江邦夫 (p.21-25)

自然から抽象へハドソン・リヴァー派と抽象表現主義 / 岡部信幸 (p.26-33)

カタログ：

I 近代美術の起源

II アメリカ絵画の胎動

III 抽象表現主義

IV ヨーロッパとアメリカの戦後絵画

The history of the art museum at Vassar College / James Mundy (p.164-166)

The ethic of work-one facet of American art / Kunio Motoe (p.167-170)

From Nature to Abstraction-the Hudson River School and Abstract Expressionism / Nobuyuki Okabe (p.171-176)

作家解説

関連年表

主要参考文献

作品リスト[英文併記]

図版(カラー86図、参考7図)

企画・編集：島根県立美術館・石橋財団石橋美術館・山形美術館・府中市美術館・宮崎県立美術館・産経新聞社

デザイン：大溝 裕・羽野雄大・赤松幸子・大塚南海子

著作権：産経新聞社

発行：産経新聞社(2008年)

25.7×18.5cm 187 p

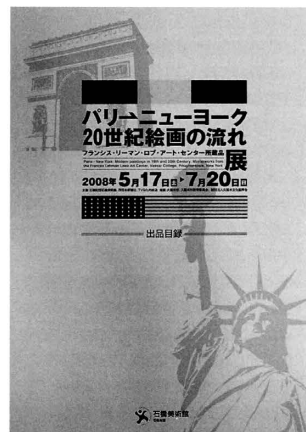
「パリーニューヨーク20世紀絵画の流れ フランシス・リーマン・ロブ・アート・センター所蔵品展」(特別展)

Paris-New York : Modern paintings in 19 th and 20 th Century,  
Masterworks from the Frances Lehman Loeb Art Center,  
Vassar College, Poughkeepsie, New York

出品目録

編集・発行：石橋財団石橋美術館(2008年5月)

29.7×21.0cm 4p 二つ折りリーフレット



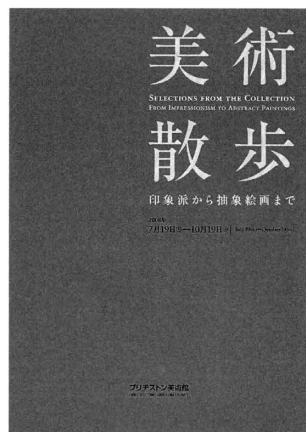
「美術散歩」(拡大常設展)

Selections from the collection : from Impressionism to abstract paintings

出品目録

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館(2008年7月)

30.0×21.0cm 12p



「雪舟で、み展」(企画展)

鑑賞ガイド

図版(カラー4図)

編集・執筆：平間理香

発行：石橋財団石橋美術館(2008年7月)

25.7×18.0cm 8p パンフレット 出品目録4p および作品図版1枚差し込み



---

「ノスタルジア11.11.11 郡山市立美術館のイギリス美術」  
(特別展)

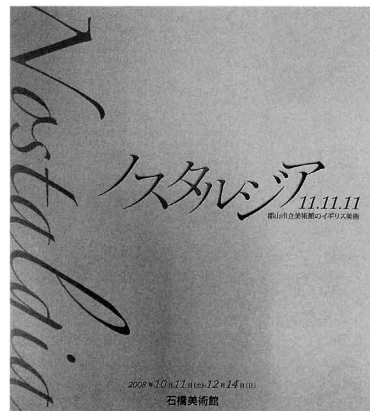
鑑賞ガイド及び出品目録

図版(カラー20図)

編集・執筆：森山秀子

発行：石橋財団石橋美術館(2008年10月)

24.0×21.0cm 10p パンフレット



---

「都市の表象と心象—近代画家・版画家たちが描いたパリ」  
(テーマ展示)

Paris passages : the changing faces of Paris in 19 th century prints  
and paintings

本文：

アーティスト・フラヌール  
Paris passages—遊歩者芸術家たちのさまざまな視点 / 塩島明美(p.7-16)

カタログ(I. プロローグ—近代都市パリの始まり；II. 懐古；III-1. 近代都市生活：古きパリ、変わりゆく都市；III-2. 近代都市生活：交流；IV. エピローグ—空想と願望あるいは夢) [欧文併記]

シャルル・メリヨン—心象としての都市風景 / 気谷 誠(p.54-59)

版画の技法と素材 / 坂本雅美(p.60-63)

作家解説

参考地図[パリ]

主要参考文献

Paris passages: Artistes-Flâneurs and their viewpoints / Shiojima Akemi (p.73-79)

図版(カラー53図、参考43図)

編集：塩島明美

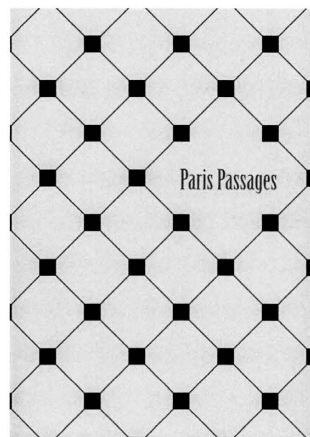
執筆：塩島明美、気谷 誠、坂本雅美

制作：印象社

表紙デザイン：飯田京子

発行：石橋財団ブリヂストン美術館(2008年10月)

26.0×18.5cm 79p ISBN 978-4-901528-09-2





「都市の表象と心象」(テーマ展示)

Paris passages : the changing faces of Paris in 19 th century prints and paintings

出品目録

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館(2008年10月)

30.0×21.0cm 8 p

目次

No.	作品名	作家	年代	媒体	備考
1	パリの風景	ジャン・バティスト・シメオン・シャルダン	1765-1766	油絵	パリの風景
2	パリの風景	ジャン・バティスト・シメオン・シャルダン	1765-1766	油絵	パリの風景
3	パリの風景	ジャン・バティスト・シメオン・シャルダン	1765-1766	油絵	パリの風景
4	パリの風景	ジャン・バティスト・シメオン・シャルダン	1765-1766	油絵	パリの風景
5	パリの風景	ジャン・バティスト・シメオン・シャルダン	1765-1766	油絵	パリの風景
6	パリの風景	ジャン・バティスト・シメオン・シャルダン	1765-1766	油絵	パリの風景
7	パリの風景	ジャン・バティスト・シメオン・シャルダン	1765-1766	油絵	パリの風景
8	パリの風景	ジャン・バティスト・シメオン・シャルダン	1765-1766	油絵	パリの風景
9	パリの風景	ジャン・バティスト・シメオン・シャルダン	1765-1766	油絵	パリの風景
10	パリの風景	ジャン・バティスト・シメオン・シャルダン	1765-1766	油絵	パリの風景

〈その他の刊行物〉

「夏休み子どもプログラム2008 よく見て、感じて、表現してみよう」

編集・発行：石橋財団石橋美術館(2008年7月)

25.7×18.2cm 二つ折りリーフレット ワークシート3枚差し込み



---

「館報」56号(2007年度)

Annual report of Bridgestone Museum of Art & Ishibashi Museum of Art

内容：

設立趣旨、機構・運営

展覧会(特集展示、夏の特別展示、拡大常設展、特別展、企画展)

教育普及(講座、ギャラリートーク、ファミリープログラム、夏休みこどもプログラム、サポートボランティア、実習生受入など)

入場者数(2007年度)

新収蔵作品(作品55点、絵画資料5点)

新収図書

修復記録

作品貸出記録

刊行物一覧

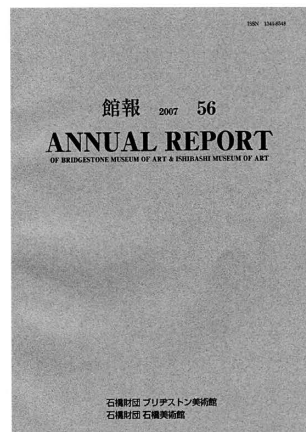
研究報告

日本におけるピカソの受容と歴史的回顧—影響、批評、収集の軌跡 / 塚田美香子(p.103-132)

筑後洋画の系譜補遺 / 植野健造(p.133-138)

美術館案内

石橋財団職員



編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館、石橋財団石橋美術館(2008年12月)

印刷：昭和堂

26.0×18.5cm 140 p ISSN 1341-8548

## 坂本繁二郎と禪のテキスト

貝塚 健

### 1. 「絵は宗教」、坂本繁二郎と禪

人間の根本問題はやはり宗教でしょうね。そういう意味で私にとって絵は宗教とも言えるでしょう。何教を信じているわけでもありませんが、しいて言えば自然教——とでも言いましょうか。気持ちとしては仏教の、それも禪宗に近い感じです。禪僧には絵をかく人が多いでしょう。

坂本繁二郎（1882-1969）の作品に、禪仏教が投げかける影を探り出すことが、本稿の目的である。彼が作品制作にあたって具体的な禪のテキストを利用していただことの可能性を考えてみたい。

自己を韜晦することに長けたこの画家は、禪についても多くを語ってはくれない。唐突に、最晩年の著述において上記のように語っているだけである。しかし、「絵は宗教」であり、自分が信じているものが「禪宗に近い」と語る口ぶりは、禪と坂本の強い関係を明かすものである。この言葉を道標として、彼と禪のテキストが絡み合う森に分け入ってみよう。

### 2. 坂本を包み込む禪の世界

#### 2.1. 梅林寺と東海猷禪

坂本が本格的な禪と出会ったのは、久留米の少年時代に遡る。坂本の夫人薫に取材した岸田勉は以下のように記している。

薫夫人によると、坂本はつねに四書五經の漢籍を手放さず、少年のころ、薫夫人の実家である権藤家に出入りして、ときには一泊することもあったという久留米の禪道場梅林寺の住職、猷禪和尚の前で話を聞いていたこともあったという<sup>2)</sup>。

梅林寺は、久留米の京町にあった坂本の生家近くにある、九州を代表する臨済宗妙心寺派の名刹である。東海猷禪（1841-1917、fig.1）は、その住持で、晩年には妙心寺派管長も務めた傑僧であった。猷禪の在家信者向けの説法である普説に坂本が接したというのである。猷禪の普説がどのよう

なものであったか想像するしかないが、まもなく管長となる禪匠の講話は、少年坂本の心に強く刻まれたに違いない。

東海猷禪は、諱は玄達、室号を三生軒という<sup>3)</sup>。1841（天保12）年4月8日、美濃国洞野村に生まれた。数え年12歳のとき、恵利寺の禮源の下で得度。禮源のそばにあって内外の典籍を究めた。20歳で美濃天喜寺の牧牛庵伊山祖安に参じ、伊山の寂後、23歳のとき、白隠下四世の万福寺、邃巖文周に参じた。猷禪34歳で邃巖が示寂したのち、1977（明治10）年、その法嗣である幽松軒寛州玄政の下に投じた。翌年、猷禪は38歳で寛州の印可を受ける。すなわち白隠慧鶴（1686-1769）より六世にあたることになる。愛知県稲沢の某家で使役夫として毎日を送っていたところを見出され、1879（明治12）年、請われて久留米梅林寺の住持となった。旧久留米藩主有馬家の菩提寺であったにもかかわらず、当時の梅林寺は荒廃を極め、「疎屋老壁庫下蔵米僅剩二斗耳（疎屋老壁庫下ニ蔵米僅カニ二斗ヲ剩ス耳ミ）」だったという。以後、伽藍の改築など同寺の復興に尽力し、西日本有数の禪道場に育て上げた。在家信者の篤い支持・支援を集めたからだろう。坂本薫夫人の実家権藤家は久留米小森野の大地主であったが、猷禪が普説をかねて権藤家にたびたび泊まっていたのは、そうした在家信者の教化にもきわめて熱心であったことを物語っている。おそらく禪堂とは異なる在家信者向けの講説でも、聞くものの心を捕らえて放さない魅力があったに違いない。1905（明治38）年4月、



fig.1  
東海猷禪

65歳のとき、梅林寺中興の功績を評価され、大本山妙心寺の第10代管長となる。1909（明治42）年6月まで管長を務めたが、その間は久留米と京都をたびたび往復した。管長としては、経済的苦境にあった妙心寺の債権者との交渉にも成功している。また、妙心寺開山関山慧玄国師550年遠諱法要を取り仕切った。法嗣には建仁寺派管長となる竹田黙雷（1854-1830）らがいる。猷禪は、1917（大正6）年5月1日、77歳で遷化した。その前日、「書遺偈了更又画一円相半擲筆唱万歳万歳微笑而就褥（遺偈ヲ書キ了ツテ更ニ一円相ヲ画ク半バニシテ筆ヲ擲ゲ万歳万歳ヲ唱エ微笑シテ褥ニ就ク）」という。

現在も梅林寺は、大本山妙心寺、岐阜の正眼寺と並んで「三大鬼道場」とも称されるほど修業の厳しい禅刹として知られる。明治期にその禅風の基礎を築いた猷禪に直に接したことは、坂本が臨済禅に眼をひらく大きなきっかけになっただろう。猷禪は、もちろん禅林修行の場では『碧巖録』『臨済録』などの提唱を行っている。想像するに、普説においてもこうした禅の大宗匠の言行録である祖録をもとにした講話も、行われたのではないだろうか。そうであるならば、それらが坂本を禅のテキストへ強い関心を持たせるきっかけになったのは間違いない。坂本が絵を学ぶために上京するのは、1902（明治35）年である。坂本が猷禪に接した時期はそれ以前のはずで、坂本が10代後半、妙心寺派管長となる前の猷禪は50代後半から60代初めにかけてであった。

## 2.2. 不同舎をめぐる人々と禅

故郷で禅の真髄の一端に触れた坂本は上京後、小山正太郎（1857-1916）が主宰する画塾不同舎に入った。ここにも禅の薫風が色濃く漂っていた。小杉放菴（1881-1964）の不同舎時代を振り返る述懐を見てみよう。

猫騒動というのがあった、近隣に泥棒猫がいて、一時教室の弁当を荒らす、苦学自炊のさむらい共、弁当を喰われたとて、直ぐに横丁の飯屋へ、というわけに行かず、各々腹を立てたから、計略を以て細引のわなに首を突っ込ませ、両方から引張る、猫の活力侮れず、なかなか往生とならん、そこで一人木剣をおとって、南泉の斬猫だと打ちに打ち据えた、息絶えたりと見て掃き溜めに捨て置く、あとから一人来たので、今これこれで奴を退治したところと話す、

その猫をどうした、あそこに捨てた、それはもったいないと、行ってみると畜生の業念、いつのまにか息を吹返して、半身をもたげたところ、思い切りの悪い奴だと再び一棒くれて提げて帰った、翌日より数日の間、この一棒先生の弁当に肉あり、知らぬ者は牛肉だといって配給された。これを賞めた話にしてふいちょうするわけでは無いが、この位の根性若い者にあっても、あるいは邪魔にならんであろう、一方に地藏様も御座れば、又かくの如き豪傑もいた話だ。

南泉斬猫は禅宗の公案だ、あの頃不同舎に禅をやる人多かった、小山先生の漢学趣味から漢籍の読書家を生じ、読書家だんだんと思想的になる。余り世の中に知られぬ洋画をやって、物質に酬い少なき場合、筋の良い青年ならば必ずそうなるわけだ、内面に向って慰藉と奮発を求める、私も吉田氏<sup>9</sup>から『坐禅用心記』など見せられて、面白く思い、禅寺行きの連中の尻についた覚えがある、禅書をおもしろがるなど不届きで、あしたに道を聞いて夕に死んでもかまわぬ気で、一念不乱に精進するのが禅だろうが、私は遂にこの、面白き以上には進出し得なかった、沼辺強太郎、長尾黙の両老など、相当突っ込んだ修行をやったと思われる<sup>9</sup>。

「南泉斬猫」は『趙州録』巻上、『景德伝灯録』巻八に見えるが、『碧巖録』第63則および第64則や、『無門関』第14則に採録された。『碧巖録』のものは、以下のとおりである。

### 第六十三則 南泉両堂争猫

南泉一日、東西両堂争猫兒。南泉見遂提起云、道得即不斬。衆無对。泉斬猫兒為兩段<sup>9</sup>。

南泉山である日、東西の両堂の僧が猫のことで争っていたが、南泉はそれを見て、猫を持ち上げて言った。「言うことができれば、斬らぬ」。皆答えなかった。南泉は猫を二つに斬った<sup>9</sup>。

### 第六十四則 趙州載頭草鞋

南泉復举前話、問趙州。州便脱草鞋、於頭上戴出。南泉云、子若在、恰救得猫兒<sup>9</sup>。

南泉はまた先の話を取りあげて趙州に問うた。趙州はすぐに草鞋を脱ぐと、頭の上に載せて出ていった。南泉が言った、「君がいたら、ちゃんと猫を助けられたがな」<sup>10</sup>。

注目したいことは第一に、「泥棒猫」を追い回したとき、不同舎の面々が「南泉斬猫」だと騒いだことだ。いくら著名な公案だとしても、画塾生たちのほとんどがそれを常識のひとつとして共有していることに留意したい。明治30年代、釈宗演らが『碧巖録』など難解な禅籍の一般向け注釈書を次々に発刊していた。画塾生の少なからぬものたちがこれらの書籍を繙いていたことが想像される。そうした行動の要因を、「余り世の中に知られぬ洋画をやって、物質に酬い少なき場合、筋の良い青年ならば必ずそうなるわけだ、内面に向って慰藉と奮発を求める」というように、小杉放菴は必然的なものだったと語っている。「禅寺行き」がどこだったのかは確かめようもない。不同舎があり、その塾生の多くが住んでいた上野の北西麓には多くの寺院が密集していて、禅寺は枚挙にいとまがない。ちなみに、坂本繁二郎が1907（明治40）年頃から1909（明治42）年6月まで住んだ下谷区谷中三崎町（現・台東区谷中5丁目）の立善寺（日蓮宗）の敷地は、今も坐禅道場として知られる全生庵（臨済宗国泰寺派、1880（明治13）年創建、開基山岡鉄舟、開山越叟和尚）と背中合わせである。そうした地理的な条件も背景に、不同舎の塾生らに禅の思想や知識が染みわたっていった。

第二に興味深いことは、小杉たちが無意識にというよりもむしろ意識的に、禅林と自分たちの生活にアナロジーを見出していることである。すなわち、画塾が禅寺であり、塾生が修行僧であり、塾生を指導する小山正太郎が禅匠にあたる。塾生たちの質素な衣食住、作品制作という個に没入する営為を、禅林の雲水たちの生活に見立てている。これを援用すれば、塾生たちが憧れるフランスあるいはヨーロッパは、中世の禅僧たちが渡航した禅宗の故郷、中国と対比できる。さらにもう一歩進めれば、洋画の本場フランスを経験しながら同時代のフランス美術を否定する画家と、入明しながらも《破墨山水図》自序で当時の明には師とすべき画家はいなかったと述べる禅画僧雪舟との類似も、成り立つかも知れない。

第三に、禅への関心の現れ方が多様であることがあげられる。熱心に禅利に通った洋画家たちもいれば、小杉は自身を「禅書をおもしろが」っていた程度だと語る。「禅書」も、入門的な作法書から古来「宗門第一の書」とされた『碧巖録』にいたるまで、様々な段階、種類のもので読まれていたことだろう。実地の宗教体験を大事にしたも

のから、彼らから二次的知識を吸収するだけのものもいただろう。禅からの影響が眼に見える形で、あるいは見えにくい形で制作に反映させる画家たちがいたと想像される。

そうした精神風土の中で、坂本は洋画を描き始めた。久留米での禅体験と東京での禅体験が作品の中に染み出してもおかしくない環境にあったといえる。坂本が参禅したことを証する記録もないし、自分の宗教体験を語ることもなかったが、直ぐ手の届くところに禅があったのである。以下、坂本作品の中に禅の要素、特にテキストがどのように潜んでいるのかを具体的に探ってみたい。

### 3. 坂本が描いた牛

#### 3.1. 坂本の「牛」シリーズ

牛は好きな動物です。自然の中に自然のままであり、動物の中でいちばん人間を感じさせません。大正時代の私は、まるで牛のように、牛を描き続けたものです<sup>10</sup>。

1910年代の坂本繁二郎にとって最も重要な題材は牛であった。第6回文展に入選し、夏目漱石に激賞された《うすれ日》（1912年、個人蔵、fig.2）、フランス留学直前に発表された《牛》（1920年、

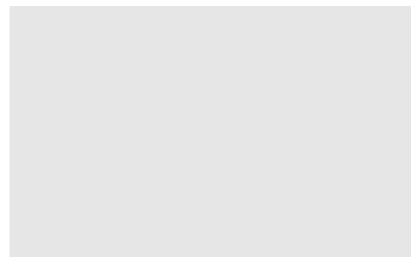


fig.2  
坂本繁二郎《うすれ日》  
1912年、個人蔵

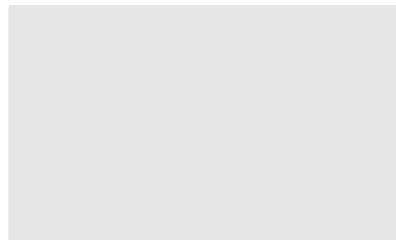


fig.3  
坂本繁二郎《牛》  
1920年、石橋財団石橋美術館蔵

石橋美術館蔵、fig.3) がその代表作である。この2点を含め、牛が描かれた坂本の油彩作品をリスト化したものが表1である。この23点の中から、牧場を題材にした風景画ともいうべきものや、スケッチ的な小品と考えられるものなどをぞくと、以下の5作品が浮かび上がってくる。

《うすれ日》1912年、71.1×116.4cm、個人蔵

《牛》1913年、71.0×116.5cm、島根県立美術館蔵

《海岸の牛》1914年、71.3×117.0cm、北九州市立美術館蔵

《牛》1915年、73.0×116.5cm、新潟県立近代美術館蔵

《牛》1920年、71.0×116.5cm、石橋美術館蔵

これらには明瞭な共通点が存在する。すなわち、50号 M 型 (116.7×72.7cm) という規格のキャンバスを横に用い、白と黒の斑の乳牛ホルスタイン種を、じっとしている一頭のみ描くという特徴である。牛の連作の様々な試行錯誤は、この定型に収斂している。では、なぜ坂本は牛を繰り返し描いたのだろうか。その執拗なまでの拘り方は、単に「好きな動物」だからでは説明できない。考えられる3つの要因をあげておこう。

まず第一に、1909（明治42）年6月から1921（大正10）年7月まで、坂本が住んだ雑司が谷・池袋地区に酪農牧場が数多くあり、乳牛を題材にすることが非常に容易であった。大量の乳牛を眼にすることになったのである。稿者は以前、当時の酪農の状況と坂本の居住地の関わりについて詳述したので、ここでは繰り返さない<sup>12)</sup>。

要因の第二は、牛を自己に同化させていたと考えられることである。最初にこの指摘をしているのが、1910年代に坂本と交流を重ねた三木露風（1889-1964）である<sup>13)</sup>。

或画家のえがいた牛

或画家のえがいた牛は、真実で、黙で、その人の気品が出てゐると思つた。

そこで私は、或時、微笑しながら弟子に話した。

「あの男のえがいた牛の作品は、彼画家自身の自画像と言つてもよい品質即ち本然の姿とこゝろとを有してゐると思ふよ。」

此の私の言葉を聞いたその弟子は、

「画といふものは皆自画像です。」

と言つた。

表1 坂本繁二郎の描いた牛（油彩画）

制作年	題名	大きさ	規格	所蔵	増補版	発表展	頭数	情景、牛の姿態など	備考
1907	大鳥の一部	116.8×72.8	50 M	福岡市美術館	173	1907、東京勸業博覧会	1	点景：通り抜ける	一部のみ
1911	海岸	80×100	40 F		428	1911、第5回文展	3	牧場；ホルスタイン；黒牛；立つ	三等賞
1912	御宿村風景	60.7×50.3	12 F		182	1913、第11回太平洋画会展	1	自然景か牧場か不明	《赤牛》を切断。一部
1912	御宿村の一部	23.3×32.6	4 F		429		1	牧場？	
1912	うすれ日	71.1×116.4	50 M	個人蔵	7	1912、第6回文展	1	海岸；ホルスタイン；立つ	漱石の評
1913	仔牛	60.5×80.3	25 P		187		1	海岸？；黒牛？；立つ	
1913	牛	71.0×116.5	50 M	島根県立美術館	188				
1914	海岸の牛	71.3×117.0	50 M	北九州市立美術館	9		1	海岸；ホルスタイン；立つ	
1915	夕月	32.1×40.3	6 F		190		1	自然景？；夜？；歩く	牛か馬か不鮮明
1915	牛	23.1×33.0	4 F		191		1	牧場？；坐る	
1915	牛	60.6×80.3	25 P		192		2	牛舎；立つ；坐る	
1915	牛	24.2×33.3	4 F		193		1	牧場；坐る	
1915	三月頃の牧場	60.9×80.4	25 P	個人蔵	197	1915、第2回二科展	3	牧場；ホルスタイン；坐る	北辰舎牧場か
1915	牛	73.0×116.5	50 M	新潟県立近代美術館	10		1	牧場；ホルスタイン；立つ	
1920	牛	71.0×116.5	50 M	石橋美術館	211	1920、第7回二科展	1	牧場；ホルスタイン；坐る	
1922	キャンベレ	32.2×39.5	6 F		17		1	牧場；黒牛；立つ；点景	
1929	春郊牧牛	32.0×41.0	6 F		31		1	牧場；ホルスタイン；立つ	
1935	放牧牛馬	50.4×60.6	12 F	個人蔵	40		1；馬2	自然景；立つ	
1935	放牧牛馬	31.8×40.8	6 F		268		1；馬2	自然景；静	40と同構図、習作か
1940	水上牛馬	31.9×41.2	6 F		50		1；馬1	自然景；ホルスタイン；立つ	
1919-65	牛	60.5×80.3	25 P	個人蔵	419		1	牧場；坐る；後ろ姿	
1967	牛	31.9×41.2	6 F		420		2	自然景？；ホルスタイン；立つ	
1969	白い牛	50.0×61.0	12 F		424		1	牧場；坐る	未完

なるほど、さういふことを言ふかと思つて、私は黙つてゐた。

して見ると、或その画家の作品は、自画像らしくない自画像であらう<sup>14)</sup>。

坂本の牛を彼の「自画像」と見なすならば、じつと佇む1頭のみを描く意味も理解しやすい。最晩年の回想にあった「大正時代の私は、まるで牛のように、牛を描き続けた」という口ぶりも、坂本自身が描かれる牛そのものであることを仄めかしている。また、この時期の坂本に、通常の意味での自画像がほとんどないことも、牛＝自画像説を補強するものとなるだろう。1910年代の自己探求が、牛の連作になって現れたと見ることが出来る。

そして第三に、本稿の主題にそつて、禪のテキストが大きな役割を果たしていることを確認してみたい。中世以来、禪の美術では数多くの牧牛図が描かれたが、仏典の中では、しばしば煩惱をコントロールすることを、牛を飼ひならすことに喩えた。インドで聖なる動物とされた牛は、様々な仏典に繰り返し登場し、農耕文明をもつ中国に仏教が東漸した段階で、牧牛の比喻や多くの図像が生み出された。その牛をモチーフにした禪のテキストの一つに「十牛図」がある。坂本が十牛図を知っていたことは間違いない。むしろ積極的に作品制作に利用していたとさえ考えられるのである。

### 3.2. 「十牛図」と坂本

「十牛図」は、「信心銘」「証道歌」「坐禅儀」とあわせて、「禪宗四部録」と呼ばれる参禪の手引きである。中国宋代12世紀に成立したと考えられる頌と図の10組の組み合わせだ。異本が複数あるが、日本ではもっぱら、12世紀後半、梁山廓庵によって作られたものが伝えられ用いられた。上田閑照は以下のように概説している。

「十牛図」とよばれているテキストがある。牛を見失った牧人が、再び牛を見つけ出し、野性に戻っていたその牛を牧いながら牛との一体を実現してゆくという十コマ連の図であるが、それは、私達のほんとうのあり方、「真の自己」の自覚的現成を十の境位を表わす十個の図とその間の動的な連関とが、自己実現の道程とその諸相を示し、各図ごとにつけられた簡潔な序と頌（詩）とがその都度の自己の境位の位相を説明している。十二世紀後半北宋の末、廓庵禪師によって作られたこの十牛図は、元来は禪門の

修行者のための基礎的な手引であり、現在もそのようなものとして用いられているのであるが、そこには、私達の「自己」というあり方の問題、自己が経験経歴する自己のさまざまな様子とその間の連関がよく示されている。したがって十牛図を、禪の事柄に限らず、「自己の現象学」とでも言い得るものとして私達自身の上に読みとってゆくことも可能であると思われる。十牛図は、その都度の段階において自己が自己にどのようなにあらわれるかを示しながら、しかも同時に、そのあらわれを真の自己に徹した自覚の光によって照らすことによって、その都度の自己から超え出て自己に徹する道を開き示す。あるいは次のように言うことができるであろう。一つ一つの図は、その都度の自覚として自己が自己を描く自画像、しかもその描く働きに真の自己が添手をして描き出された自画像である。私達は、私達が実はそれでありながらまだ現にそれではない私達自身の自己像を次々に見ながら、真の自己へと促されていく<sup>15)</sup>。

真の自己を見出していく10の段階は、「第一尋牛」「第二見跡」「第三見牛」「第四得牛」「第五牧牛」「第六騎牛帰家」「第七忘牛存人」「第八人牛俱忘」「第九返本還源」「第十入廬垂手」である。廓庵による頌に添えられた各々の図は、すべて円相の中に描かれる。参考図は、周文筆の伝承をもち、周文系の画家の手になると考えられている相国寺本である (figs.4-13)。以下、十牛図の大意を紹介する。

本来の自己を牛に喩えた物語は、人がその牛を見失ったところから始まる。廓庵の序は「從來失せず、何ぞ追尋を用いん（はじめから見失っていないのに、どうして探し求める必要があらう）」と述べている。本来の自己は自分の中に存在しているのに、それを見失ってしまっているのだ。喪失された自己の獲得が十牛図のテーマであることが明示される（第一尋牛）。ようやくにして探し求める牛の足跡を見つけた。經典などを涉獵し、知識として仏性を把握する手掛かりをつかんだ。しかし、足跡と牛とは違う。まだ本来の自己を獲得する途上である。足跡は自己獲得への道標となり、行くべき方向は見えてきた（第二見跡）。声を頼りにして、探して求めている牛の姿を見つけた。しかしまだ身体の一部である。周囲は、春の穏やかな光景が包んでいる（第三見牛）。ようやく捕まえた牛は野外に逃れているうちに野生に



戻ってしまっている。牛の鼻面を引っ張っていこうとしても、言うことを聞かない。手綱を放してしまっは、再び飼いならすことはできない状態だ（第四得牛）。「牧牛」とは牛を飼いならして放し飼いにすることである。ようやく飼いならした牛は、手綱を持たれていても、それはたわみ拘束されているわけではない。頌に「牧し来って純熟し」とあるが、これは黒い牛が純白となる様子を示している（第五牧牛）。コントロールしきった牛と人は一体となり、家路に向かう。人は笛を吹き、後ろ向きに乗っても、牛は脇目をしたり道を誤ることもない（第六騎牛帰家）。牛にまたがって家に帰り着けば、失われた自己の姿であった牛はもう無用となる。「物我相忘鎮日閑（世界も自分も忘れ果てて一日中のんびりしている）」（第七忘牛存人）。迷いもなくなり、悟りの境地さえなくなって、ただそこには無がある。図ではただ円相のみで表される（第八人牛俱忘）。失った本来

の自己を取り戻し、仏性を会得するサイクルをめぐったが、その営為の間も、自然は自然そのもののままである。「水自茫茫花自紅（川は川で果てもなく、花は花で紅く咲くのみ）」（第九返本還源）。「入鄺」とは町にくること、「垂手」とはぶらりと手を下げて何もしないことである。悟りを開いたものは町に出て立ちつくすことで、自身の悟りを衆生と分かち合うことが求められる（第十入鄺垂手）。

十牛図が坂本の牛図連作に影響を与えたと考えられる理由は、まず第一に、自然景の中の牛一頭がモチーフとして共通していることである。もちろん、他にも様々な牧牛図が自然景の中の牛を描いていて、その影響も考慮すべきだろう。ここで十牛図を特に強調しておきたい第二の理由は、後述するように坂本にとって円相が大きな意味を持っているからである。初期から皿、お椀などの円形モチーフに坂本は特別の執着を見せ、そのモ



fig.4  
伝周文《十牛図 第一尋牛》、相国寺蔵



fig.5  
第二見跡



fig.6  
第三見牛



fig.7  
第四得牛



fig.8  
第五牧牛



fig.9  
第六騎牛帰家



fig.10  
第七忘牛存人

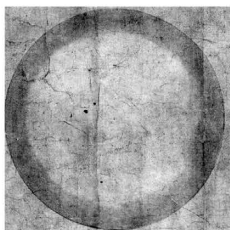


fig.11  
第八人牛俱忘



fig.12  
第九返本還源



fig.13  
第十入鄺垂手



チーフが心の中の円となり、晩年にそれが形に表れるようになったという指摘もある<sup>16)</sup>。十牛図の図像的な二大モチーフは牛と同時に円相である。廓庵の十牛図はすべて円相の中に描き表され、第八人牛俱忘は円そのものになっている。坂本晩年の月雲シリーズを生み出すには十牛図が最も大きな発想源だったという可能性があるだろう。第三に、十牛図が示す「直指人心、見性成仏」のプロセス、ダイナミズムが坂本の画業全体に具体的な作品を通して現れていると思えることである。

《うすれ日》(fig.2)は、坂本の牛図を初めて定型化させた作品である。鎌倉円覚寺での参禅体験を持つ夏目漱石はこの牛を評して、「牛は沈んでいる。もつと鋭く云へば、何か考へてゐる」と語った<sup>17)</sup>。漱石の禅の体験や知識が、無意識的に坂本作品の理解に影響を与えている。むしろ、二人の禅体験が共鳴し合っているといったほうがよいだろう。描かれた牛が「考えている」状態にあることは、すなわち、描いた坂本が考えていることなのである。背景の波立つ海面の異様な高さ、近景から背景までに一様な筆致は、渾然と思念する人間の姿を想起させる。坂本はまだ大悟したわけではない。この作品では、むしろ十牛図の中では「見牛」あるいは「得牛」あたりにあたるのではないか。煩惱の海の中におぼろげに見え始めた真の自己を提示しえた作品と理解したい。

#### 4. 坂本作品と禅のテキスト

##### 4.1. 《大鳥の一部》と「牛過窓櫓」

以下では、坂本の2作品と禅の公案との関わりを具体的に考察してみよう。《大鳥の一部》(福岡

市美術館蔵、fig.14)は、1907年春の東京勸業博覧会に出品することを期して取り組まれた大作であり、入選して事実上のデビュー作となった。この作品について、坂本は後年、以下のように語っている。

島には井戸が少なく井戸のほとりは毎日水を汲む女で賑わいました。宿は井戸の側にあり、私は二階の窓から見える周辺の景色を描くことにしました。だがいくら頼んでも島の娘たちがモデルになってくれません。しかたなくいろいろな女性の印象をまとめて人物を描きました。「大鳥の一部」という作品です<sup>18)</sup>。

1906年夏に伊豆大島を森田恒友と訪れた坂本は、滞在する宿の2階の部屋の窓から見える風景を描いた。しかし窓からの写生そのものではなく、様々に取材した個々の光景の組み合わせであった。洗濯ものを干す人物、洗濯ものを洗う女性、水を呑む子どもなどが中景に配されている。近景に描かれたのが、牛と、頭に果物籠を載せて牛を牽く女性である。

人気のない雑木林の下蔭道を兎もすると御婆さんなどが牛を牽いてポトポトやつてくる、いきなりに今日はーと語調の長いそして優しい小児の様な声で挨拶する、引かれた牛はノッソリノッソリ歩いて行く、たまらぬ程面白い<sup>19)</sup>。

大島で眼にした牛の光景に、坂本は強い感興を抱いた。それを作品に挿入するのに、何の不思議もないことだろう。ここで興味深いのは、臀部と尾のみを画面に入れた、その牛のトリミングの不自然さにある。

この作品は坂本の牛図の定型が出来上がる前のものである。しかし、牛が画面に描き込まれた第一作であり、縦横の違いはあるが、後の定型と同じ50号M型のカンヴァスを用いている。画面左下にある牛の臀部は、片隅にあるとはいえ、近接してかなり大きく採り上げられた題材である。比較してみたい禅のテキストは、『無門関』第38則にある公案だ。

『無門関』第38則 牛過窓櫓

五祖曰、譬如水牯牛過窓櫓、頭角四蹄都過了、因甚麼尾巴過不得

五祖が言われた、「たとえば水牛が通り過ぎる

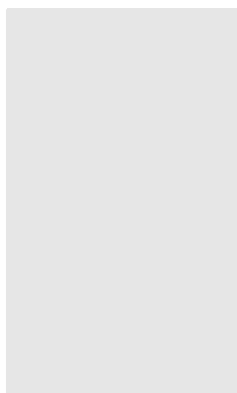


fig.14  
坂本繁二郎《大鳥の一部》  
1907年、福岡市美術館蔵

のを、窓の格子越しに見ていると、頭、角、前脚、後脚とすべて通り過ぎてしまっているのに、  
「どういふわけで尻尾だけは通り過ぎないのだろうか」<sup>20)</sup>。

白隠が、「難透」と位置づけた8つの公案の一つである。修行僧ではない坂本は、公案を透過することを目指すわけではない。おそらくテキストを読んだときに、小杉放菴のように面白く興味深く感じ、脳裏にとどめておいたものだろう。画面をもう一度見てみよう。左手前に最も近接する牛。そこから主要モチーフがジグザグに奥へと移行する。牛から右に薪の重なり、その左奥に洗濯する女性、またその右奥に洗濯ものを干す女性。遠近法の消失点は画面右上にある。いわば、視点を移動させる出発点に牛が位置している。この《大島の一部》がこの公案を主題にしているとは言えない。しかし、モチーフの構築の中に大きな影を落としている可能性をここでは指摘しておきたい。

#### 4.2. 《牛》と「庭前栢樹」

《牛》(1920年、石橋美術館蔵、fig.3)について、画業全体を振り返った晩年の坂本は以下のように語っている。

ヨーロッパ行きのきっかけになったのは、大正9年の二科展に出品した「牛」が、発端と言えるかもしれません。一口で言えば、日本的というか東洋人独特の内的深みを油絵で盛り上げることを目指す私としては、この重々しく、黒一色でうずくまる「牛」を発表することで、私の目標をかかげ、「坂本はこの世界に生き続ける」ことを宣言したような形になり、世間もそう受け取ったようです。「それならヨーロッパに行き、油彩の伝統を生み出した本場で、身も心も浸りつけ、そこに何を見出すか、仕事に目標に信念に、とにかく否定にしろ肯定にしろ、一見する価値がある」と洋行帰りの友だちにすすめられたのです。私もその論には反対でませんでした<sup>21)</sup>。

自信作の出来上がりに満足そうな坂本の顔が思い浮かぶ。ここで強調したいのは、渡仏のきっかけにこの作品を位置づけていることだ。フランスの同時代美術を高く評価することのなかった坂本だが、結果的にフランス体験は大きな転換をもたらした。活動拠点は、渡仏前の東京から帰国後に

は九州に変わり、主たるモチーフが牛から馬に変わった。色調も中間色を多用するようになる。渡仏、すなわち西へ向かうことと、この作品はどのような関わりを持っているのだろうか。制作に関して、坂本は興味深いことを発表直後に残している。

二科会に出品した「牛」は去年から手をつけてゐたものであつた。私の住居の近所にあつた牧場の一隅で、春の芽立つばかりの若柏と一匹の牛を図に入れてかきはじめた。曇つた午後  
の光景である。

今迄の失敗にこりて、其の場ではスケッチだけに止めて、家にかへつて改めて製作することにしてゐた。が、こんなことから意外に暇取つて、何時の間にか柏の芽がすつかりのびてしまつたので止むを得ず中止した。そして今年の同じ季節にやつとかき上げることが出来たのであつた<sup>22)</sup>。

坂本は柏の木に異様な執着を示している。描き始めの頃と柏の葉の様子が変わったからといって、制作を1年先に延ばしているのである。ここで想起したい公案は、同じく『無門関』の第37則にある「庭前栢樹」である。因みに、この公案は関山慧玄(1277-1360)が「賊機有り」、すなわち、盗賊が根こそぎ奪い去るような圧倒的な力をもって仏法に開眼させるものだ、と評している。

##### 『無門関』第37則 庭前栢樹

趙州、因僧問、如何是祖師西来意。州云、庭前栢樹子。

趙州和尚にある僧が、「達磨大師がはるばるインドからやってこられた意図は何ですか」と尋ねた。すると趙州は、庭を指さして「あの柏の樹じゃ」と答えられた<sup>23)</sup>。

「祖師西来意」とは、禪の宗祖達磨がインド(西方)から中国に渡来して伝えようとした仏法の真髄をさす。古来、様々な祖師たちが議論の題材とした。これをめぐる公案は他にも多々ある<sup>24)</sup>。「庭前栢樹」と坂本の世界との対応を考えてみよう。

洋画家坂本にとって西方から日本にやってきたものとは、洋画そのものに違いない。画面の中では、坐禅を組むように牛が座り込み柏の木を見つめている。自己像としての牛が坂本その人だとすれば、「祖師西来意」である柏の木は油彩画の真

髓ということになろう。《うすれ日》で真の自己を掘み始めた坂本は、この《牛》で、自己像の一つの結論と油彩画観の一つの結論を同時に提出できることになった。「重々しく、黒一色でうずくまる『牛』を発表することで、私の目標をかかげ、『坂本はこの世界に生き続ける』ことを宣言した」とは、そうした坂本の境位を表出できたことをいうのだろう。

#### 4.3. 月雲シリーズと月輪

晩年、坂本が取り組んだ連作に月雲 (fig.15) がある。

数年前から、画題はもっぱら「月雲」にいられています。ほかの絵を頼まれて、その途中、池面に映った満月の姿、深夜、小窓からふとながめた月の静かさのなかに秘めたあふれるような充実感に打たれてのことですが、老いの心境が月にモチーフを求めたのかもしれない<sup>25)</sup>。

月はやはり満月がいい。欠けた月はどうしても力がたりない<sup>26)</sup>。

坂本は月の中でも満月に拘った。仏教でいうところの月輪である。そもそも仏法が仏像以前に最初に図像化されたのは、法輪、すなわち円であった。以来、円形は様々なヴァリエーションを加えながら、仏性の象徴として用いられてきた。中でも円を最も重要視していたのが禅宗である。柳田聖山は、円相の初出について以下のように述べている。

禅の本における円相の初見は、おそらくは『宝林伝』でなかろうか。この本は、唐代中期

に新しく登場する、馬祖の禅の由来を説くのが目的である。円相は、西天第十四祖龍樹の、説法の場面にあらわれる。龍樹が説法のために坐にのぼると、その姿が消えて月輪相に変わるのである。龍樹の声は、円相のうちより聞こえ、弟子たちを円相のうちに包む。説法が終わると、円相が消えてふたたび龍樹が姿をあらわす。この一段は、『祖堂集』にも『伝燈録』にもうけつがれて、禅の歴史の名所の一つとなる。周知のように、わが道元の『正法眼蔵』の「仏性」は、明州育王山において、この場面をえがく壁画を見た感動を中心テーマとしている。円相は月輪であり、仏性のシンボルである。そこには聖牛の場合と同じく、特殊な神秘性が含まれる。道元の「仏性」も、もちろんそのうちにある<sup>27)</sup>。

以後、円相は禅の中で大きな位置を占めてきた。中国の祖師たちは、空中に円相を描くことを好んだ。例えば『碧巖録』には、以下のような公案が載る。

#### 第三十三則 陳操看資福

陳操尚書看資福。福見來、便画一円相。操云、弟子恁麼來、早是不著便。何況更画一円相。福便掩却方丈門<sup>28)</sup>。

陳操尚書が資福に会おうとした。資福は来るのを見ると、空中に円を描いた。陳操「弟子がこのようにやって来たのに、はなからついでない。そのうえ空中に円を描くとは」。資福は居室の扉を閉めてしまった<sup>29)</sup>。

資福如宝は馬祖・仰山下の尊宿で、空中に円相を描くのは仰山系の禅匠たちのお家芸であった。

紙幅に一筆で描き付けた円相図が確立するのは、日本においてである。クルト・ブラッシュによると、現存する最古の円相画は養叟宗頤 (1376-

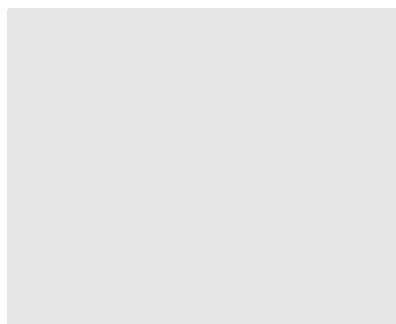


fig.15  
坂本繁二郎《月》  
1966年、無量寿院蔵

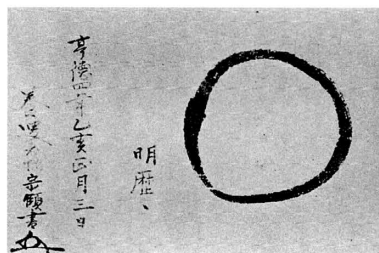


fig.16  
養叟宗頤《円相図》  
1455年

1458) の作品 (fig.16) だという<sup>30)</sup>。以後、盤珪永琢 (1622-1693)、白隠慧鶴ら、多くの禅僧が円相図を描いている。既述のように、東海猷禅の最期でも遺偈の後で円相を描こうとしたと伝えられている<sup>31)</sup>。

描き終わると始めも終わりもなくなる円相は、仏性のシンボルに相應しい。円環によって内側と外側の区別が生じるが、祖師たちはその区別を乗り越えてみよ、と修行する雲水たちに迫っている。円は仏性のシンボルとなると同時に、機縁ともなる有効な図形であった。坂本は月輪の輪郭を、雲で掩うことによって不分明なものにしている。ここでも内と外とが溶けあうように光りを放っている。

「満月の……あふれるような充実感」に心打たれたと坂本は語っているが、自然現象の美しさだけが月雲シリーズのきっかけではあるまい。十牛図、円相図の図像が、坂本の心の奥襞に染み込んでいたからと考えるべきだろう。

#### 5. むすび——禅画としての坂本作品

禅の公案を絵画化したのは、もちろん坂本だけではなかった。たとえば、小山正太郎の弟子・中村不折 (1866-1943) の《廓然無聖》(1914年、東京国立近代美術館蔵) がある。『碧巖録』第1則「武帝問達磨」に拠る作品だが、対話する達磨と梁武帝の二人の姿は、中村が公案を説話画あるいは歴史画の題材として扱っていることを物語る。坂本の禅テキストへのアプローチとはまったく異なるものだ。

坂本は禅のテキストにまず、画家としての関心から入った。作品に引用できる図像に眼をつける。牛の尾、柏の木、月輪などを画面に取り込むことは、一見、断片的で恣意的な禅の利用に見えるかも知れない。しかし、そうした営為の根の部分では、真に禅精神に裏打ちされた思念が見えかくれる。1910年代の坂本は以下のようにも述べている。

画が進歩すると云ふ事も、先づ画者が自分自身を何れ丈調べ得たか、随つて何れ丈確実な自分の歩調を踏み出し得たかと云ふところから起る可き筈である。自分を調べ得なければ得ない丈確実な歩調が現はれ得ない、確実の度がうすければうすい丈云ふ迄もなく進行の意味は薄弱となる<sup>32)</sup>。

禅では、あらゆるものに仏性があるとされ、それを坐禅、作務などを通じて、知識としてではなく全身全霊で感得することが求められる。自分の中にもある仏性を、自らの力で探り出さなくてはならない。「直指人心、見性成佛」とはそうした仏性を見極めること、真実の自己に出会うことである。坂本が、禅に極めて近い考え方をしていたことが分かるだろう。

「禅画」といって一般的に意味するところは、狭義では白隠ら江戸期の臨済僧が描いた水墨や淡彩の紙本作品をさす。広義では、現代にいたる禅僧による禅風の絵画を意味するだろう。題材や表現に禅味を加えただけの「禅風の」作品を厳しく指弾した柳宗悦は、禅以前の作品にも禅精神に合うものがあるとする。それを敷衍して以下のように語る。

禅風に専門化された作だけが禅的なのではない。寧ろ美しいものは何等かの意味で皆禅的だと見る方が妥当であらう。禅は普遍的な真理ではなかつたらうか<sup>33)</sup>。

坂本の、自己探求を究める祈りのような制作活動は、さらに緩やかに語義を理解するならば、油彩による禅画と呼んでも差し支えないのではないだろうか。「絵は宗教」だと語る坂本にとって、絵画制作は生きることそのものであったのである。

#### 註

- 1) 坂本繁二郎『私の絵私のこころ』日本経済新聞社、1969年、p.117
- 2) 岸田勉編『近代の美術』(2)坂本繁二郎』至文堂、1974年、pp.68-69
- 3) 猷禅の略歴は、東海裕山編『三生録』梅林寺、1941年、による
- 4) 河合新蔵のこと
- 5) 吉田博のこと
- 6) 小杉放菴『不同舎の人々』『放庵画壇』中央公論美術出版、1980年、pp.222-223。初出は、『帰去来』洗心書林、1948年
- 7) 入矢義高・溝口雄三・末木文美士・伊藤文生訳注『碧巖録 (中)』岩波文庫、1994年、p.281、から引用
- 8) 末木文美士編『現代語訳碧巖録 (中)』岩波書店、2001年、p.368
- 9) 『碧巖録 (中)』岩波文庫、1994年、p.286、から引用

- 10) 末本文美士編『現代語訳碧巖録(中)』岩波書店、2001年、p.375
- 11) 坂本繁二郎『私の絵私のころ』日本経済新聞社、1969年、p.60
- 12) 拙稿「東京を、20年で通り抜けた坂本繁二郎」『坂本繁二郎展』(カタログ)、石橋財団石橋美術館・石橋財団ブリヂストン美術館、2006年、pp.184-187
- 13) 同様の指摘には例えば、谷口治達がある。《うすれ日》について、「どうどうと寄せる波の音以外に何ひとつ妨げるもののない世界で、坂本は大自然に没入し、自ら虚になって牛を知り、牛の実感を通じて緊迫した“自然の脈動”をカンバスにのせた。坂本の築いた理論でいえば牛は間違いなく御宿の牛でありながら、また虚なる坂本の内部にとらえられた牛であり、そうして坂本そのものの牛である。“沈んでいる、考えている牛”は坂本本人なのである」(谷口治達『坂本繁二郎の道』求龍堂、1968年、p.101)
- 14) 『三木露風全集第二巻』三木露風全集刊行会、1973年、pp.493-494。初出は未確認だが、1928年頃の著作と思われる
- 15) 上田閑照「まえがき」上田閑照・柳田聖山『十牛図』ちくま学芸文庫、1992年、pp.18-19。初版は、筑摩書房、1982年
- 16) 田中淳「かたちの円からころの円へー坂本繁二郎《魚を持ってきた海女》」『日本の近代美術(4)新思潮の開花』大月書店、1993年、pp.49-58
- 17) 夏目漱石「文展と芸術」『東京朝日新聞』1912年10月28日付
- 18) 谷口治達『坂本繁二郎の道』求龍堂、1968年、pp.70-71
- 19) 坂本繁二郎「大島に往つて来ての話」『坂本繁二郎文集増補改訂版』中央公論社、1970年、p.12。初出は、『方寸』第1巻第4号、1907年8月
- 20) 西村恵信訳注『無門関』岩波文庫、1994年、pp.146-147
- 21) 坂本繁二郎『私の絵私のころ』日本経済新聞社、1969年、p.69
- 22) 坂本繁二郎「二年か、つた牛」『坂本繁二郎文集増補改訂版』中央公論社、1970年、pp.160-161。初出は『美術写真画報』1920年10月
- 23) 西村恵信訳注『無門関』岩波文庫、1994年、pp.144-145。「栢」は日本の栢ではなく、栢横(ビャクシン)だとされるが、ここでは植物名の異同を問う必要はない
- 24) たとえば、『碧巖録』第17則など『碧巖録』第17則 香林西来意 僧問香林、如何是祖師西来意。林云、坐久成勞。
- 25) 坂本繁二郎『私の絵私のころ』日本経済新聞社、1969年、p.8
- 26) 谷口治達『坂本繁二郎の道』求龍堂、1968年、p.236
- 27) 柳田聖山「解題」『十牛図』ちくま学芸文庫、1992年、p.289
- 28) 『碧巖録(中)』岩波文庫、1994年、pp.32-33、から引用
- 29) 末本文美士編『現代語訳碧巖録(中)』岩波書店、2001年、p.30
- 30) クルト・ブラッシュ『禅画と日本文化』木耳社、1975年、p.53
- 31) これには異説がある。森田省念は以下のようなエピソードを紹介している。禅と念仏の親和性も伺えて興味深い。

或る人がこの掛軸〔竹田黙雷自画自賛《達磨図》〕を見て、「これは珍しい賛ですな、これは黙雷さんですな」と云うて黙雷さんの師匠、久留米梅林寺の三生軒猷禪師が死にに「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と念仏して逝かれた、という言い伝えがあると私に知らしてくれました。これは面白いと思ってわしがたずねてやったんですね(と、老師は二通の手紙を示された。一通は老師の依頼をうけて、上田通夫博士が九州志布志大慈寺閑栖老和尚舜啓禪師に相見したずねられたその報告。他の一通は舜啓老禪師が更に上田氏へ送られたもの。)

舜啓老和尚が上田博士に答えて曰く、「私よりホンのちょっと先に梅林に来た先輩で最も信頼出来る人が次のことを云った。『三生軒老師御臨終というので、居士大姉雲水等を集めて何か禅僧らしいスバラシイことでも言って貰おうと考えた者がいて、人々を集めたところ老師はただナンマンダナンマンダと小声で仰言ばかりで、これではどうもちょっとという調子であった。そこへ黙雷様が見えて手に筆をもち老師の手に添えて遺偈を書いた。』」上田博士はかくさずに、実は長岡の森本さんから頼まれての御尋ねだと白状した。

老和尚さんが、それでは改めてハッキリした事を手紙で申し上げるとて郵送されたのが他の一通、それによると、「一件の話柄梅林門下には絶対ありません。(省念曰く、「先師に此語なし先師を謗る莫れ」と云うやっちゃ。ありませんと云うだけ、あったことになるんや。)当時在錫の道友が耳語した次第は、『黙雷管長御到着の折には三生軒老師視聴すでに謝して通常の問対も出来ず、唇皮わずかに動いて……。』(省念曰く、前の文面ではこ

---

の……が念仏になっている。禅宗やおかしいから「ナンマンダナンマンダ」を「……」に代えよったんや。」そこで管長は老師の手に筆を置き、その手を自分の手にまかせて遺偈が出来たそうだ。』右道友は他道場にて役位たりし人、転錫し来ってすでに十年に達し自他共に認むる久参の上士でした。」猷禅さんにそういうことがあったとすると、黙雷さんは猷禅さんの第一の弟子やから、ああいう賛を書くのも尤もと思われるのや。試みに『統禅林僧宝伝』第二輯下で調べてみると、「…筆硯を命じ（念曰く、「これは嘘や」）、遺偈を書して曰く、『随縁赴感、七十七年、末期一句、長剣倚天』更に一円相を画して半にして筆を擲ち、万歳を三唱し怡然として坐脱す」と。万歳って、おかしいやないですか。この時分は日本精神日本精神の頃やから選者が念仏を万歳にかえよったのですわ。（森本省念「禅界の現状とその問題（臨済宗）」西谷啓治編『講座禅(8)現代と禅』筑摩書房、1968年、pp.134-135）

- 32) 坂本繁二郎「画の質」『坂本繁二郎文集増補改訂版』中央公論社、1970年、p.102。初出は『みづゑ』1914年5月号
- 33) 柳宗悦「禅と美」『叢書禅と日本文化(1)禅と芸術Ⅰ』ぺりかん社、1996年、p.83。初出は、久松真一編『鈴木大拙博士喜寿記念論文集 禅の論攷』岩波書店、1949年

## 日本におけるピカソの受容と歴史的回顧—影響、批評、収集の軌跡

塚田美香子

### 日本におけるピカソの第二次受容(序文)

日本におけるピカソ受容の問題は、これまで当館『館報』(55～56号)に「日本におけるピカソの第一次受容」と題し、戦前の日本にパブロ・ルイス・ピカソ(1881-1973)がいつ頃、どのように紹介されて日本美術界に受け容れられてきたかを論じてきた。

20世紀初頭、ピカソはキュビズムとともに日本へ紹介されたが、その美術様式が難解なこともあって、当初支持したのは一部の前衛的傾向の画家たちだった。しかしその後、キュビズム以外のピカソの様々な芸術スタイルが紹介されるようになると、なかでもピカソの新古典主義時代に多くの美術関係者は魅了され、影響を受ける。第二次世界大戦への突入で、日本の画家たちは軍事統制下で戦争画を強いられてはいたが、ファシズムの漂う最中、《ゲルニカ》(1937年、国立ソフィア王妃芸術センター、Z.IX:65)を描いたピカソは無視できない存在だった。

戦後のヨーロッパ美術界では、マティス、ピカソらモダン・アートの巨匠たちの芸術から抽象絵画へと移行し、ミッシェル・タピエが組織する国際的美術運動のアンフォルメルや、ミッシェル・ラゴンが提唱する新エコール・ド・パリの画家たちにピカソ以後の作家として眼が向けられるようになる。一方、アメリカでは、ピカソの影響を受けたボロックなどの抽象表現主義の新しい世代の

画家が現れて、最新の芸術市場の軸がヨーロッパからアメリカへと移されていく。日本ではアンフォルメル運動に直接参加する画家や、渡米して抽象表現主義の作家と交流し、その影響を受けた画家等もある。またピカソと比較される画家として名前が挙がることの多いマティスに加えてパウル・クレーを取り上げ、クレーに注目する美術関係者が増えていく。ピカソ以後の新しい若手作家たちの台頭や、美術市場の急速な国際化、さらにはポップ・アートやヌーヴォー・レアリズム、コンセプチュアル・アートなどの新しい美術様式や概念が生まれるなかで、ピカソが過去の作家になってしまう懸念さえ出てくる。

さて、本号の「日本におけるピカソの第二次受容」では、第二次世界大戦後からピカソの晩年までの、彼の制作活動に沿って欧米での批評や美術動向を交えながら考察していきたい。戦後最初の大きな事件は、1951年に開催されたピカソ展(日本橋高島屋)であろう。ここからピカソの新たな境地である陶器や版画が紹介され、ピカソ芸術を討議する対談や座談会も美術雑誌等で組まれる。展覧会が催される度に、多くの美術関係者がピカソについて論じている。またピカソの超大作《ゲルニカ》を誘致出品させる大型のピカソ展の実現に向けての準備も進められていた。

戦後の日本でキュビズムはいかに理解されたのだろうか。これまでのように、日本の美術家たちによるピカソの豹変する造形表現を追及することだけで、ピカソを本当に捉えることができるのだろうか。H.G.クルーザー監督の美術映画<sup>1)</sup>やD.D.ダンカン撮影による写真集<sup>2)</sup>で、ピカソの近況の制作活動やピカソ秘蔵の未公開作品が紹介されるようになり、J.D.サリンジャーも短編小説<sup>3)</sup>のなかでピカソに触れている。こうしてピカソが一般に広く知られていくなかで、ピカソの新しいイメージを第二次受容のなかで浮き彫りにしたいと思う。

現在、国内では約60館近い美術館<sup>4)</sup>がピカソ作品を所蔵しているが、戦後の受け容れのルートはどうであったか。当館は《腕を組んですわるサルタンバンク》(1923年、Z.V:15)(fig.1)を1980年にサザビー・ニューヨークのオークションで購入し話題になった。当時の紙面は、「ピカソ、6億9千

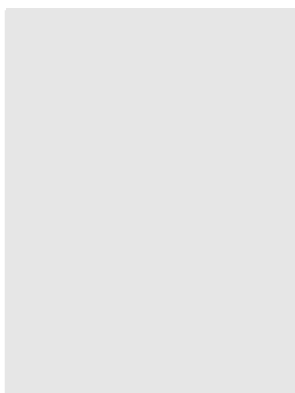


fig.1  
ピカソ 《腕を組んですわるサルタンバンク》  
1923年 プリヂストン美術館

万円「軽業師」ブリヂストン美術館が落札』『読売新聞』<sup>5)</sup>等が取り上げており、海外でも「A Picasso Goes For \$3 Million At Record Sale」『ニューヨーク・タイムズ』(5月13日)をはじめ、フランスやドイツ各国の主要な新聞<sup>6)</sup>でも報じられている。仲介をした山本進氏が当時を振り返り、オークションでの緊張と感動を臨場感をこめた文章で、『コレクションの新地平』(昨年当館で開催した展覧会図録)に記している<sup>7)</sup>。また日本企業が一時所有していたピカソの青の時代の代表作で、現在は海外へ流出した可能性の高い『ピエレットの婚礼』(1905年、Z.I.212)は、1990年に横浜美術館で展示公開<sup>8)</sup>されたこともあり、まだ我々の記憶に新しい出来事である。このようにピカソ没後の現在でも、なお日本におけるピカソの受容は様々な形をとって継続しているのである。

戦後の日本には世界の美術情勢を知らせるニュースが戦前とは比べようのないほど早く伝わってくるが、日本美術界はピカソの制作活動にどのように反応し、批評家や芸術家はいかにピカソを捉えて、次なる芸術へと引き継いでいくのかを検証したいと思う。ところで戦後のピカソに関わる文献は膨大な件数にのぼるため、順序は逆になるが、今回は美術雑誌、新聞紙面等に取り上げられた文献を中心に、彼が没する1973年迄をまとめた年表だけを掲載することにし、具体的な内容は次号の本文で論じることにした。

以下は注釈

- 1) H.G.クルーゾー監督、映画「ピカソ・天才の秘密」1955年撮影、1956年5月にカンヌ映画祭、1957年に東京で公開。
- 2) D.D.ダンカン「ピカソのピカソ」1961年、ビブリオテック・デザール社。500点以上のピカソ秘蔵の未公開作品集。
- 3) J.D.サリンジャー、繁尾久訳「ド・ドミエ・スミスの青の時代」『サリンジャー選集4巻 九つ物語』荒地出版社、1969年(初出：De Daumier-Smith's Blue Period、1953)
- 4) 2007年の調査では、ピカソの油彩、水彩、デッサン、版画、彫刻、陶器等を所蔵している全国の美術館等は58館である。所蔵先は次の通り：愛知県美術館、青山ユニマツ美術館、アサヒビール大山崎山荘美術館、荒井記念美術館、池田20世紀美術館、いわき市立美術館、上原近代美術館、大川美術館、大原美術館、おかざき世界子ども美術博物館、鹿児島市立美術館、笠間日動美術館、香川県文化会館、神奈川

県立近代美術館、川村記念美術館、北九州市立美術館、北野美術館、京都国立近代美術館、熊本県立美術館、群馬県立館林美術館、群馬県立近代美術館、国立国際美術館、国立西洋美術館、埼玉県立近代美術館、サントリー美術館、滋賀県立近代美術館、損保ジャパン東郷青児美術館、高松市美術館、玉川近代美術館、彫刻の森美術館、東京国立近代美術館、東京都現代美術館、徳島県立近代美術館、富山県立近代美術館、長崎県美術館、長島美術館、新潟市美術館、ニューオータニ美術館、姫路市立美術館、兵庫県立近代美術館、ひろしま美術館、広島県立美術館、福井県立美術館、福島県立美術館、ブリヂストン美術館、ポーラ美術館、町田市立国際版画美術館、松岡美術館、松下美術館、三重県立美術館、宮城県美術館、宮崎県立美術館、村内美術館、メナード美術館、諸橋近代美術館、山形美術館、横浜美術館、和歌山県立近代美術館。

- 5) 1980年5月13日付、各紙は次の通りである。「ピカソ7億円で落札」『朝日新聞』、『「ピカソ」6億9千万円で落札 競売史上4番目』『東京新聞』、「ピカソ、6億9千万円「軽業師」ブリヂストン美術館が落札」『読売新聞』等
- 6) 「Vents Records à New York」『ル・モンド』(5月15日)、「Das Bridgestone Museum, Tokio Ein Privatmuseum mit gemischter Sammlung」『Handelsblatt』(6月21日)
- 7) 山本進「慧眼の収集家 石橋幹一郎」『コレクションの新地平 20世紀の息吹』ブリヂストン美術館、2008年、pp.118-119
- 8) この作品が出品された展覧会は「バルセロナ特別美術展 20世紀の巨匠ピカソ、ミロ、ゴンサレス」(バルセロナ&ヨコハマシティ・クリエーション実行委員会、1990年、cat. no. 7)で会場は横浜美術館である。

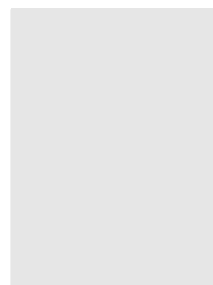
日本におけるピカソの受容略年表(1946-1973年)  
は次頁より掲載



年代	月	日本人のピカソ言及、関連事項 ◇は出典先 ○は日本近現代美術関連 ◎は一般事項	ピカソ関連事項 ○は西洋美術関連 ◎は一般事項
1946年 (昭和21)	9月  々	末松正樹 バリ解放後最初のサロン・ドートンヌにピカソの作品が展示され、フランス絵画の革命的意欲を示したと述べる。◇「現代フランス繪畫」『みづゑ』no.493 岡鹿之助、大兼実、大久保泰、末松正樹、田近憲三 ピカソのサロン・ドートンヌ出品、共産党入党などについて。◇「最近のフランス美術界を語る(座談会)」『みづゑ』no.493 ○文部省主催第1回日本美術展覧会(日展) ◎日本国憲法公布	2～3月、パリの国立近代美術館で開催された「芸術とレジスタンス展」に《納骨堂》《スペイン人への記念碑》を出品する。4月下旬、フランソワーズ・ジローと同棲を始める。8月、アンティープ美術館学芸員のロミユアル・ドル・ド・ラ・スシェールから館内に制作用スペースを提供され、制作する。
1947年 (昭和22)	5月  7～8月	和田定夫 ピカソをめぐる大問題になった1945年秋のロンドンで開かれた現代フランス絵画展について。◇「ピカソに就いて」『アトリエ』no.248 瀧口修造 ピカソと英国詩人 S. スペンダーについて。◇「最近のピカソとキリコ」『アトリエ』no.250(7、8月号) ○「前衛美術会」結成、日本美術会協会主催の「第1回アンデパンダン展」開催	5月15日、フランソワーズとの間に息子クロードが生まれる。6月、フランソワーズとクロードを連れて、ゴルフ＝ジュアンへ行く。8月、ヴァロリスのマドウラ陶房、ジョルジュ・ラミエの窯で陶芸を始める。
1948年 (昭和23)	2月  4月  9月  9～10月  々  10月  11月  々  11月23日	長谷川三郎 アメリカの抽象絵画へのピカソの影響を論じる。◇「新芸術」『みづゑ』no.508 益田義信 ピカソの戦後の近況などについて。◇「ピカソ」『美術手帳』no.4 ピカソの製陶紹介 海外ニュースでヴァロリスでのピカソの陶器制作について紹介する。◇「海外ニュース 製陶に熱中するピカソ」『美術手帳』no.9 土方定一 欧米で評判のピカソを例に取り上げ、日本には青年美術家の良心の柱となる作家がいないと懸念する。◇「通貨及び良心としての美術」『みづゑ』no.515(9、10月合併号) 宮坂勝 ピカソの裸婦立像の構成について。◇「フォルムの問題の中から－ピカソ・ドランを例にしつつ」『みづゑ』no.515(9、10月合併号) ピカソの話題 海外ニュースでピカソが8月ワルソーで開催された平和会議に出席したことを紹介する。◇「海外ニュース ピカソが世界の平和評定」『美術手帳』no.10 長谷川三郎 ピカソ論の最後に「私はピカソを好きになりつつある」と述べる。◇「ピカソ雑記」『みづゑ』no.516 柳亮 二科と新制作派の展評で「ピカソ模様のアロハシャツを着こんで得意がっている」と批評する。◇「秋の展覧会総評－9月の部」『みづゑ』no.516 ピカソの話題 ゴルフ＝ジュアンで生活するピカソに対して、土地の陶工師がピカソを排撃する陶器を作り、人気を呼ぶ。◇「ピカソ排撃運動起る」『朝日新聞』11月23日 ○『美術手帳』創刊	ベルギーの映画監督ポール・アザールがヴァロリスとアンティープのピカソ美術館で記録映画「ピカソ訪問」を撮影制作する。8月25日、国際平和会議に出席するため、ポール・エリュアールとポーランドのヴロツワフ、クラクフ、アウシュヴィッツを訪れる。9月、ポーランド共和国大統領から勲章を授与される。
1949年 (昭和24)	1月  々  々  々  々  々	梅原龍三郎 モンマルトルのピカソを訪問した頃のことを回想する。◇「滞欧雑談」『美術手帳』no.13 三雲祥之助 ピカソの《女と猫》(1941年)について、原始的なフォルムと近代的な色彩感覚で構成されていると評する。◇「作品解説」『美術手帳』no.13 瀧口修造 ピカソのアンティープ生活や、ロシアのピカソ批判について。◇「戦後のピカソと制作」『アトリエ』no.264 斉藤義重 ピカソの作品に見られるヒューマニティについて。◇「ピカソとヒューマニティ」『アトリエ』no.264 和田定夫 今年の二科展にピカソにそっくりの作品が出ていることについて。◇「ANTIPOLIS」『アトリエ』no.264 福沢一郎、吉川逸治、植村鷹千代 ピカソ芸術について、立	パリで開かれた国際平和会議のポスターに鳩を描いたピカソのリトグラフが使用される。4月19日、フランソワーズとの間に娘が生まれ、ポスターの「平和の鳩」にちなんで、パロマ(スペイン語で鳩を意味する)と名付ける。

	2月	体派、シュルレアリスム、ピカソの豹変や限界について討論する。◇「ピカソと現代絵画（鼎談）」『アトリエ』no.264	
	4月	水谷乙吉 製陶するピカソは本質的形体を破壊することをやっていないと述べる。◇「ヴァローリスのピカソ」『アトリエ』no.265	
	5月	瀧口修造 ピカソの陶器に描かれた鳥獣魚介はアンティープの「生きる喜び」の世界であると述べる。◇「ピカソの陶器」『美術手帳』no.16	
	5月	荻須高德 パリの現代美術館を紹介し、ピカソの作品の額装や寄贈について述べる。◇「バリ特信 バリの現代美術館」『美術手帳』no.17	
	〃	柳亮 ピカソの《室内》の作品について。◇「絵の秘密 ピカソによる絵画の解体と再構成」『美術手帳』no.17	
	6月	今泉篤男 ピカソの作品には美術の慣用の言語を阻もうとする一種の意地悪さがあると述べる。◇「ピカソの「意地悪さ」」『アトリエ』no.269	
	8月	須磨彌吉郎 ピカソこそスペイン画家中の最もスペイン的な人物であると述べる。◇『スペイン芸術精神史』みすず書房	
	10月	岡本太郎 ピカソの世代の芸術家の限界について述べる。◇「ピカソ芸術の表裏」『アトリエ』no.273	
	〃	瀧口修造 ピカソの最近の詩（『ヴェルヴ』特集号に発表）について。◇「ピカソの詩」『アトリエ』no.273	
	〃	和田定夫 ピカソの東洋性や、ピカソに関する文献について。◇「ピカソ雑記」『アトリエ』no.273	
	〃	江川和彦 ピカソの作品とジョージ・キープスの「視覚言語」という原理との相互関係について。◇「近代絵画の要素としての光と色」『アトリエ』no.273	
		○「第1回読売アンデパンダン展」開催	
1950年 (昭和25)	3月	高田博厚 世界平和会議のピカソの鳩のポスターに墨絵的感覚が見られると述べる。◇「この頃・2」『みづゑ』no.533	10月、イギリスのシェフィールドで開催される第2回国際平和会議に出席する。
	〃	元木恵 ピカソが描いたサバルテスの肖像画について。◇「ピカソの描いた五つの顔」『アトリエ』no.278	る。11月、レーニン平和賞を受賞する。
	3月5日	ピカソの話題 アメリカはピカソら世界平和擁護大会の代表が共産党員であるという理由で入国を拒否した。◇「米ピカソ入国拒否」『朝日新聞』3月5日	
	4月	松谷彊 東欧諸国でのピカソの評価について。◇「ブルガリアにおける現代フランス美術」『BBBB』	
	7月	長谷川三郎 アメリカの新しい作家の間では、パウル・クレイの方がピカソ以上の影響力を示しつつあると述べる。◇「訪問記 イサム・ノグチと会う」『美術手帳』no.31	
	〃	荻須高德 フランスよりもアメリカや日本の方がマティスやピカソの近作紹介が早いと述べる。◇「フランス通信 希望を求めて」『美術手帳』no.31	
	10月	岡本太郎 ピカソのデッサンを見るときに考慮しなければならないことについて。◇「ピカソのデッサン」『アトリエ』no.285	
		○『芸術新潮』創刊	◎6月25日、朝鮮戦争勃発
1951年 (昭和26)	1月	益田義信 ピカソの陶器は今までの彼の芸術の結果であると述べる。◇「陶工ピカソ」『芸術新潮』no.13	1月18日、《朝鮮の虐殺》を制作する。
	3月	ピカソの陶器展初公開 上野松坂屋で文藝春秋新社主催によるピカソ陶器石版画展が開催され、ピカソの陶器が初公開される。	この作品は5月のパリのサロン・ド・メに出品される。6月25日、ヴァンスにマティスの装飾したロザリオ礼拝堂が献堂され、式典が行われる。ピカソは寝たきりのマティスを見舞う。9月16
	3月18日	天声人語 陶器の既成概念からピカソの陶器について評する。	

年代	月	日本人のピカソ言及、関連事項 ◇は出典先 ○は日本近現代美術関連 ◎は一般事項	ピカソ関連事項 ○は西洋美術関連 ◎は一般事項
	4月	◇「天声人語」『朝日新聞』3月18日 今泉篤男 ピカソにとっては、絵のことを言葉で話しても面白くないことは事実だと述べる。◇「ピカソの言葉」『アトリエ』no.291	日、ヴァロリスで《夜景》を描く。
	5月	佐藤敬 ピカソの陶器展が開催されたことについて。◇「ピカソの陶器」『みつゑ』no.548	
	〳	福島繁太郎 ピカソの風景画について《生木と枯木のある風景》を例に上げて論じる。◇「ピカソの風景画」『別冊文藝春秋』21号	
	〳	益田義信 「鐵齋、梅原(龍三郎)、ピカソ何れの場合も芸術が生活であり、生活が芸術なのである」と述べる。◇「芸術と遊び」『別冊文藝春秋』21号	
	〳	青山二郎 ピカソの陶器展に対する批評について提言する。◇「ピカソの陶器」『芸術新潮』no.17	
	6月	菊池一雄 ピカソの彫刻は素朴で健康な原始芸術の香りがすると批評する。◇「ピカソの彫刻」『芸術新潮』no.18	
	7月	福島繁太郎 ピカソの初期時代の評伝を紹介する。◇「若きピカソ」『芸術新潮』no.19	
	7～9月	吉川逸治 ヴァロリスのピカソを訪問する。◇「ピカソに会う」『みつゑ』no.558、1952年	
	8月	ピカソ作品展 日本橋高島屋で読売新聞社主催によるピカソ展が開かれる。大阪、京都の市立美術館、大原美術館へ巡回。出品された油彩16点には《頭蓋骨のある静物》(現在、大原美術館所蔵)や《花束となす》(《茄子》のこと、現在ブリヂストン美術館所蔵)などが含まれる。◇「志水楠男と南画廊」「志水楠男と南画廊」刊行会、1985年	
	8月25日	ピカソの夕 ピカソ芸術について富永惣一、福沢一郎、M.ピアチエンチニ、益田義信らが講演する。(読売ホール)	
	8月26日	大久保泰 日本画壇へのピカソの影響を批評する。◇「ピカソと日本画壇」『読売ウィークリー』8月26日	
	9月9日	野口彌太郎 ピカソ展を見て、ピカソの近作にはスペインの伝統が続いていると述べる。◇「ピカソの伝統」『読売ウィークリー』9月9日	
	〳	岡本太郎 ピカソに挑み、乗り越えることが我々の直面する課題であると宣言する。◇「ピカソの藝術」『アトリエ』no.298(臨時増刊)	
	〳	麻生三郎 ピカソについて「ピカソは合理主義の権化」と述べる。◇「健康なピカソ」『自由美術』第9号	
	〳	駒井哲郎 ピカソの1946～49年制作の石版画について、心をゆすぶられると述べる。◇「ピカソの石版画」『芸術新潮』no.21	
	〳	益田義信 ピカソ芸術における「物(オブジェ)」の持つ意味について論じる。◇「ピカソと「物(オブジェ)」」『芸術新潮』no.21	
	〳	川喜多長政 カンヌ映画祭を機に、ヴァロリスのピカソの陶器工房を見学し、印象を述べる。◇「欧州映画人と語る」『芸術新潮』no.21	
	〳	福島慶子 アンティープの考古館がピカソ美術館になってしまったことに対する地元の民衆の批判を述べる。◇「アンティープとピカソ美術館」『芸術新潮』no.21	
	〳	大久保泰 ピカソの初期から現代(当時)までの評伝を述べる。◇「目で見えるピカソの歴史」『芸術新潮』no.21	



「ピカソ展」図録(1951年)、東京都現代美術館蔵

10月	山口蓬春、福島繁太郎、岡本太郎、倉林正蔵 1938年以降の作品を中心にしたピカソ展を批評する。◇「座談会 ピカソ展」『芸術新潮』no.22
✕	福田恆存 アンチ・ピカソの立場からピカソ展を批評する。◇「只今ピカソ休憩中」『芸術新潮』no.22
✕	高見順 共産党員のピカソの絵がコミュニスト画家の絵というものかどうか疑問であると述べる。◇「只今ピカソ礼讃中」『芸術新潮』no.22
✕	佐藤敬 ピカソ展に出品された挿絵本について評する。◇「ピカソのさしゑ」『芸術新潮』no.22
✕	勝見勝 ピカソの作品には、イメージの重量感と密度が迫ってくると述べる。◇「ピカソのリトグラフィ」『アトリエ』no.299
✕	柳亮 順応するマティスに対して、抵抗するピカソについて。◇「抵抗するピカソ」『みづゑ』no.554
✕	福沢一郎 ピカソから啓示として受けるものは、作品の模倣でなく反逆精神の体得であると述べる。◇「ピカソのグワッシュ、クレヨン、石版画」『みづゑ』no.554
✕	長谷川三郎 老ピカソと陶器のつながりの中にある深い意味を見逃してはならないと述べる。◇「陶工ピカソ・雑感」『みづゑ』no.554
✕	今泉篤男 ピカソは彫刻にあっても絵画的であると述べる。◇「ピカソの近作彫刻」『みづゑ』no.554
10月15日	小穴隆一 ピカソ展に対する女性の反応についての身辺雑記。◇「ピカソを嫌った人」『東京タイムズ』10月15日
11月	福沢一郎 「ピカソ展」(読売新聞社、日本橋高島屋)で見たピカソ作品の技法について。◇「ピカソの技術」『みづゑ』no.555
✕	川島理一郎 アンティープ美術館のピカソ作品について述べる。内部のスケッチをする。◇「アンチープ」『みづゑ』no.555
✕	サトウ・ハチロー 青の時代以降のピカソは親しめない画家だと述べる。◇「庶民のピカソ感」『芸術新潮』no.23
11月12日	土方定一 ピカソ展に出品されている《女の顔》(現在ブリヂストン美術館蔵)について評する。◇「優美な名画『女の顔』」『読売新聞』11月12日
✕	碓伊之助 ピカソ展に出品された《肘掛椅子の女》《鳩》《茄子と花》について評する。◇「東京のピカソ展」『読売新聞』11月12日
✕	富永惣一 ピカソは70歳という老齢に沈まず、創造の営みをつづける造型の鬼というべき存在であると述べる。◇「巨匠ピカソの歩んだ道」『読売新聞』11月12日
12月	徳大寺公英 佐藤敬の《ピアノと子供》の作品とピカソとの類似性を取り上げ、新制作派全体の性質を述べる。◇「秋季展覧会評」『みづゑ』no.556
✕	富永惣一 ピカソの《女の顔》(ブリヂストン美術館蔵)について述べる。◇「絵画的プロムナードブリヂストン美術館開館に際して」『みづゑ』no.556
✕	今田出海、福田恆存、三島由紀夫、河盛好蔵 マティス展、ピカソ展による影響について討議する。◇「1951年の芸術界 座談会」『芸術新潮』no.24
✕	佐藤敬 「ピカソ訪問」、「ルノワールからピカソまで」の美術映画について述べる。◇「映画・ピカソ訪問」『芸術新潮』no.24

年代	月	日本人のピカソ言及、関連事項 ◇は出典先 ○は日本近代美術関連 ◎は一般事項	ピカソ関連事項 ○は西洋美術関連 ◎は一般事項
	12月	武者小路実篤、徳川夢聲 ピカソに会ったことなど回想する。 ◇「対談 武者小路実篤素描」『芸術新潮』no.24 ○「現代フランス美術展」(1950年のサロン・ド・メの日本展)開催 実験工房結成 神奈川県立近代美術館開館	
1952年 (昭和27)	2月	梅原龍三郎、安井曾太郎、福島繁太郎 安井はピカソの晩年の作品に感心すると述べる。◇「西洋絵画史(座談会)」『芸術新潮』no.26	2～3月、ニューヨークのカート・ヴァランティン画廊で、ピカソ展が開催される。4月、ピカソは、ヴァロリスにある古い礼拝堂を飾るために、戦争と平和の2枚の板絵の構想を練る。10月下旬、フランソワーズとの関係が悪化する。11月18日、友人で詩人のポール・エリュアールが死去する。
	3月	植村鷹千代 前衛的美術家たちのピカソ観の変化について。 ◇「1951年のピカソ」『芸術新潮』no.27	
	々	山尾薫明 ピカソの抽象模様や陶器、彫刻などの表現様式へのインカ出土品の影響について。◇「ピカソとインカの壺」『芸術新潮』no.27	
	々	植村鷹千代 フランスの若手作家たちのピカソ観について。 ◇「ピカソへの課題」『アトリエ』no.304	
	5月	瀧口修造 抽象絵画の解説のなかでピカソの光を使って描いたデッサンについて触れる。◇「アブストラクト時代」『芸術新潮』no.29	
	6月	谷口雅彦 三角形の構成による技法を発明した日本画家の谷角日沙春について紹介する。◇「日本画のピカソ」『芸術新潮』no.30	
	8月	大島辰雄 ピカソの《ゲルニカ》と丸木・赤松夫妻の《原爆の図》とを比較し、ピカソの《平和の顔》に対する作品はなにかについて。◇「ピカソ「平和の顔」に寄せて」『みづゑ』no.564 ○ブリヂストン美術館開館 国立近代美術館開館	
1953年 (昭和28)	1月	安倍公房 今までピカソの変貌の底をつらぬく明快なピカソ論がないと述べる。◇「ピカソのリアリティ」『アトリエ』no.314	1月、パリの国立近代美術館で「1907-14年のキュビズム展」が開かれ、《アヴィニヨンの娘たち》が1937年来初めてヨーロッパで公開される。3月5日、スターリン死去。アラゴンがピカソに『レ・レットル・フランセーズ』誌に掲載するスターリンの肖像画を依頼する。同誌(3月12-19日)に載ったこの肖像画に対し、フランス共産党はピカソに抗議する。5～7月、ローマ国立近代美術館で、大回顧展が開かれる。
	4月	植村鷹千代 丸木位里と赤松俊子の共同作《原爆の図》とピカソの《朝鮮戦争》を比較し、戦争表現の違いについて述べる。◇「近代性とクリマ」『みづゑ』no.572	8月、ベルビニャンでジャックリース・ロックと出会う。9月末、フランソワーズは二人の子供クロードとパロマを連れてピカソのもとを去る。9月、ローマの大回顧展は、ミラノのパラッツォ・レアルに会場を移し、《ゲルニカ》《納骨堂》《朝鮮の虐殺》《戦争と平和》も追加される。11月末から翌年2月初めまで「画家とモデル」を主題に一連のデッサン180点を制作する。
	々	関口俊吾 パリの国立近代美術館で開催された「キュビズム展」でピカソの《アヴィニヨンの娘たち》が30年ぶりにパリへ来たこと知らせる。◇「春のパリ美術展1953」『みづゑ』no.572	
	5月	神原泰 ピカソの青の時代について、アポリネールや、批評家、研究者の論考を引用して論じる。この時代の主要作品40点を列挙する。◇「ピカソ“青の時代”についてーピカソ青の時代特集」『みづゑ』no.573	
	7月	岡本太郎 ヴァロリスのピカソを訪問し、ピカソとの対話を紹介する。◇「ピカソに喰いさがる」『芸術新潮』no.43	
	々	柳亮 日本の現代美術をグローバルな視点で論じ、ピカソを超える作家としてビュッフェに注目する。◇「日本国際美術展 擬似コンクールと日本人のたちうち」『美術手帳』no.71	
	々	三雲祥之助 日本国際美術展に出品されたピカソの《青いコルサージュの女》(1942年)について評する。◇「フランスとメキシコの作品」『美術手帳』no.71	
	8月	柳亮、関口俊吾 5月にパリのルイズ・レリス画廊で開かれたピカソの1950～53年の近作展について。柳はピカソの芸術には「聖なるものと邪なるもの」が共存していると述べる。◇「ピカソ近作展より」、『フランス通信』『みづゑ』no.576	
	8月24日	富永惣一 ピカソ《茄子》(ブリヂストン美術館蔵)を自在な	

		<p>形象の面白味をさらさらと示していると評する。◇「名作鑑賞ブリヂストン美術館から」『朝日新聞』8月24日</p>	
1954年 (昭和29)	9月  々	<p>北大路魯山人 関口俊吾と共にピカソを訪問し、ピカソの処世術に興味を抱く。◇「ピカソ会見記」『芸術新潮』no.57</p> <p>岡本太郎 ピカソ大回顧展(ローマ)で見た《戦争と平和》について解説する。◇「ピカソの戦争と平和」『芸術新潮』no.57</p> <p>○具体美術協会結成</p>	<p>4月、シルヴェット・ダヴィッドをモデルに40点ほどのデッサンや油彩画を描く。11月末から、ドラクロワの《アルジェの女たち》を下敷きにしたシリーズを制作する。</p> <p>○11月3日、マティス死去</p>
1955年 (昭和30)	1月  々 々 々 々 5月 7月 8月 9月 々 12月 々	<p>東郷青児 「ピカシズムのあの非情なエネルギーには受け止めることの出来ない冷たさがあった」と述べる。◇「ダダイズムと未来派」『美術手帳』no.90</p> <p>伊原宇三郎 留学中、一時期ピカソにまるで憑かれたようになったと述べる。◇「ピカソに憑かれる」『美術手帳』no.90</p> <p>山口長男 留学中、ローザンベール画廊へピカソやブラック・レジェを見に行き、元気づけられたと述べる。◇「プリミティブから近代造形へ」『美術手帳』no.90</p> <p>岡本太郎 留学中、ピカソの抽象作品を見て抽象画を描き始めると述べる。◇「古い殻を脱ぎすてる」『美術手帳』no.90</p> <p>今井俊満 ピカソら20世紀絵画、抽象絵画を経て、今後いかに受け継がれ発展するかが課題であると述べる。◇「戦後のパリに生きる」『美術手帳』no.90</p> <p>岡本謙次郎『ヴェルヴ』に紹介された180点のデッサンについて。◇「ピカソ・人間喜劇」『芸術新潮』no.61</p> <p>宇佐美英治 ピカソが1953～54年にかけて描いた「画家とモデル」のシリーズのデッサンについて論じる。◇「ピカソの近作デッサン」『みづゑ』no.598</p> <p>東郷青児 ピカソのめまぐるしい飛躍について論じる。◇「企業家ピカソ」『芸術新潮』no.67</p> <p>海藤日出男、植村鷹千代、徳大寺公英 フランスでは、ピカソ、レジェが頂点にあることについて討議する。◇「座談会・ピカソを乗り越えるもの」『美術手帳』no.98</p> <p>今井俊満「我々はピカソから学んだ自由さとその前衛精神をうけつぎ発展させていかねばならない」と述べる。◇「20世紀に於けるピカソの位置」『美術手帳』no.99</p> <p>神原泰 パリの装飾美術館で開催されたピカソの1900～55年までの大回顧展と国立図書館でのピカソの版画の回顧展について述べる。◇「パリにおけるピカソの二大回顧展と本年度の作品について」『みづゑ』no.602</p> <p>ピカソの近況 ヴァロリスで「ピカソとヴァロリスの陶芸家展」が開催されたことを紹介する。◇「ヨーロッパの話題」『美術批評』</p> <p>瀧口修造 エンメルが撮った映画「ピカソ」について紹介する。◇「美術映画雑誌」『美術批評』</p> <p>○12月、安井曾太郎死去</p>	<p>2月11日、妻オルガの死去。6～10月、パリの装飾美術館で、「ピカソの絵画：1900-1955年」大回顧展が開かれる。</p> <p>夏、ニュースの映画撮影所ヴィクトリース・スタジオで、アンリ=ジュルジュ・クルーズー監督により映画「ピカソ天才の神秘」が制作される。映画のなかで《ラ・ガルーブの海辺》と題する油彩画を2点描く。カンヌに、ラ・カリフォルニー荘を購入する。</p> <p>○1月、タンギー死去、8月、レジェ死去</p>
1956年 (昭和31)	3月  5月  々	<p>岡本太郎 今日の芸術の問題としてピカソが果たした役割を振り返る。◇「ピカソ」『芸術新潮』no.75</p> <p>藤本東一良 昨年パリで開催されたピカソ展（装飾美術館と国立図書館）では三種類のポスターが街に張り出されていたと述べる。◇「フランスの展覧会ポスターと招待状・カタログ」『みづゑ』no.610</p> <p>瀬木慎一 ピカソの《戦争》と《平和》の二対の作品について、ヨーロッパ絵画の主題「嬰兒虐殺」を想起すると述べる。◇「戦争と平和」『みづゑ』no.610</p>	<p>2月、《海辺の二人の女》を制作する。</p> <p>9月、「水浴者」のテーマに着手する。絵のなかの人物たちを木板を使って彫刻にし、のちにブロンズで鋳造する。</p> <p>10月25日、ヴァロリスのマドゥーラ陶房でピカソ75歳の誕生日を祝う。</p>

年代	月	日本人のピカソ言及、関連事項 ◇は出典先 ○は日本近現代美術関連 ◎は一般事項	ピカソ関連事項 ○は西洋美術関連 ◎は一般事項
	9月	小林秀雄、吉川逸治 映画を通してピカソの芸術を理解することについて。◇「映画「ピカソ・天才の秘密」対談」『芸術新潮』no.81	
	11月	福島繁太郎らピカソ訪問 福島は梅原龍三郎、香月泰男らとカンヌに住むピカソを訪問する。◇『戦後洋画と福島繁太郎』山口県立美術館、1991年 ○「世界・今日の美術」展(日本橋高島屋)、アンフォルメル の紹介	
1957年 (昭和32)	2月	鶴岡政男 ピカソの陶板画には東洋に関心をもつ最近の彼の傾向が見られると述べる。◇「ピカソの陶板画」『芸術新潮』no.86	3～4月、パリのルイズ・レリス画廊で、ピカソの1955～56年に制作された作品が展示される。5～9月、ニューヨーク近代美術館でピカソの生誕75年展が催される。この展覧会は、シカゴ、フィラデルフィアへ巡回する。8月、ラ・カルフォルニーでベラスケスの《ラス・メニーナス》をもとにした連作を制作する。秋、ユネスコからパリのユネスコ本部のラウンジを飾る壁画を依頼される。
	ク	梅原龍三郎 福島繁太郎夫妻、香月泰男らとカンヌのピカソを訪問したことについて。◇「婦朝放談」『芸術新潮』no.86	
	ク	船戸洪 パリ便は“ピカソの時代は終わった”“サロン・ド・メは過去のサロンと化した”と伝えた述べる。◇「パリで売れる日本人画家」『芸術新潮』no.86	
	4月	宇佐美英治 ピカソとレジェは対照的な存在であると述べる。◇「ピカソとレジェ」『みづゑ』no.621	
	5月	ピカソ版画展 神奈川県立近代美術館でピカソの版画展が開催され、石橋美術館など10カ所を巡回。ブリヂストン美術館では9月に開催する。	
	ク	東野芳明 ピカソの《食事》(1953年)には、素裸かな人間の生命力のドラマがあると述べる。◇「原色版解説 ピカソ《食事》」『美術手帳』no.125	
	ク	針生一郎、岡本太郎、羽仁進 ピカソは日本の現状では早すぎる、赤旗ならばわかるということについて討議する。◇「座談会 美術と大衆」『美術手帳』no.125	
	ク	ピカソの近況 パリのセーヌ左岸の画廊で開催されたピカソの回顧展に“ジエモ”技法で制作した作品が出品された。◇「海外ニュース ピカソの“ジエモ”による回顧展」『美術手帳』no.125	
	5月22日	瀧口修造 わからない絵の代表のようなピカソ、親しみ深い人間的なピカソ、大衆の手の届かないピカソ…いろいろなピカソがあると述べる。◇「ピカソの魅力 版画展と映画をめぐって」『朝日新聞』5月22日	
	5月23日	難波田龍起 ピカソの作品にはユーモラスな面が大いにあって人を解放に向かわせるが、どこまでも人間との格闘が続くと述べる。◇「ピカソ版画展をみて 石版画を作り変えた力量」『東京新聞』5月23日	
	6月	H.G.クルウゾー 『芸術新潮』と川喜多氏の依頼により、映画「ピカソ・天才の秘密」の制作について述べる。◇「カメラの前のピカソ」『芸術新潮』no.90	
	6月6日	中原佑介 ピカソは巨匠だが名匠とは言えないと批評する。◇「ピカソ版画展をみる」『読売新聞』(6月6日夕刊)	
	6月18～22日	ピカソ版画展から 版画展の紹介と出品作品の《渦巻き髪の子》《イタリアの女》《顔》《青春》の解説。◇「ピカソ展から①～④」『朝日新聞』6月18日、19日、21日、22日	
	7月	ピカソ・ブーム ピカソ版画展の開催やピカソの映画が封切られ、ピカソ・ブームとなる。「ピカソにおくる児童画」募集の社告が毎日新聞に載る。◇「展望台 ピカソ・ブーム」『美術手帳』no.128	
	ク	土方定一、柳亮、徳大寺公英、針生一郎 日本人は目の前で	

	7月	<p>ピカソが絵を描いているという実感がないと批評する。◇「座談会 世界の現代美術における民族性と風土の問題 第4回 日本国際美術展を観て」『美術手帳』no.128</p> <p>瀬木慎一 世界的な巨匠ピカソはロルジェ、ビュッフェ、ミノーラの「反ピカソ」のスローガンとなっていると述べる。</p> <p>◇「世界の美術批評家をめぐる三章」『美術手帳』no.128</p> <p>久保貞次郎 ピカソ版画展の展評で、日本の美術館が100点くらいのピカソの版画を今のうちに収集すべきだと述べる。</p> <p>◇「ピカソの版画」『美術手帳』no.128</p> <p>ピカソの近況 ルイズ・レリス画廊でピカソの76歳の誕生記念展が催され、ピカソがまた新しい道にふみこんだと展評する。◇「海外ニュース ピカソ76歳の誕生記念展」『美術手帳』no.128</p>	
	8月	<p>土方定一 4、5年前にパリのルイズ・レリス画廊で佐藤敬とピカソの版画展を見て以来、ピカソの版画に魅了され、ピカソの版画を「生命的な緊張感に満たされている」と述べる。</p> <p>◇「ピカソの版画」『みつゑ』no.625</p> <p>針生一郎 ピカソの《二人の裸婦》を「力感にみちたデフォルマションが、みごとな均衡を生みだしている」と述べる。</p> <p>◇「今年のサロン・ド・メ」『みつゑ』no.625</p>	
	9月	<p>小川マリ子 ピカソの《絵の中の果物》(1908年)はセザンヌ風で親しみやすいと述べる。◇「原色版解説 ピカソ《絵の中の果物》」『美術手帳』no.130</p>	
	10月	<p>針生一郎、今井俊満、山口勝弘 今井はパリ留学中(1952年)、日本的なものを取り去り、西欧の合理主義精神に触れたいと考える。ピカソの影響を受ける。◇「座談会 アンフォルメルをめぐって 西洋と東洋・伝統と現代」『美術手帳』no.131</p>	
	11月	<p>ピカソの近況 NBC テレビに出演するピカソについて。◇「海外ニュース テレビに出演するピカソ」『美術手帳』no.133</p>	
	12月	<p>ピカソの近況 ピカソ76歳の誕生記念展がルイズ・レリス画廊で催される。◇「海外の話題」『美術手帳』no.134</p> <p>瀧口修造 ピカソが手がけたビュッフォンの『博物誌』の版画について解説する。◇「ピカソの素描」『芸術新潮』no.96</p> <p>○梅原龍三郎、芸術院会員を辞退する。</p>	
1958年 (昭和33)	1月	<p>改田昌道 ピカソの絵画制作の様子を漫画で紹介。◇「ピカソ 天才の秘密」『美術手帳』no.136</p>	1月29日、ユネスコの壁画のための最終的な習作を行う。3月29日、ヴァロリスの公立学校の校庭で、ユネスコの壁画の贈呈式が行われる。9月、エクス=アン=プロヴァンス近くに建つヴォーヴナルグ城を購入する。
	2月	<p>江原順 ピカソとアポリネールの出会いについて。◇「アポリネールと画家たち」『美術手帳』no.136</p>	
	3月	<p>白井浩司 サルトルのキュビズム言及について。◇「J.P. サルトル 実在主義的美術観」『美術手帳』no.138</p>	
	4月	<p>小林秀雄、吉川逸治 ピカソとクレーとの比較、ピカソの次にくるものなどを述べる。◇「ピカソ以後(対談)」『芸術新潮』no.100</p>	
	5月	<p>丸木俊子 1956～58年にかけてのロシア美術界でのピカソの評価について述べる。◇「ソヴェットのピカソ嫌い」『芸術新潮』no.100</p> <p>ピカソの話題 カーンワイラーが英紙『オブザーヴァー』に「ピカソ語録」を載せた記事について。◇「海外の話題 ピカソの怪気炎」『美術手帳』no.140</p> <p>D.D. ダンカン カメラマンのダンカンが撮影したカンヌのピカソの日常生活を解説付きで紹介する。◇「愛するピカソ」『芸術新潮』no.101</p>	

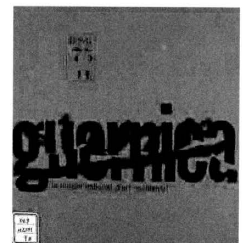


年代	月	日本人のピカソ言及、関連事項 ◇は出典先 ○は日本近現代美術関連 ◎は一般事項	ピカソ関連事項 ○は西洋美術関連 ◎は一般事項
	5月	中山公男 サークスを主題にした芸術作品のなかで、ピカソが描く道化は「人間家族」の象徴であると述べる。◇「不滅の主題 道化とサーカスの造形史」『美術手帳』no.141	
	5、7月	ピカソの話題 パリのサン=ジェルマン=デ=プレの広場におけるピカソ作のアポリネール像の記念碑建立について。◇「海外の話題 ピカソ作 アポリネール像」『美術手帳』no.141 曾根元吉 ピカソがロシア・バレエの「バラード」の舞台装飾と衣装のデザインをしたことや、ピカソの新古典主義時代、キュビズムの作風との関係について述べる。◇「ピカソからコクトオへ」『みづゑ』no.635、「舞台転換のピカソ」『みづゑ』no.637	
	6月	ピカソの話題 ロシアで初めてのピカソ研究書、フランスでのピカソの陶器展について。◇「海外の話題 ピカソの話題 二つ」『美術手帳』no.142	
	7月	大島辰雄 アラゴンのピカソ《人間喜劇》論評などについて。◇「美術思潮周辺 ルイ・アラゴン 超現実主義からく現実世界へ」『美術手帳』no.144	
	8月	瀬木慎一 カフカのピカソ批評などについて。◇「美術思潮周辺 フランツ・カフカ 表現派の絵画と不条理の作家」『美術手帳』no.145	
	9月	大久保泰 音楽を主題にした芸術作品のなかで、ピカソが描く牧神やピカソとギターについて取り上げる。◇「不滅の主題 楽器と奏者 色彩のフォルムと交響楽」『美術手帳』no.146	
	11月26日	ピカソの《母と子》 画商ローゼンバーグ(ニューヨーク)がピカソの《母と子》(Z.XXI:290、現在個人所蔵、日本)に15万2千ドル(5,472万円)の高値をつけた。◇「高値をつけたピカソの「母と子」」『朝日新聞』11月26日	
	12月	東野芳明 パリの新ユネスコ本部講堂に描かれたピカソの壁画についてのフランス人の批評を述べる。◇「新ユネスコ本部の装飾」『みづゑ』no.643	
1959年 (昭和34)	3月	高橋新吉 ピカソの《宮女》はベラスケスの《ラス・メニーナス》を聯想することによってささえられていると述べる。◇「ピカソの「宮女」」『芸術新潮』no.111	2月、ヴォーヴナルグ城に1961年春まで制作と休養の日々を過ごす。5～6月、パリのルイーズ・レリス画廊で「《ラス・メニーナス》1957年」展が開かれる。
	5、7～11月	高階秀爾ピカソ一流の剽窃について、「ピカソの剽窃」、「ピカソとモンマルトル」、「宮廷の侍女達」、「ゲルマンの誘惑」、「ラテン精神の伝統」、「戦争と平和」を論じる。◇「ピカソの剽窃」『みづゑ』no.648、650(7月号)、652～655(8～11月号)	6月5日、1941年作のドラ・マールのブロンズ像《女の頭部》が、アポリネールの記念碑としてサン=ジェルマン=デ=プレの墓地の庭に設置され、除幕式が行われる。
	8月	高階秀爾 世界各地で開かれるピカソ展を巨象を撫でる群盲にたとえる。◇「巨象と群盲 マルセユのピカソ展を見て」『美術手帳』no.161	8月、マネの《草上の昼食》をもとに作品を制作する。秋、リノカット(リノリウム版画)を実験的に試す。
	11月	三宅正太郎 加山四郎の絵画思想はピカソを見ることで根本からくつがえされると述べる。◇「加山四郎 滞欧青春賦」『美術手帳』no.106	
	12月	東野芳明 フォートリエの《人質》はゴヤの《戦禍》、ピカソの《ゲルニカ》と並べて3つめの正しい意味での「戦争画」であると述べる。◇「ピカソ以後の革命画家 フォートリエ」『美術手帳』no.165 ○国立西洋美術館開館	
1960年 (昭和35)	2月	今泉篤男、佐野繁次郎 ミロとピカソの関係について。◇「対談 ミロの芸術 造形の詩人」『美術手帳』no.169	7～9月、ロンドンのテート・ギャラリーでピカソ回顧展が開かれ、1895～

	2月	土方定一 ピカソの《ゲルニカ》を解説し、ピカソに限らず偉大な作家は時代の民衆のなかに沈潜しながら、そこから受けた精神の傷痕を記録すると述べる。◇「名画による人間の歴史」『芸術新潮』no.122	1959年にかけて制作された270点が出品される。カタログをローランド・ベンローズが担当する。
	3月	ピカソの近況 ピカソの1955年11月1日～1956年1月14日までの写生帖の複製『カリフォルニーの手帖』がセルクル・ダールから出版されることについて。◇「海外短信 ピカソの秘密をのぞかせる「手帖」」『美術手帳』no.170	
	〃	生野幸吉 ピカソの《ゲルニカ》をミュンヘンの巡回展で見て、異常な静寂に鎮されていて、別次元の空間だったと述べる。◇「モナ・リザとゲルニカ」『芸術新潮』no.123	
	5月	末松正樹、瀬木慎一 キュビストのレジェとピカソを比較する。◇「対談 レジェの芸術 ダイナミックな空間構成と未来像への確信」『美術手帳』no.173	
	6月	刀根山光人 カンヌのピカソに会う。◇「ミロ・ピカソ訪問記」『芸術新潮』no.126	
	7月	ピカソの近況 ピカソがフランス平和委員会資金のために陶皿の複製を許可したことについて。◇「手帖通信 ピカソの絵皿売り出す」『美術手帳』no.175	
	9月	ピカソの話題 ロンドンのテート・ギャラリーでピカソの大展覧会が開催され、王室一家も観覧した。◇「海外短信 ロンドンで最大のピカソ展」『美術手帳』no.178	
	10月	瀬木慎一 ロンドンの大ピカソ展についての報告。◇「話題をまいたロンドンの大ピカソ展」『美術手帳』no.179	
	〃	三雲祥之助、中山公男 ブラックとピカソのキュビズムについて。◇「対談 ブラックの芸術 解体から総合へ」『美術手帳』no.179	
	〃	20世紀フランス美術展 日仏文化交流の第2弾としてピカソ、ミロなど20世紀美術作品を紹介。国立西洋美術館、京都市美術館で開催する。	
	〃	加藤正 ピカソが新たに始めたリノリウム版画について解説し、新しい出発を開始すると述べる。◇「ピカソのリノリウム版画」『芸術新潮』no.130	
1961年 (昭和36)	1月	東野芳明 若い世代がアメリカ絵画に自国の英雄を持ったこととモダン・アートのヒーローだったピカソとの関係を述べる。◇「開拓者の扼殺をめざして」『美術手帳』no.183	3月2日、ヴァロリスでジャックリーヌと結婚する。6月、ムージャンの村近くに新しく建てられたノートル＝ダム＝ド＝ヴィ＝荘に移る。
	〃	徳大寺公英 ヨーロッパ美術界ではピカソの時代が去ったことを伝える。◇「伝統の歯車をかむ正系と異端」『美術手帳』no.183	
	〃	ピカソの話題 バリ近代美術館で1960年11月～1961年1月23日迄、「20世紀の源泉」展が開かれ、20世紀美術を形造る基礎となる1,000点もの作品が展示される。ピカソの《アヴィニョンの娘たち》も出品される。◇「海外の話題 豊かな「20世紀の源泉」展」『美術手帳』no.183	
	〃	岡本太郎、川北倫明、西脇順三郎 創造と破壊についてピカソなどの芸術を討論する。◇「座談会 伝統と革新」『美術ジャーナル』no.16	
	2月	ピカソ版画展 本間美術館	
	〃	中原佑介、瀬木慎一、向井周太郎 運動と衝突についてピカソ芸術を討論する。◇「座談会 世界のなかの日本」『美術ジャーナル』no.17	
	3月	アンティープのピカソ美術館の紹介 ◇「特集・2 アンティープのピカソ美術館」『芸術新潮』no.135	

年代	月	日本人のピカソ言及、関連事項 ◇は出典先 ○は日本近現代美術関連 ◎は一般事項	ピカソ関連事項 ○は西洋美術関連 ◎は一般事項
	5月	ピカソ夫妻のグラフィア紹介 ◇「特集・2 ピカソの幸福な日」『芸術新潮』no.137	
	6月	小山田二郎、東野芳明 タマヨのピカソからの影響について。◇「対談 ルフィーノ・タマヨ 不信への挑戦」『美術手帳』no.190	
	8月	瀬木慎一、金子真珠郎 ポロックへのピカソの《ゲルニカ》の影響など。◇「対談 ポロック 複眼の視覚 偉大なる発見者」『美術手帳』no.192	
	ク	土方定一 画商ヴォラールとピカソについて。◇「近代画商の誕生」『美術手帳』no.192	
	ク	岡本太郎 ピカソの意味について。◇「作家の記憶 生き、仕事をしていく意味」『美術ジャーナル』no.23	
	9月	土方定一 ピカソと画商カーンワイラーについて。◇「呪術師 職人 美術家 ピカソの画商」『美術手帳』no.193	
	10月	ピカソ全貌シリーズ第1回版画展 アート・フレンド・アンシエーション主催で日本橋・白木屋、京都、大阪を巡回。	
	11月	久保貞次郎 ピカソの初期のエッチングから近作のリノリウムの版画について。◇「ピカソの版画の見方」『みづゑ』no.680	
	ク	瀬木慎一 ピカソの版画の愛と暴力のテーマについて論じる。◇「愛と暴力」『みづゑ』no.680	
	ク	大岡信 ピカソの版画から詩作する。◇「ピカソのミノタウロス」『みづゑ』no.680	
	ク	岡本太郎 ピカソは自分にとって「芸術家」であり、「画家」ではないと述べる。◇「ピカソの魅力」『みづゑ』no.680	
	ク	神彰 ピカソの全貌版画展について。◇「私のピカソ観」『みづゑ』no.680	
	ク	駒井哲郎 ピカソはもともと現在の混沌とした抽象絵画とは無縁の画家と述べる。◇「技術にたいする過信」『みづゑ』no.680	
	ク	宮本三郎 ピカソが一つの主題のなかから抽出するものについて。◇「ピカソ版画展をみて」『みづゑ』no.680	
	ク	久保貞次郎 ピカソの版画展を見て、破壊はピカソの生命であると述べる。◇「特集・4 ピカソ版画の意味」『芸術新潮』no.143	
	ク	瀬木慎一 ピカソは、版画だけで美術史上に第一級に位置づけられる大芸術家だと述べる。◇「ピカソの版画 その全貌」『美術手帳』no.196	
	ク	ピカソ版画展 ピカソの1930～60年におよぶ304点の版画展の紹介。◇「ピカソ展より」『美術ジャーナル』no.26（11、12月合併号）	
	12月	M.フグラール(坂崎乙郎訳) ピカソは形体、クレーの制作の体質は色彩にあると述べる。◇「クレーとピカソ」『芸術新潮』no.144	
	ク	宇佐美英治、乗松巖 ジャコメッティとピカソのヴィジョンの違いについてなど。◇「対談 ジャコメッティの芸術 空虚の中の存在の実現」『美術手帳』no.197	
	ク	ピカソ展とクレー展 ピカソ展とクレー展が開催される。◇「クレー展とピカソ展 手帳通信」「デパート時評」『美術手帳』no.197	
1962年 (昭和37)	1月	ピカソの話題 D.D.ダンカンが撮影したピカソ秘蔵の作品集『ピカソのピカソ』について。◇「海外の話題 写真家D.	1～2月、パリのルイズ・レリス画廊でヴォーヴナルグで1959～61年にかけ

		D. ダンカンと知られざるピカソ』『美術手帳』no.199	て制作した油彩画の展覧会が催される。
1月		瀬木慎一 D.D. ダンカン撮影のピカソの未公開作品約500点の作品集が出版されたことで、ピカソの1930年代の全活動が明らかになったと述べる。◇「『ピカソ秘蔵のピカソ』現れる』『芸術新潮』no.145	4～5月、ポール・ローザンベールなどニューヨークの9つの画廊による「ピカソ、アメリカからの賛辞」展が開かれる。総作品数は390点で、カタログをジョン・リチャードソンが制作する。
2月21日		平林たい子 フランス共産党がピカソの除名を思いとまったことについて。◇「共産党と芸術家（下）』『読売新聞』2月21日	5月1日、二度目のレーニン平和賞を受賞する。5～9月、ニューヨーク近代美術館で「ピカソ生誕80年展」が開かれる。
3月		ヨシダ・ヨシエ 日本の戦争画に対して、ヨーロッパの画家が描いた目撃者としての戦争画の例としてピカソの作品を挙げる。◇「変革と批評』『美術ジャーナル』no.27	
4月		宮川淳 キュビズムとピカソの《アヴィニョンの娘たち》についてなど。◇「20世紀美術の視点4 1912年パリ』『美術手帳』no.202	
5月1日		ピカソ、レーニン平和賞受賞 ピカソは1961年度国際レーニン平和賞を受賞する。◇「ピカソら5人レーニン平和賞』『読売新聞』5月1日	
5月		ピカソの話題 ロンドンの競売でピカソの《道化師の死》と《庭にすわった女》に世界最高の値段がついた。◇「海外短信 ピカソ・世界最高の値段つく』『美術ジャーナル』no.29	
6月		東野芳明 パリのベルグリュエーエ画廊から出版された貼紙写真集「ディユルヌ」について。◇「ピカソの「日々の愉しみ」』『芸術新潮』no.150	
7月		瀬木慎一 ニューヨークの9つのギャラリーで開かれた「ピカソ展」を紹介し、アメリカでのピカソの受容について述べる。◇「アメリカにあるピカソ ニューヨークの大ピカソ展』『芸術新潮』no.151	
×		ピカソの新作 ピカソの新作画集《昼食》について。◇「海外の話題 ピカソの新作「昼食」』『美術手帳』no.206	
×		前衛美術会の声明 前衛美術会の発会式の声明文にピカソ、ダリ、マティスを取り上げられる。◇「現代日本の美術の底流 アヴァンギャルドの周辺』『美術ジャーナル』no.31	
9月		坂崎乙郎 芸術の政治的弾圧とピカソの《ゲルニカ》などについて。◇「20世紀美術の視点9 1937年ベルリン』『美術手帳』no.209	
10月		大岡信 ピカソの剽窃の最新作である《食事》のシリーズ(マネの《草上の昼食》を下敷きにしている)を解説する。◇「マネの「草上の宴」の変奏曲 ピカソの古典研究』『芸術新潮』no.154	
×		金子真珠郎 サロン・ド・メに出品されたピカソの《横たわる女》について。◇「11年めにサロン・ド・メ展をむかえて ボンヌ・ニユイ・サロン・ド・メ』『美術手帳』no.210	
11月		ピカソ・ゲルニカ展 出品作品63点のうち1点はゲルニカのタペストリー。国立西洋美術館、久留米、名古屋を巡回。	
×		大岡信 ピカソやミロは大西洋をこえて強い支配力を及ぼしていたと述べる。◇「1948年・ニューヨーク』『美術手帳』no.212	
×		ピカソ・ゲルニカ展 今世紀の記念碑的作品《ゲルニカ》を紹介する展覧会について。◇「ピカソ・ゲルニカ展より』『美術ジャーナル』no.35 (11、12月合併号)	
×		高階秀爾 ピカソは、マネの作品において古典的なものへの復帰を目指したのだらうかと述べる。◇「ピカソの剽窃ー近作「草上の昼餐」』『みづゑ』no.693	



「ピカソ・ゲルニカ展」図録(1962年)

年代	月	日本人のピカソ言及、関連事項 ◇は出典先 ○は日本近現代美術関連 ◎は一般事項	ピカソ関連事項 ○は西洋美術関連 ◎は一般事項
	11月24日	中原佑介 《ゲルニカ》をピカソの最大の傑作、ピカソ芸術の集大成と述べる。◇「ピカソ『ゲルニカ』展をみる」『読売新聞』11月24日	
	12月	藤松博 《ゲルニカ》の習作を「どうにもならなくなった人間の本当の姿を照らし出して、救いを求めている」と述べる。◇「ピカソのゲルニカ」『美術手帳』no.213	
	々	瀬木慎一 パリでピカソ展の準備をしていたことについて。◇「ピカソのゲルニカ」『三彩』no.157	
	々	大島辰雄 《ゲルニカ》はピカソのアポカリプスであると述べる。◇「ゲルニカ怒れるピカソ」『みづゑ』no.694	
1963年 (昭和38)	1月	曾根元吉 ピカソや同時代の芸術家、美術関係者との交流について。◇「20世紀の階段1～12」『美術手帳』no.215～229(1～12月号)	3月9日、バルセロナにピカソ美術館が開館する。
	2月	竹山道雄 《ゲルニカ》とその習作に殷周銅器を連想すると述べる。◇「東京のゲルニカ」『芸術新潮』no.158	
	々	ピカソの話題 ピカソはりファールのバレエの舞台装置デザインをする等。◇「海外の話題 ピカソをめぐる2つの話題」『美術手帳』no.216	
	3月	坂崎乙郎 ヘンリー・ムアの言葉を引用し、ピカソの作品には多分に表現過多、饒舌があると述べる。◇「『ゲルニカ』饒舌」『萌春』110号	
	5月	パブロ・ピカソ(大島辰雄訳編) 1920年代からのピカソの芸術談、ブルトンの「詩人ピカソ」(「ピカソ特集号」『カイエダール』1935年)、サバルテス著『ピカソ 肖像と思い出』(1946年)、『尻尾をつかまれた欲望』戯曲等を紹介。◇「傷ついたミノタウロスの独白Ⅰ～Ⅳ」『みづゑ』no.699、no.701～703(7～9月号)	
	5月17日	ピカソ《サビナ人の略奪》パリのサロン・ド・メにピカソが《サビナ人の略奪》を出品する。◇「パリ画壇の近況 サロン・ド・メを中心に」『朝日新聞』5月17日	
	11月	ピカソ・ゲルニカ展の入場者 石橋美術館の37年度館報によれば入場者最高は「ピカソ・ゲルニカ展」(22,186人)、最低は「第5回西日本洋画新人秀作展」(4,520人)、郷土の新人より、世界のピカソ。◇「手帳通信 美術館活動状況報告より」『美術手帳』no.228	○8月、ブラック死去。10月、コクトー死去。
1964年 (昭和39)	4月	高階秀爾 ラファエロの表現の仕方は、ピカソの芸術観と人間観とをよくわれわれに伝えていると述べる。◇「ピカソの剽窃—近作『画家とそのモデル』『サビニの女たちの掠奪』」『みづゑ』no.710	1～2月、パリのルイズ・レリス画廊で1962～63年の絵画展が催される。春、フランソワーズ・ジローがアメリカの美術批評家カートン・レイクと共同で『ピカソとの生活』を出版する。ブラッサイの回想録『語るピカソ』も出版される。
	々	ピカソの近況 パリのルイズ・レリス画廊でピカソの《画家とモデル》、《サビニの掠奪》などを展示する。◇「海外の話題 ピカソの『画家とモデル』」『美術手帳』no.234	
	々	江原順 1～2月にかけてルイズ・レリス画廊で催されたピカソ展を見て、幸福になったと所感を述べ、《サビニの掠奪》について論じる。◇「ピカソ1964年展」『芸術新潮』no.172	
	5～8月	ピカソ展・その芸術の70年 ピカソの1899～1963年までの作品の回顧展が東京国立近代美術館で開かれる。京都、名古屋へ巡回。	
	5月25日	カーンワイラーの講演会 ピカソ展を機に来日し、毎日ホールで講演する。◇「ピカソとの60年」『みづゑ』no.713	
	6月	大島辰雄(編) モーリス・レイナル、ポール・エリュアール、ギョーム・アポリネールなどのピカソに関する批評の紹介。	

	<p>6月 ◇「ピカソの歩み 巨匠をめぐる批評年代記」『みづゑ』no.712 生野幸吉 ピカソの青の時代について論考する。◇「青のピカソ」『芸術新潮』no.174</p> <p>6月5日 谷川俊太郎 ピカソは特殊ではなく、普通なのだと述べる。 ◇「ピカソ展をみる」『読売新聞』6月5日</p> <p>7月 G.ブーダイユ(小海永二訳) 東京開催のピカソ大回顧展への期待。◇「特集 ピカソ展 20世紀とピカソ」『美術手帳』no.238</p> <p>◇ 江原順 戦後初めてサロンに出品したピカソについて。◇「特集 ピカソ展 1944年のサロン・ドートンヌとピカソ」『美術手帳』no.238</p> <p>◇ 中原佑介 ピカソが日本に紹介されてから半世紀にわたるピカソ像について。◇「特集 ピカソ展 日本におけるピカソ像」『美術手帳』no.238</p> <p>◇ ピカソの話題 美術関係者のピカソに対するアンケート調査など。◇「海外の話題 アンケート「ピカソ1964年」、ピカソのアトリエへの招待」『美術手帳』no.238</p> <p>◇ 宮川淳 ピカソを絵画の外で捉えようとすれば、必然的にピカソの芸術を見失ってしまうと論じる。◇「ピカソ芸術の70年」『美術手帳』(増刊)</p> <p>◇ 北園克衛 ピカソの彫刻に一貫して流れているのは、彼の詩や劇のような文学作品と同じように絵画的であると論じる。 ◇「画家ピカソのもうひとつの絵画」『美術手帳』(増刊)</p> <p>◇ 末永照和 ピカソと関係のあった詩人や芸術家たちについて。 ◇「ピカソと芸術家たち」『美術手帳』(増刊)</p> <p>◇ 瀬木慎一 ピカソの天才を支えてきた人々について。◇「ピカソを支えてきた人々」『美術手帳』(増刊)</p>	
1965年 (昭和40)	<p>1月 瀬木慎一 フランソワーズ・ジローの回想録『ピカソとの生活』の最終章の部分の文章の訳出を紹介する。◇「ピカソの裏側 ピカソとの愛の破綻」『芸術新潮』no.181</p> <p>3月 坂本繁二郎 《ゲルニカ》について、「ただ変な絵をこしらえただけで、どうしてあんなに有名になったかわからない」と述べる。◇「インタビュー “明治” 坂本繁二郎 きき手・東野芳明」『美術手帳』no.249</p> <p>4月 宗左近 ピカソの陶器の真贋問題について述べる。◇「複製だったピカソ陶器」『芸術新潮』no.184</p> <p>7月 ピカソの話題 F.ジローの回想録『ピカソとの生活』出版に対しての40人の芸術家たちによる抗議について。◇「海外の話題 裏切られたピカソ?」『美術手帳』no.254</p> <p>7月10日 高階秀爾 ピカソ以後50年、西洋と日本との現代絵画に意外に大きな落差があると述べる。◇「絵画における人間性探究」『読売新聞』7月10日</p> <p>8月 ピカソの話題 ピカソ画廊として知られるルイズ・レリス画廊さえ、無名の新人の個展を開く理由について。◇「海外の話題 新しいピカソは可能か」『美術手帳』no.256</p> <p>10月 渡辺武二郎 ピカソとの出会いを回想する。◇「わが胸の上のピカソ」『芸術新潮』no.190</p>	<p>6〜9月、トゥールーズのオーギュスタン美術館で「ピカソと舞台芸術」展が開かれる。11月、ヌイイで潰瘍の手術を受ける。パリにも立ち寄るが、これが最後のパリ滞在となる。</p> <p>◎ベトナム戦争始まる</p>
1966年 (昭和41)	<p>2月 ルイ・ゴルデヌス他(辻邦生訳) ピカソへのインタビューについて。◇「巨匠訪問2 ピカソ」『美術手帳』no.263</p> <p>11月 曾根元吉 シチューキンのピカソ作品の収集について述べる。 ◇「蒐集家の栄光 シチューキンとモロゾフをめぐって」『みづゑ』no.742</p>	<p>9月28日、アンドレ・ブルトン死去。11月フランス政府主催のピカソ回顧展がグラン・パレ、プティ・パレで開催され、700点以上の作品が出品される。これに関連してパリ国立図書館で、ピカソの版画展が催された。</p>

年代	月	日本人のピカソ言及、関連事項 ◇は出典先 ○は日本近現代美術関連 ◎は一般事項	ピカソ関連事項 ○は西洋美術関連 ◎は一般事項
1967年 (昭和42)	2月	福島慶子 グラン・バレとプチ・バレで開催したピカソ85歳記念大回顧展と、1932年のジョルジュ・ブティ画廊で催したピカソ展との比較について。◇「パリのピカソ85歳記念大回顧展をみて」『みづゑ』no.745	1月、レジョン・ドヌール勲章を辞退する。6～8月、ロンドンのテート・ギャラリーで、ピカソの彫刻や陶芸作品の展覧会が開かれる。これはローランド・ベンローズが企画し、10月からニューヨーク近代美術館へ巡回する。
	々	香月泰男 ピカソの85歳記念の大回顧展を見て、ピカソへの関心について述べる。◇「ピカソの作られた偉大さ」『みづゑ』no.745	
	4月	瀬木慎一 ピカソ作品の贋作の見分け方などについて。◇「ピカソの贋作」『芸術新潮』no.208	
	6月28日	アメリカでの《ゲルニカ》騒動 アメリカ人芸術家グループがベトナム戦争に抗議し、ニューヨーク近代美術館の《ゲルニカ》撤収を要望する。◇「アメリカで「ゲルニカ」騒動」『読売新聞』6月28日	
	12月2日	ピカソの話題 ベトナム戦争に反対し、サルトル、ピカソらが「ベトナム支持知識人デー」を呼びかけた。◇「ベトナム人民の苦しみ終らせよ」『朝日新聞』12月2日	
1968年 (昭和43)	1月	中原佑介 ニューヨーク近代美術館でピカソの彫刻展を見て、ピカソの現代彫刻のあらゆるタイプの片鱗を垣間見たと述べる。◇「彫刻家・ピカソ」『芸術新潮』no.217	2月13日、サバルテス死去。ピカソは彼を偲んで、連作《ラス・メニナス》をバルセロナのピカソ美術館へ寄贈する。12～翌年2月、パリのルイズ・レリス画廊で、版画347シリーズの展覧会が開かれる。
	2月	高橋巖 ピカソの《アヴィニヨンの娘たち》には形式上だけでなく、精神の問題が提出されていると述べる。◇「ヨーロッパの闇と光②」『芸術新潮』no.218	
	2月6日	吉田秀利 バーゼル市立美術館のピカソの《座ったピエロ》売却に対して住民投票で守ったことについて。◇「民主主義とピカソ」『朝日新聞』2月6日	
	11月	栗津則雄 ピカソの制作上の変貌が舞台と芸人との密接な関わりを持っていると述べる。◇「ピカソと演劇」『芸術新潮』no.227	
1969年 (昭和44)	3月	瀬木慎一 ピカソ芸術のエロティカを論じる。◇「ピカソ「エロティカ」」『芸術新潮』no.231	3月、ジャクリーヌの肖像を完成する。
	11月	澁澤龍彦 ピカソの版画347には、自分の頭にあるエロティシズムとは何か異質のものを感ずると述べる。◇「エロティシズム頌 ピカソの版画347」『みづゑ』no.778	
1970年 (昭和45)	1月	東野芳明、他 今日の天才の存在について、ピカソは「才能のスーパーマーケット」（東野芳明）、「20世紀の天才」（針生一郎）、「異種混合の天才」（瀬木慎一）、「20世紀最後の天才」（藤枝見雄）など。◇「天才は今日は認められない」『芸術新潮』no.241	1月、スペインのピカソの家族が所蔵していた作品が、バルセロナのピカソ美術館へ寄贈される。9月12日、クリスティアン・ゼルヴォスが死去する。10～11月、ニューヨーク近代美術館でリヴァ・カステルマン企画による「ピカソ、版画の巨匠展」が開かれる。
	々	遠山一行 ストラヴィンスキー、ピエール・ブーレーズとピカソの《アヴィニヨンの娘たち》について。◇「私の一枚」『みづゑ』no.780	
	2～3月	ピカソ近作版画展 東京国立近代美術館で開催される。	
	3月	西脇順三郎 パリ、シカゴ、東京で展示されたピカソ・エロチカの連作版画展について述べる。◇「ピカソ・エロチカを見せる日本の判定」『芸術新潮』no.243	
	4月20日	須磨コレクション寄贈 ピカソなど92点の須磨弥吉郎(元スペイン特命全権公使)のコレクションが長崎県に寄贈される。◇「須磨コレクション寄贈」『読売新聞』4月20日	
	5月7日	ピカソの話題 ピカソ、サルトルら米国のベトナム撤退を要求した。◇「ピカソ、サルトル氏らも要求」『朝日新聞』5月7日	
	8月	鳥居敏文 ピカソの少年時代の作品を、ピカソ芸術の根元を	

		なす彼のたぐいまれな多面的な描写力・写実力の萌芽をここに見ると述べる。◇「ピカソ14歳の作品」『芸術新潮』no.248	
1971年 (昭和46)	3月 〃 6月 10月 11月6日	村木明 昨年開館したバルセロナのピカソ美術館について。◇「バルセロナにできたピカソ美術館」『芸術新潮』no.255 巨匠90歳記念・ピカソ展 日本橋高島屋、大阪へ巡回 嘉門安雄 ピカソの《貧しき食事》の価格などについて。◇「一千万円のピカソの版画」『芸術新潮』no.258 黒江光彦 ヴェロリスにあるピカソの《戦争と平和》の壁画に絵が描かれた事件について。◇「塗りつぶされたピカソの絵」『芸術新潮』no.262 ピカソの話題 ピカソが共産主義者という理由で、マドリードの画廊に展示されていたピカソの作品を壊す。◇「ピカソの絵26点こわす」『朝日新聞』11月6日	冬、ピカソの最初の金属を使った構成彫刻《ギター》(1912年)がニューヨーク近代美術館へ本人より寄贈される。 4～6月、パリのルイズ・レリス画廊で、1969～71年にかけて制作したデッサン194点が展示される。
1972年 (昭和47)	1月	村木明 ピカソ90歳の誕生日にちなんでフランスの文芸週刊誌『レ・レットル・フランセーズ』が若手作家におこなった「私のピカソ観」というテーマのアンケート結果について。◇「ワールド トピック ピカソと新しい世代」『みづゑ』no.804	1～2月、ニューヨーク近代美術館で、ウィリアム・ルービンによる「ニューヨーク近代美術館所蔵のピカソ展」が開かれる。12～翌年1月、パリのルイズ・レリス画廊で、1971年11月21日～72年8月8日迄に制作したデッサン展が開かれる。
1973年 (昭和48)	3月 4月9日 5月 〃 6月 〃 〃 〃 〃 〃 〃	栗津則雄 ピカソには、本質的な衰退のきざしを認めることが出来ないと述べる。◇「天才と没落」『芸術新潮』no.279 ピカソ死去 8日午前11時40分(日本時間同日午後7時40分)南仏カンヌに近いムージャンの自宅で死亡。「アメリカ、フランス、ドイツと同じくらい日本でのピカソ展の回数は多く、ピカソとは縁が深かった。」(瀬木慎一)、「ピカソの死は20世紀の「美術の記念碑」の崩壊を告知しているようだ。」(小川正隆)、「モンパルナス時代から過去40年間、日本の画家が受けたピカソの影響は、測り知れないほど大きなものがある。」(荻須高德)等 ◇「巨匠ピカソ死去」、「巨大な足跡残した鬼才 ピカソの死、大きな波紋」、「生きた美術史 人間愛を描く」、「ピカソ祭近いのに実に残念」『朝日新聞』4月9日 瀬木慎一 ピカソの90年の画業を振り返り、各時代の代表作品を解説する。◇「特集 ピカソ90年」『芸術新潮』no.281 ピカソ・51点のリノカット展 東京フジテレビギャラリー ピカソ死去の反響 「描く欲望だけに生きられた幸福な芸術家」(池田満寿夫)、「人間的魅力に惹かれた」(福沢一郎)、「私は「ピカソ」になりたくない。ならないつもりである」(岡本太郎)、フランス他各国の反響など。◇「特集 ピカソ最後の個展」『芸術新潮』no.282 藤枝晃雄 ピカソの変貌した芸術について述べる。◇「ピカソはピカソであるーピカソの死」『みづゑ』no.819 金子光晴 ピカソをとりこしてすすむ道が、未来の人間の前に新しくひらいていと述べる。◇「ピカソの死」『芸術生活』(特集ピカソ・天才の終焉)no.286 内村剛介 ピカソは死には応えていなかったと述べる。◇「英雄ピカソのあがき」『芸術生活』(特集ピカソ・天才の終焉)no.286 宮川淳 ピカソと現代社会の関係について。◇「神話としてのピカソ」『芸術生活』(特集ピカソ・天才の終焉)no.286 瀬木慎一 ピカソの多作について。◇「パブロ・ピカソ」『三彩』(特集パブロ・ピカソ)no.303 大島辰雄 ピカソの転身について。◇「ピカソの死」『三彩』	4月8日、ピカソ、ムージャンにて死去。 ヴォーヴナルグ城の敷地内に埋葬される。



年代	月	日本人のピカソ言及、関連事項 ◇は出典先 ○は日本近現代美術関連 ◎は一般事項	ピカソ関連事項 ○は西洋美術関連 ◎は一般事項
		(特集パブロ・ピカソ) no.303	
	6月	吉田知子 ピカソが天才であるために敬遠する。◇「ピカソについて」『三彩』(特集パブロ・ピカソ) no.303	
	〃	利根山光人 ピカソと出会うまでを回想する。◇「ピカソとの会見」『三彩』(特集パブロ・ピカソ) no.303	
	〃	神原泰 本当のピカソをこれから研究し得るであろうと述べる。◇「サインするピカソ」『三彩』(特集パブロ・ピカソ) no.303	
	7月	瀧口修造 ピカソを巨像化してしまったことについて。◇「ピカソの詩」『ユリイカ』(特集ピカソ)	
	〃	遠山一行 ピカソのやった仕事が現代のさまざまな問題に触れると述べる。◇「ピカソとストラヴィンスキー」『ユリイカ』(特集ピカソ)	
	〃	松本俊夫 ピカソが映画に着手しなかったことについて。◇「ピカソ・映像・ラス=メニナス」『ユリイカ』(特集ピカソ)	
	〃	東野芳明 ピカソが戦後美術を遠くからおびやかしたつづけたのは奇妙なことであると述べる。◇「ピカソ断想」『ユリイカ』(特集ピカソ)	
	〃	利光哲夫 ピカソはシュルレアリスム演劇の一翼を担った劇作家であると述べる。◇「ピカソ 偉大なる演劇人」『ユリイカ』(特集ピカソ)	
	〃	富岡多恵子 ピカソとガートルード・スタインの交流について。◇「ピカソとスタイン」『ユリイカ』(特集ピカソ)	
	〃	高階秀爾、粟津潔、川端香男里 ピカソとその時代空間等について討議する。◇「共同討議 ピカソと20世紀芸術」『ユリイカ』(特集ピカソ)	
	〃	末永照和 ピカソに手を焼いたのはほかならぬピカソ自身であったと述べる。◇「アルルカンの遺言」『ユリイカ』(特集ピカソ)	
	〃	織田達朗 ピカソは「ある価値でないものに向って開かれてある世界を、特権的な価値が擁護される形式のなかに置いた」と述べる。◇「代名詞の終り」『ユリイカ』(特集ピカソ)	
	〃	神吉敬三 「ピカソにとって重要なのは、人間そのものであって、主義主張ではなかったのである」と述べる。◇「ピカソとスペイン」『ユリイカ』(特集ピカソ)	
	〃	饗庭孝男 「ただの一度もピカソの全体像を理解しようと思ったことはない」と述べる。◇「青いスペイン」『ユリイカ』(特集ピカソ)	

\* ピカソについては主に William Rubin (ed.): *Pablo Picasso. A Retrospective*, The Museum of Modern Art, New York (W. ルービン編集 山田智三郎・瀬木慎一監修『パブロ・ピカソ 天才の生涯と芸術』旺文社、1981年)を参考にした。

## 美術館案内 Guide to the Museums

### ブリヂストン美術館

### Bridgestone Museum of Art

所在地 東京都中央区京橋1-10-1(〒104-0031)  
TEL (03) 3563-0241

URL <http://www.bridgestone-museum.gr.jp>

開館時間 午前10時～午後8時(火～土)

午前10時～午後6時(日・祝)

休館 毎月曜日 年末年始

入場料 個人:

一般 800円 シニア(65歳以上) 600円

大・高生 500円 中学生以下無料

団体(15名以上):

一般 600円 シニア(65歳以上) 500円

大・高生 400円 中学生以下無料

なお、特別展の場合は変更することがある。

Address 1-10-1, Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo  
104-0031, Japan

Phone +81 (3) 3563-0241

Hours 10:00 to 20:00 (Tuesday-Saturday)

10:00 to 18:00 (Sundays, national holidays)

Closed on Mondays, New Year holidays

Admission Individual:

Adults ¥800; Seniors 65 or over ¥600;

Students ¥500; Children under 15 free

Group (15 or more):

Adults ¥600; Seniors 65 or over ¥500;

Students ¥400; Children under 15 free

Different fees will be charged during special exhibitions.

### 石橋美術館

### Ishibashi Museum of Art

所在地 福岡県久留米市野中町1015(〒839-0862)  
TEL (0942) 39-1131

URL <http://www.ishibashi-museum.gr.jp>

開館時間 午前10時～午後5時

休館 毎月曜日 年末年始

入場料 個人:

一般 500円 シニア(65歳以上) 300円

大・高生 300円 中学生以下無料

団体(15名以上):

一般 400円 シニア(65歳以上) 200円

大・高生 200円 中学生以下無料

なお、特別展の場合は変更することがある。

Address 1015, Nonaka-machi, Kurume-shi,  
Fukuoka-ken 839-0862, Japan

Phone +81 (942) 39-1131

Hours 10:00 to 17:00

Closed on Mondays, New year holidays

Admission Individual:

Adults ¥500; Seniors 65 or older ¥300;

Students ¥300, Children under 15 free

Group (15 or more):

Adults ¥400; Seniors 65 or older ¥200;

Students ¥200, Children under 15 free

Different fees will be charged during special exhibitions.

(2008年12月現在)

---

# 石橋財団職員

常務理事                      中山     暁

## 事務局

---

事務局長                      遠藤   長夫  
総務課   総務課長          森田麻利子  
                                 鈴木   弥生

## ブリヂストン美術館

---

館長	島田   紀夫	学芸グループ	貝塚     健
部長	桐生     隆		中村   節子
総務グループ	金森   大輔		塩島   明美
	塚田美香子		久野   朝子
	石川   久子		田所   夏子
	小原田鶴子		

## 石橋美術館

---

館長	平野     実	学芸課   学芸課長	森山   秀子
総務課   総務課長	後藤   純子		植野   健造
	富松   弘美		平間   理香
	原     朋子		伊藤絵里子
	平島たか子		

2008年12月31日現在



